

生命と仏法を語る

上巻

池田大作

上卷 目次

第一章

出生の不可思議

9

はじめに 仏法を志向した人々 出生と潮の干満 地球は一つの生命体 生命ほど不可思議なものはない 運命と宿業のドラマ 人格、体質は遺伝を超えられるか 人間の条件とは 医学と仏法の役割について

第二章

「生命」の永遠性とは

59

「出生」の意義 母の「胎内」は尊厳なる「宝浄世界」 大宇宙の本源の働き 深遠な仏法の生命観 科学と宗教の関係 人類の意識を変えた一枚の写真 「老化」のナゾ 要請される「人類のための宗教」

第三章

仏法は「生老病死」をどう超えるか

91

一生を価値あるものに 仏典に登場する名医たち 関心を集める「インド医学」「仏教医学」 真実の仏教は科学を否定しない 仏法は人生の医学 「成長」のピークは二十五歳 自分自身の老化を知るには 「永遠でありたい」という願望 仏法で説く「不老不死」 「常楽我浄」の人生へ

第七章

生命の法理「蓮華」

277

古代インドの蓮華觀 世界的にも尊ばれた蓮華の花 少年時代のハスの思い出
「千葉」という地名の由来 鳩摩羅什の見事な翻訳 「無明法性一体」は生命の実態
時代を開く「因果俱時」の大法 大聖人の「一法」のみが悟りの法門 無限の価値を生み出す「信」の人生 光彩を放ちつつ昇る太陽の「法」 よき根本原因を作るための信仰

第四章

人生の幸福・仏法の死生観

143

医学的に証明された「生涯青春」 年齢ではきまらない人生の価値 大聖人の御入滅は六十一歳 高齢者に大切な精神的充実感 心の病は「八万四千」 仏法で説く「業」の内容 急激な進歩を遂げた遺伝子研究 人間にのみ可能な「業」の転換 外見ではわからない人間の幸、不幸 “永遠”を決定する「一念」の強さ

第五章

「脳と心」の神秘を探る

185

「春」の表現にも細やかな感受性が 一草一本といえども生命の当体 泥沼のなかでも清浄無垢に 科学も哲学も宗教も「生命」に帰着 百年前の万博に「健康機器」が 科学技術の世紀から人間の世紀へ 人間と自然の絶対の「調和」が必要 急速に解明すすむガン細胞 「脳」も、仏法で説く「色法」のひとつ 宇宙大に広がる「九識」の存在 「一念」に収まる森羅三千の法

第六章

生命尊極の境涯「仏界」

231

「一念」のもつ無限の可能性 「一念三千」の事実の現象 六道輪廻する生命にも「尊厳性」が 「無顧の悪人」にも菩薩の心 大宇宙のごとき静寂、清浄の世界へ 国土や草木も人間精神と不可分 脳の優劣は後天的努力できまる 鍛えるほど活発化する神経細胞 興味深い「脳と心」の研究 日本人は右脳型、西欧人は左脳型

第一章 出生の不可思議

はじめに

——まえに小社で出版させていただいた『仏法と宇宙』を語る』（潮出版社刊）は、たいへんな反響をよびました。

ひきつづき、一日も早く次の企画を、との声が高まっております。今回このように、医学の若き研究者であり、東大医学部付属病院研究室で、診療と基礎研究の両面にわたって、精進しておられる屋嘉比博士^{やかひ}にも参加していただき、思う存分に、この現代の課題を語りあっていただきたいと思います。

屋嘉比 こちらこそ、どうぞよろしく願います。

このような重要な企画に参加することについて、いまだ若いのでちゅうちよしましたが、すべて自分の勉強になると思い、参加させていただくことに肚^{はら}をきめました。

池田先生、よろしく願います。

池田 こちらこそよろしく——。私は医学にはまったく素人なので、勉強させていただき
ます。

——本来は、名誉会長と屋嘉比博士との対談形式で進めていくことを考えておりましたが

……。

しかし、今回のようなむずかしい問題の場合は、司会者が入ったほうが、展開がよりスムーズにいくのではないかという意見もあり、はなはだ僭越せんえつですが、私が司会役をつとめさせていただきます。

屋嘉比 そのほうがよいと思います。二人だけの対談だと、議論に終始するおそれがありますから。

池田 たしかにそうですね。

ともすれば、たがいの目的を忘れ、読者を忘れた議論が多くなりがちですから。

——なお、『仏法と宇宙』を語る』の場合でもそうでしたが、池田先生は、つねに若い研究者の方と対話されています。

これはたいへんすぐれた、未来を先取りした姿勢で、感服にあたいするものである、との識者の感想が寄せられておりました。

池田 いやどうも。若い人のほうが、私自身、新鮮な勉強ができるからです。

屋嘉比 浅学で恐縮ですが、ご期待にそえるよう、全力で取り組みます。

——それから、これはご報告ですが、おかげさまで、当社刊行の『仏法と宇宙』を語る』（全三巻）は、昭和五十九年の部門別ベストセラー（ノンフィクション）の第一位になります。



生命と仏法に関して幅広い論議を展開する、左から屋嘉比康治、池田大作、碓井昭雄の各氏。

した。

池田 そうですか。それはよかったですね。さらに勉強し、いつの日かふたたび論じなければならぬと反省しておりますが。

屋嘉比 私も読ませていただきましたが、「人間」と「社会」と「宇宙」とをつらぬいたあのてい談は、われわれが二十一世紀へと進む大きなステップを踏んだとみえますね。

——ありがとうございます。

たしかに、仏法と、そして宇宙にまで広げた深遠な問題に対し、多くの読者の方々に、哲学と宇宙観を思索していく土壌をつくっていただいたと思っております。

池田 ちょっとむずかしすぎたとも思っておりますが……。

全般的に、もっとわかりやすく、もっと気軽

に読めるように論じなければならぬのですが、どうしてもむずかしくなってしまう。(笑)

屋嘉比 それは、しかたがないと思います。どうしても専門的な表現しかない場合が多くありますからね。

池田 今回の「生命と仏法を語る」も、同じような形態になってしまいかもしれませんが、その点どうか、ご了解いただきたい。

仏法を志向した人々

——『仏法と宇宙』を語る』は、海外からも多くの反響がありました。すでに『潮』連載中から、イギリスの有力出版社からも、英語版の版權取得の求めがあつたほどです。

池田 うかがっています……。

屋嘉比 英語版を出版したいというのは、それだけ海外でも、仏教に対する関心がたかまわっているということでしょうね。そのほかに何か反響がありましたか。

——そのイギリスの出版社は、欧米の各国に、支社をもっています。その関係者からの手紙に、ヨーロッパ社会と仏法の出会いについて書いたものがあります。

屋嘉比 具体的には、どういふことですか。

——十八世紀中ごろから十九世紀の初めにかけて、ヨーロッパでは、わずかですが、仏典が英語、ラテン語などに訳されはじめますね。それを見てゲーテなどが「驚嘆した」といつていたそうです。

池田 そうした事実は聞いています。それらの仏典はサンスクリット語やパーリ語という、いわばラテン語のようなむずかしい言語で書かれていました。

当時のイギリスやフランスの学者は、仏法を知るために、言葉を学ぶところからはじめたわけです。そのことだけでも、たいへんに真摯な、仏法を求める姿といっているでしょう。

屋嘉比 なるほど。ゲーテは、もちろん仏法の全体など知りえていないわけですね。

池田 そうです。垣間^{かいま}みたていどでしょう。

——以前、長野で、名誉会長は、青年たちに、ゲーテの『ファウスト』についての所感を語られておりました。私はそれを新聞で読み、このように仏法の観点からとらえるものかと感銘しました。

池田 ゲーテは、名作『ファウスト』の第二部を書きあぐねていた時期がありますね。

——有名な話です。文豪シラーに宛^あてたゲーテの手紙などには、息子の死を契機に書きはじめるとありますから、それが精神的な転機とみられています。

池田 それも事実だと思います。だが、そのころ、彼はインド古代の宗教叙事詩『シャク

ンタラー』を読み、「底の知れないほどの傑作」と語っています。

——なるほど。それは、はじめて聞く話ですね。

池田 ゲーテは早速、その形式を求道の実践に出発するファウストの「天上の序曲」に使ったようですね。ただ残念なことには、晩年のゲーテは、仏法を求めながら、じゅうぶんに知りうる条件に恵まれていなかったといえるでしょう。しかし、彼が仏法を志向したという事実とその影響は、その後も残っている。

屋嘉比 具体的には、どのようなことですか。

池田 有名な哲学者ショーペンハウアーは、ゲーテの影響のもとに、彼なりにインド哲学や仏法の研究をし、彼の哲学を体系づけています。

屋嘉比 ほかにも誰かいますか。

池田 歌劇の王といわれたワーグナーは、ゲーテやショーペンハウアーのそうした影響を、もつとも強く受けています。

屋嘉比 どのようにでしょうか。

池田 彼の場合は、ついには仏法に帰依きえしていますから、はつきりしています。

屋嘉比 超一流の文学者、哲学者、音楽家たちが、仏法を志向していたといえるわけですか。

池田 そのとおりです。事実、彼らの影響で、こんにち、文豪とか、一流の思想家といわれている人々が、多く仏法へ向かっています。

屋嘉比 私たちの知っているような人物では誰ですか。

池田 そうですね。ロシアではトルストイ、フランスではビクトル・ユゴー、アメリカではホイットマンなどです。

屋嘉比 そうした事実の記録はあるのでしょうか。

池田 あります。詳しくは別の機会に論じたいと思いますが、この勢いが日本にもまわりまわって逆に上陸し、その結果、日本の文学者たちが仏典への関心を深める契機になったという事実は、おもしろいと思っています。

——芥川龍之介などが、仏教説話を読みはじめたというようなことでしょうか。

池田 そうです。当時のドイツ文学界の影響です。

さらにヨーロッパについてみれば、だいぶ時代は後になりますが、フランスの有名な哲学者^{*}ベルグソンや、スイスの心理学者ユングなどが、仏法に肉迫し、生命の問題を思索する重要な糧^{かて}にしています。

ただひと言だけ申しあげておきたいことは、そうした努力も、仏法の全体像^{しやくもん}というか、本質^{じよん}からみると、まだまだ迹門・爾前^{にぜん}ともいえないくらいの序分^{じよぶん}にすぎないということです。

屋嘉比　そうしますと、科学者も含めて、世界の人々が本格的に仏法と取り組むのは、これからの時代とみてよいですか……。

池田　そうです。また、そうでなければ、人類は、期待をこめて二十一世紀を語ることはできない。

——小社で池田先生のてい談『生命を語る』を、だいぶ前に出版させていただきましたが、たいへんな数の投書がありました。

いかにいまの社会が「生命」というものに対し、深い関心をもっているかがうなずけました。

池田　『生命を語る』のなかでも、相当ひろく論じたつもりですが。時代も急速に進歩していますし、なんとか新しい視点で思考していくようにしたいと思います。

ただ当然、以前の『生命を語る』で論じた範^{はん}ちゅうも含まれてくることを、ご了承願いたい。——それは当然なことです。

屋嘉比　それはやむをえないと思います。

私もこの対談にあたって、『生命を語る』を読みかえしてみました。

川田（洋一）博士らもよく研究なされ、たいしたものだと思います。私も川田博士の着眼点には、大いに賛同するところが多いのです。

今度は私は私なりに、研究者としての観点から、思索してみたいと思います。

——この「生命」の問題は、時代が進むにつれて、さらに深い関心が呼び起こされてくるテーマであると思います。

そこで、ご多忙のところ恐縮ですが、この対談で、何回でも論じていただければ、ありがたいのですが……。

屋嘉比 わかりました。池田先生がよろしければ、私も努力します。

出生と潮の干満

池田 そこで屋嘉比さん、人間の誕生ということですが、その時刻は、引き潮しほのときよりも、満ち潮しほのときに多いと、よくいわれるようですが、実際はどうなんでしょうか。

屋嘉比 たしかに、そういう傾向があるようにも思えます。

池田 この点については医学的には、まだ本格的に解明されていないのですか。

屋嘉比 まだ一部の学者の研究にとどまっていますね。

池田 たしか大正の末か昭和の初めごろでしたか、大阪の医学者が調べた例について聞いたことがあります。

屋嘉比 ええ、その調査は『中外医事新報』の古いのにあったと思います。やはり満潮まんちょうに

出産が多く、干潮かんちょうに亡くなる例が多かったようです。また、アメリカのメナカー博士らの研究によると、出産はやはり月の運行と関係があるらしく、満月の日に多いようです。

池田 誕生の時刻は、真夜中のほうが昼間より二倍も多いと聞いたことがあります。

屋嘉比 私もそういう説を読んだことがあります。

池田 統計的には何時ごろがいちばん多いのですか。

屋嘉比 朝の四時前後ともいわれています。

——私もおふくろから朝方に生まれたと聞いています。(笑)

屋嘉比 その日が満月なら、たいへんリズム正しい生まれ方ですね。(大笑)

池田 受胎のときも、満ち潮のときが多いと聞きますが、なぜですか。

屋嘉比 科学的な説明は十分ではありませんが、母親の胎内で、卵胞から卵子が排卵される時刻は、満ち潮のときと関係があるという研究があります。

卵子は数時間しか生きないともいわれていますので、その説によれば、この間に受精する確率が高くなることが考えられます。

池田 誰の研究ですか。

屋嘉比 スウェーデンの化学者、アレニウス博士です。博士は一万人以上の女性を調査し

ています。

それと、これは潮しほの干満の研究とは違いますが、太陽の出ない長い夜のつづく冬の間、エスキモーの女性は生理がなく、妊娠しないといわれており、同様のことが南極地方の女性についても記録があります。

池田 不思議なことですね。



浜辺で産卵して海に戻るウミガメ。

屋嘉比 また、アメリカでは秋から冬にかけて受精することが多く、もっと寒いドイツでは春から夏にかけて多いとの報告もあります。さらに、ニワトリは、夜間ずうつと電灯をつけていると一年中卵を産むようです。

このように、生殖活動と陽の光や季節など自然の変化とも関係があるようです。

——ウミガメは、満月の夜に浜辺で産卵するとかいわれているようですが。

屋嘉比 ウミガメは、かならずしも月夜とは限らないようですが、ウニなどある種の海中動物の生殖活動は、月の運行と関係があるという調査はあります。

池田 それにしても、人間の身体は六〇パーセント以上が水分ですね。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 そうすると、身体の中かで潮の満ち引きがあっても不思議ではない。

屋嘉比 ええ。それについては、ユニークな説ですが、バイオタイド（生物学的な潮汐）理論というのが提唱されています。

これは、生体には、さまざまな天体、とくに月の影響が認められるという考え方で、生体のなかにも、海の潮汐（潮の満ち引き）と同じような現象がありうるのではないか、というものです。

池田 ともかく昔から、タイミングがよいことを「今が潮時しおどき」というが（笑）、経験上、

人々が何ものかを感じていたことは事実といってもいいでしょう。

——ところで子供の誕生ということは、どこの国でも、どの民族でも、お目出たいことで
すし、慶よろこび事ごとにもなっています。

そういう誕生にまつわる習俗として、いまでも、子供が生まれると、すぐ湯浴ゆあみをさせ、
地面に一度おいてから抱きあげるといふ風習が残っているようですが。

池田 おそらく、生命は大地から誕生したということを象徴しているのでしょうね。「母
なる大地」といふ観念は、東西を通じて、広く行きわたっていますからね。

——アンデルセンには「コウノトリ」といふ童話がありますね。コウノトリは、子を守る
愛情の深い鳥といわれています。この鳥に立派な子供を運んできてもらおうという話ですね。

池田 この童話が、またたく間に世界に広がり、いまなお愛されているのは、健すこやかな子
を願う人々の素朴な願望が心の奥にあるからでしょうね。

屋嘉比 仏法では、どうでしょうか。

池田 『法華經』の法師功德品ほつしくどくほんという経文には、「安楽あんらく産福さんふく子」と説かれている。それは、
生命のきれいな、福運に満ちみちた子供を、祈り願ったとおりに授かるとの経文です。

また日蓮大聖人の御書（日蓮正宗大石寺版『日蓮大聖人御書全集』以下、本書では御書、
御文という）には、出産の喜びを表現して、

「しを（潮）の指すが如く春の野に華の開けるが如し」（『月満御前御書』一一一〇御書の
頁数、以下同じ）

と説かれてもおります。

屋嘉比 すばらしい表現ですね。

——生命の「生」という文字には、何かしら春の野原のイメージがあるのでしょいか。

池田 そう思います。

「生」とは、象形文字的にわけると、古来、「土」と「牛」とに分けているようです。

屋嘉比 ああそうですか。その象形文字の「牛」は、どういう意味になりましたようか。

池田 私もよくわかりませんが、何かの字典に、大地に勢いよく萌え出づる草花であるという説があります。「土」は、万物を産み出す生命力の象徴とされています。

またこれは、私のまったくの我見ですが、「牛」は「千」という意義にもとれるのではないかと思います。

ですから、草花がたくさん咲き薫っているというイメージがある、と思われれます。

——生命の若々しき息吹をあらわしていることになりますね。

池田 大聖人の御文のなかに、「総勘文抄」（『三世諸仏総勘文教相廃立』）という御書があります。そのなかに、

「春の時来りて風雨の縁に値いぬれば無心の草木も皆悉く萌え出生して華敷き栄えて世に値う気色なり」(五七四)

とも説かれています。

ですから「生」とは、まさしく大地より湧き出づる「生命」の、なんとも生きいきとした状態を表現している。ゆえに、すがすがしい鼓動であり、リズムであり、躍動しゆく「新生」の状態を指すということになるでしょうか。

屋嘉比 すばらしい御文ですね。

池田 また、「御義口伝」という御文のなかでは、一步深い次元から表現しておられる。

それは、「從地涌出の菩薩」ということについて、

「從地とは十界の衆生の大種の所生なり、涌出とは十界の衆生の出胎の相なり」(七九九)と説かれています。少々むずかしいんですが。(笑)

——「從地涌出の菩薩」とは「地涌の菩薩」のことですね。

池田 そうです。ここでは、別して日蓮大聖人のことですが、総じて私たちの立場に約して、わかりやすいえば、現代において妙法を信受した信仰者に対しての表現ととれます。さらに、生命論のうえから拝するならば、「十界の衆生」すなわち、すべての生命は、とごとく「從地涌出の菩薩」であると、普遍的に説かれています。

ごく簡単にいいますと、すべての衆生の誕生の本源は、生命の大地、いわば大宇宙の生命より涌出したということです。この大宇宙の生命より、さまざまな縁にふれ、条件が整うと、われわれの生命の種子が生じます。そして母の胎内より誕生して、一個の生命体を現じていることと思います。

——深義はとうていわかりませんが、短い言葉のなかに本質をついた哲理と 생각합니다。

池田 さらに、この御文につづけて、

「菩薩とは十界の衆生の本有の慈悲なり」(七九九)

とも説かれています。

——それは、どういう意義になりますか。

池田 端的にいえば、あらゆる生命にそなわっている、本然的な「慈悲」を菩薩と表現しています。いいかえれば、いかなる生命も、そして人間も、本来は、「慈悲」の当体である。しかし、その慈悲も潜在的なもので、残念ながら、「冥伏」^{みようぶく}していて出てこない。(笑)

いわゆる「生命の尊厳」^{そんげん}の本源的な根拠は、生きとし生ける、すべての生命に、この「慈悲」の境涯が実在しているからに、ほかならない。

人生の究極目的は、この「慈悲」の生命を、涌現^{ゆげん}させることにあります。これが妙法の信受、行動となるわけです。ですから、仏法においては、本然の「生」とは、「慈悲」の生命

が涌出し、躍動する姿であり、自他共に「華敷はなきき栄えて」いくところに、根本的な「生」の意義があるのではないでしょうか。そこで大聖人の仏法は、それを可能とする現実的方途を万人に開いたものであるといえると思います。

地球は一つの生命体

——ところで、人類がどんどん生まれていくと、この地球上だけで、どのくらいの人間が住めるのでしょうか。

池田 私が最近、何かで読んだ記憶では、現在の人口の約三倍か四倍ぐらいが限度だ、というのがありました。

屋嘉比 たしか、国立民族学博物館の石毛直道助教授が計算されたいちばん新しい研究ですね。

現在の世界人口は約四十七億人ですから、百六十億から二百億人前後です。

——みんなが健康で、のびのびと喜びの生活をしていくには、どのくらいが限度でしょうかね。アメリカなみの生活水準だと、どうでしょうか。すでに定員でしょうかね。(笑)

屋嘉比 ええ、まったくそのとおりです。

一人の平均的なアメリカ人が生きていくのに、約二万平方メートルの土地がいるといわれていますね。

——約六千坪ですか。わが家の六百倍（笑）。そこまで高望みしなくとも（笑）、人口問題はますます深刻です。

池田 当然のことながら、人間自身の欲望などとその他の多次元の問題とを、交差して考えねばならないことでしょうね。人類の英知を結集すべき重大問題です。

仏法では、「依報」つまり環境・社会と、生命主体を意味する「正報」とが、けっして別々に存在するのではなく、あくまで「不二」^{ふに}（依正不二^{*えしやうふに}）であり、密接不可分であると説きます。

屋嘉比 最近の生態学も生命の連鎖という大前提から出発していますが。

池田 地球という全生態系のなかで、人間を考えるとという観点ですね。

屋嘉比 ええ、そうです。この観点を追究していくと、最終的には地球を一個の生命体としなければならぬ方向にいくことになりますが。

——人口問題にしろ環境問題にしろ、やはり、地球のリズムを乱さない一定の調和を保つということが大前提となりますね。

池田 当然そうなりますね。

私の人生の師である戸田^{*}前会長はかつて「地球自体が一つの生命体であるから、条件さえととのえば、生命は誕生する」と語っていた。もう三十数年もまえのことではしたが……。戸田前会長は宇宙的な広がりの中かで、地球という一生命体を、そして人間生命という存在を思考していたわけです。

まあ、当時の人々は、その深い意味を知るよしもなかったわけですが。

——なるほど、じつに卓見でしたね。

屋嘉比 母親の胎内から出生するという生命の誕生も、その背後に、全地球的、さらには宇宙的にまで広がりゆく奥行きがあるというのは、現代の科学が指し示していることでもあります。

生命ほど不可思議なものはない

——さて、親というものは、いずこの国でも、いずれの時代でも、誰もが、健康で五体満足の赤ちゃんを望みます。

しかし、不幸なことに、障害や奇形をもって生まれてくる場合もあります。

しかも、現代は、昔にくらべて、だんだん増えていく傾向にあるといわれています。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 日本と欧米とでは、障害児の生まれてくる割合の違いはあるのでしょうか。

屋嘉比 あります。日本では一パーセント、欧米では三パーセントから五パーセントともいわれています。

——生まれたときに異常がわからなくても、成長するにつれ、障害が出てくる場合も少なくありませんね。

屋嘉比 生後一年たって、障害児の割合は倍になります。この率は、日本も欧米も、だいたい同じです。

池田 医学的にみて、どのような原因が考えられていますか。

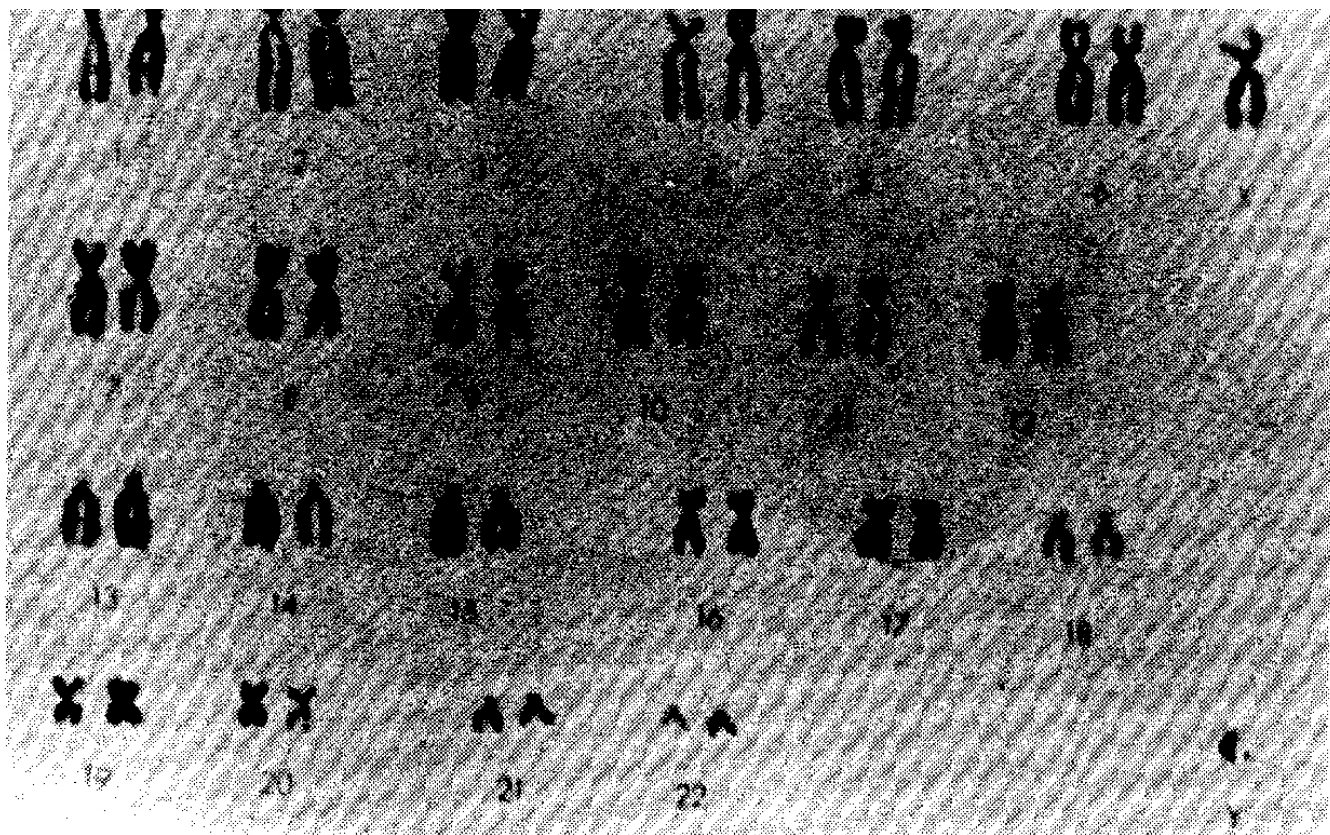
屋嘉比 原因がはっきりわかっているのは、だいたい二〇パーセントぐらいのようです。

池田 意外ですね。もっと解明されていると思っていましたか……。

医学的には、遺伝と、母体などの環境の影響は、どうなっていますか。

屋嘉比 明らかに^{*い}遺伝^{でんし}子や^{*せん}染色体^{しよくたい}の異常によるのが一〇パーセント、また環境に起因するのが一〇パーセント、あとはこれらの^{さくそう}錯綜した原因によるものと考えられますが、明確にはわかっていません。

——最近は染色体という言葉が、よく新聞にも出てきますが、どんなものですか。



人間の染色体。正常な場合は46本ある。

屋嘉比 簡単に説明しますと、細胞の核の中にはDNA^{*}などの遺伝情報があります。そのDNAが長いラセン状の線のように連なり集まって遺伝子を形成し、かたまりを成している遺伝子連鎖群が染色体です。遺伝子のかたまりですね。

池田 染色というからには、もともとは透明なのでしょね。

屋嘉比 そうです。ふだんは目に見えない糸のようなものですが、細胞が分裂するときに太くなり、濃く染まって見えますので、染色体とよばれています。

池田 見たことがありますか。

屋嘉比 ええ、顕微鏡で観察しますが、薬品で色をつけて見やすくします。

池田 人間ばかりでなく、動物や植物にもも

ちろんありますね。

屋嘉比 そうです。地球上のあらゆる生物に共通する遺伝子のかたまりです。

池田 戸田前会長に私が師事したのは、十九歳のときからですけれども、その当時、戸田前会長はよく染色体のことを語っておいしました。また、私にも語ってくれたことがありました。そのことが、たいへん頭に残っているんですが……。

そこで、人間の場合の染色体に異常があるとは、どういうことですか。

屋嘉比 普通の人の染色体は四十六あります。それが四十五、あるいは四十七あったりする数の異常があります。

池田 それが原因で、どのような症状があらわれるのですか。

屋嘉比 四十五の異常にターナー症候群しょうこうぐんがあります。性染色体の異常で外見は女性ですが、完全な女性化は行いません。四十七の異常には、ダウン症*があります。また外形は男性ですが、女性型の乳房をもつ性分化異常のクラインフェルター症候群などもあります。

——つぎに、母体の環境による障害の場合ですが、母親のどのような状態が原因になるのですか。

屋嘉比 これは、妊婦の健康状態に起因するものとか、栄養の不足とか、いろいろあります。

池田 妊娠中のお母さんが風疹ふうしんやインフルエンザにかかると、生まれる子は白内障や聾啞ろうあ、心臓奇形になることがあるというのは本当ですか。

屋嘉比 本当です。ビールスによるものですが、とくに風疹はこわいものです。

また、トキソプラズマという病原体に先天的に感染しますと、小頭症*や水頭症*などになることがあります。

池田 薬の副作用も大きな問題ですね。

屋嘉比 そのとおりです。一般に薬の害について知られるようになったのは、催眠剤*のリドマイドが原因となった障害です。

池田 薬が原因になった例は他にもありますか。

屋嘉比 あります。ホルモン剤のプロゲステロンやテストステロン、マラリア治療薬のキニーネ、抗生物質のストレプトマイシンなども、奇形児の発生に影響しています。

池田 レントゲンの影響もあるといわれていますね。

屋嘉比 レントゲンから出る放射線に多量にあたると、遺伝子に影響を与えることがあります。

——実際に確認されていますか。

屋嘉比 ええ、放射線を多量に浴びた人の子供や、原爆実験を行った地域の子供に異常が

出てくる場合があります。

したがって妊娠中、とくに妊娠初期の人が強い放射線にあたると、胎児に奇形ができる危険性があるといわれます。

池田 たしか放射線といえば、広島や長崎で被爆した妊娠中の婦人の例がありましたね。

屋嘉比 ええ、とくに被爆の中心地での影響については、まとまったデータがあります。

池田 かなりの影響が出ていたようですが。

屋嘉比 そうです。約五〇パーセントが死亡ないし流産とか、また、生まれた十一人の赤ん坊のなかで、七人が小頭症で精神障害児であったとのデータもあります。

池田 障害の原因は、まだほかにありますか。

屋嘉比 約二百八十日経^たって、産道を通り、いよいよ生まれてくるときも難関でして、そのとき、ヘソの緒^おが首に巻きついたり、頭が圧迫されたりして、酸素不足で脳性マヒになつて生まれてくることもあります。

池田 誕生というのは、じつにたいへんなことですね。

屋嘉比 まったくそう思います。母親が糖尿病の場合なども流早産が多く、赤ちゃんが巨大児になってしまい、難産のことが多いようです。

池田 なるほどね。しかし母親だけではなく、父親の影響についても、いつか公平に論じ

てもらいたいと思いますね。(笑)

それにしても、たしかに考えれば考えるほど、生命というもののほど不可思議なものはありませんね。地球上の全科学をもつてしても、人間をつくりだすことは不可能でしょうからね。

屋嘉比 まったくそう思います。まず、受精卵が子宮に着床ちやくしやうするまえに、自然に五〇パーセントが流産しているようです。

また、子宮内の残りの五〇パーセントが胎内で育ちますが、胎児の形をとるまえに、さらに、その三五パーセントが流産します。ですから、受精卵自身、自然淘汰しぜんとうたされて、いわば、それに勝ち残ったものだけが成長をつづけ、分娩ぶんべんまで行きつくのです。

池田 現実には、障害児が生まれるのはなぜですか。

屋嘉比 異常をもつ胎児で、本来は流産していたはずのものが、最近では、薬などを使い、出産にもつていけるケースが多くなったので、障害児が増えているという説もありますが、それ以上のことは医学ではまだわかっておりません。

池田 もっと深く、もっと遠いところに、原因がある場合があるでしょう。仏法では「業」*ごうととらえますが、その問題はまたあらためて論じさせていただきたいと思います。

運命と宿業のドラマ

池田　ところで、同じく、出生時からの障害といっても、遺伝によるものもあるが、母体の影響からくる障害で遺伝しないものもある、と聞いていますが、屋嘉比さん、どうですか。

屋嘉比　そのとおりです。風疹によるものなどは遺伝しません。

遺伝性のものとしては、たとえば、精神障害を生じる病気に、フェニルケトン尿症というのがあります。これは明らかに先天性で、かつ劣性遺伝します。

池田　それは、何が原因で起る病気ですか。

屋嘉比　フェニルアラニンというアミノ酸の代謝異常で、脳の発育が妨げられ、精神障害を生じたり、色素産生さんせいの異常があり、いわゆる“白子”*しろこの状態になります。しかし、最近では、出生後、早期に尿や血液を調べることにより、精神障害を防ぐ措置をとることができま
す。

——高校時代、遺伝の仕組みは、習ったつもりですが、もうまったく忘れてしまいました（笑）。すみませんが、もう一回、この場で復習おさらいさせていただけませんか。（笑）

屋嘉比　ちょっと初歩的な説明になりますが、遺伝というのは、受精、つまり精子と卵子

の結合にあたって、染色体のなかに含まれている遺伝子により、ある特質が、つぎの世代に伝わっていくことです。

わかりやすい血液型の例をとりましょう。かりに、両親ともAB型の血液型の場合を考える、その受精の場合、父親の精子には、A型の遺伝子をもったものと、B型の遺伝子をもったものが、ほぼ同数あるわけです。

——なるほど、そうでしたね。

屋嘉比 母親の卵子にも、A型の遺伝子のものと、B型の遺伝子のものがあります。

受精の結果、子供の血液型の組み合わせは、AA、AB、BA、BBの四つが可能です。これを遺伝子型といいます。

しかし、このうち、ABとBAは同じですから、実際にあらわれる血液型としては、A、AB、B型の三つになります。これを表現型といいます。その比率は「二対二対一」です。A型の確率は、四分の一です。

——よくわかりました。

屋嘉比 そこで、劣性遺伝病であるフェニルケトン尿症の場合には、両方の親から授かる遺伝子が二つとも病的遺伝子の場合、発病するわけです。

かりに、「病気の遺伝子」をAとし、「正常な遺伝子」をBとして、両親がともにA、Bの

遺伝子の両方をもっている場合、確率的にみると、その間に生まれる「病氣の子供」と「潜在的な素質の子供」と「正常な子供」の割合は、同じく「一对二对一」となるわけです。

池田　なるほど。遺伝の法則がたらぬかれていますね。

仏法では、釈尊も「生老病死」*しやうろうびやうしと説いているように、すべては「生」すなわち「誕生」から出発している、ととらえています。

その誕生について、御文には、

「我等其の根本を尋ね究きわむれば父母の精血・赤白二滲しやくびやく和合たいして一身なと為る」(「始聞仏乗義」九八三)

とあります。

さまざまな宿命の姿の、今世におけるいちおうの原因というものは、結局のところ、受精・受胎という現象に即してあらわれることと思います。

さらに他の御文には、

「此の出生の子に善子もあり・悪子もあり端巖たんがん美麗れいの子もあり・醜陋しゆうろうの子もあり・長のひくき子もあり・大なる子もあり・男子もあり・女子もあり云云」(「御講聞書」八四一)

とあり、現実の誕生においては、まさしく千差万別の、さまざまな姿があることが説かれています。

屋嘉比 なるほど。

池田 たしかに、医学的な分析、帰納法きのうではありませんが、演繹的えんえき、結果的には、これが現実だと思います。

屋嘉比 そう思います。

池田 受精・受胎という生のはじまりにおいて、すでに、おのおの宿命が定まってしま
う。ですから、それを生命の不可思議の一つとして、仏法では「宿業」しゆくごうの厳しさととらえる
わけです。

人格、体質は遺伝を超えられるか

池田 ところで、体質とか、体格、さらには性格などと遺伝の問題は、医学的にはどうと
らえていますか。

屋嘉比 まず「体質」については、かなり遺伝性が強いとみていいと思います。

たとえば、伴性遺伝ばんせいの色盲とか、一重まぶたひとえとか、それから、ゼンソクなどのアレルギー
体質ですね。

もっとありふれた例では、耳アカにも、カサカサしたものと、いわゆるアメミミというも

のとの、遺伝的な違いがあります。これには人種による大きな差がありまして、日本人の大多数はカサカサした耳アカですが、白人や黒人では、アメリミが多いようです。

それから、PTC味盲^{みも}というのがあります。

池田 それは、どういうものですか。

屋嘉比 フェニルチオカルバミド（PTC）という試薬に対して、苦味^{にがみ}を感じる人と、まったく感じない人とがあることがわかっています。これも遺伝的なものです。

池田 アルコールに対する反応も、かなり生まれつきのものだといわれていますが、本当のところ、どうなのでしょう。（笑）

屋嘉比 これもやはり、遺伝的な要因が強いようです。

——すると、お酒好きはみな遺伝によるというわけですね（笑）。訓練もあると思います
が。（笑）

池田 それはていどの問題でしょう。（笑）

体質的に酒に弱い人は、いくら練習しても、そんなに強くはならないでしょう。

屋嘉比 そのとおりですね。

池田 寒暖の感覚にも、体質的な差があるようですね。

屋嘉比 ありますね。もちろん、生まれ育った環境の影響による場合も多くありますが、

夏の炎天下のようなところでも、わりに平気な人と、何もしないでもすぐグッタリしてしまう人とか。(笑)

池田 「身長」とか「肥満」とかは、どうでしょうかね。先天的なものの比重が大きいのか、後天的なものの比重が大きいのか……。

屋嘉比 むずかしい課題に入ってきました。というのは、遺伝性の病気の場合とは異なり、体質や体格とか知能とかは、多因子^{たいんし}遺伝といって、それを決める遺伝子の数は、きわめて多いと考えられるからです。それに、環境の影響もありますし……。

私の知る範囲では子供の「身長」については、三五パーセントは父からの遺伝、三五パーセントは母からの遺伝、あと三〇パーセントは、ホルモン障害や、食物、運動などの環境条件によるという調査もあります。

池田 たしかに大きな子の両親はえてして大きいし、遺伝ということがあるのでしょね。しかし、戦後の日本人はずいぶん背が高くなっており、環境の影響も重要ですね。

屋嘉比 「肥満」も脂肪や糖代謝に関する体質の違いと、食糧事情など環境の影響の、双方によるものです。

——「性格」についてはどうでしょうか。

屋嘉比 これは、さらに複雑ですね。遺伝か環境か、ずいぶん議論のあるところです。

池田 この問題は、どちらか一方というような、そんな単純な見方ではきまらないと私は
思いますが。

「氏より育ち」とか「ウリの蔓にナスビはならぬ」とか、「カエルの子はカエル」とか
「トンビがタカを生む」とか、まあ、いろいろにいわれていますが……。 (大笑)

——最近では、どうも人間の一生は、すべて遺伝子で決定されているというような、いわ
ば決定論的な考え方の傾向もあるようです。

池田 人格とか、性格とかいうものは、大海のような複雑性を秘めていて、そんな単純計
算で割りきれる問題ではないと思いますが。

——単純といえば、また最近、血液型による性格判断が流行していますよ。 (笑)

池田 だけど医学者の立場からは、まったく否定的な感じがしますが、どうでしょう。

屋嘉比 ええ、そうです。

個人的にみると、私はA型ですが、まったく当たっていないわけではないとも思えたりし
ますが (笑)。しかし、実証的な根拠はないのです。

——そうですか。私もA型ですが (笑)、血液型の本などを読むと、たしかに、当たって
いるなと思わせられるところがあるんですよ。 (笑)

屋嘉比 血液型による性格判定などを信ずるのは、現代人の依存性、付和雷同性を示すも

のだという批判があります。（笑）

池田 あるていど、^ま的を射^いていると思わせる効果があるからでしょうね。

いずれにしても、性格・気質というものは、もともと明確に規定できない、多様で、重層的なものです。それを血液型という一要素だけで割りきるところに、むりが出てくる。

屋嘉比 そうだと思います。ただ、血液型と病気の関係については、かなり研究した医者もいるようです。

——たとえば、胃ガンの患者にはA型の人が多いとか、逆に十二指腸潰瘍^{かいよう}では、O型の人が多いとか聞きますが……。

池田 いや、そうすると、A型、O型の人には気にしますよ。（笑）

そうはいつでも、確率的に絶対というわけではないでしょう。（笑）

屋嘉比 それはまだ、はっきりした因果関係は明らかにされていません。おそらく、身体を構成している成分のムコ多糖類の構造の違いによるのではないかと推測している学者もいます。

いちおう、一つの傾向性ということでしょうが、しかし、不可思議なる生命の全体というものは、やはり、それだけでつかむことはできないでしょう。

——そうですね。そんなことを気にして、かえって病気になるのは愚かですからね。（爆

笑)

屋嘉比 また人間の「性格」というもの一つとってみても、いろいろでき概論的な話になって恐縮ですが、大きくわけて二つの説があります。

一つは、遺伝の要因を重視する「しやうとく生得説」です。もう一つは、環境条件を重視する「経験説」というものです。

たしかに、そのどちらか一方でわりきれんという単純なものではないようです。

池田 私もそう思いますね。いずれにしても、「素質」と「環境条件」の交差した相互関連のなかで、「性格」はつくられていくものでしょうね。

屋嘉比 それが正しいと思います。

池田 さらに、人間の場合は、ただ本能に支配されている他の動物と違って、もっと主体的な要因を重視しなければならぬでしょう。

屋嘉比 私もそう思います。

——ある父親が息子に「おまえは、どうして、そんなにできがわるいんだ」といったら、息子が「遺伝か、環境のせいでしょ」と、すまして答えたそうです(笑)。笑い話のようで、身につまされる話です。(笑)

池田 ですから、みずからの意志で、みずからの限界を超えながら、自分自身を変革して

いこうとする姿勢が大切になってくる。また、そうした達観した人生観をもつことができれば、そのなかから、思いもかけない人間としての最大の条件がそなわっていくような気がします。

屋嘉比 そのとおりだと思います。たしかに人間にはもっと主体的な要因があるように思いますが、人はおうおうにして遺伝や環境のせいだというように、どこかに責任を転嫁てんかさせようとしています。しかし、科学的にその要因を追究してみても、すべての解答にはなりません。

人間の条件とは

——ところで夫婦、つまり両親の性格は、子供にどのような影響をあたえていますか。

池田 当然、遺伝的な面と、環境的な面と、両面での影響があるでしょうね。

屋嘉比 そうです。遺伝の面では、子供の遺伝子は、父親と母親から、それぞれ半数ずつ伝えられたものですから、両方の影響があらわれます。

池田 遺伝的には、あくまで両親の共同責任ということですね。（笑）

屋嘉比 そうなりますか。ただ、人間の遺伝子は、数万から数十万、あるいは百万以上ともいわれていますから、子供の性格のなかに、どれだけの遺伝子がからみあっているのか、

追究はほとんど不可能だと思いますが。

池田 よく男の子は母親似が多い、女の子は父親似が多い、といわれますが、科学的な根拠はありますか。

屋嘉比 一般的にはありません。しかし、はっきりしているのは、十文字遺伝といって、たとえば色盲の場合です。父親が正常でも、母親が色盲だとしますと、女の子には色盲があらわれませんが、男の子には、色盲があらわれます。

池田 逆の場合は、そうはならないのですか。

屋嘉比 ええ、父親が色盲で、母親が正常のときは、少し複雑ですが、子供は男女とも正常であるか、あるいは男女とも五〇パーセントの確率で色盲となります。

池田 すると、十文字遺伝というのは、かならずしも一般的な法則ではないわけですね。

屋嘉比 むしろ、例外的といっていいと思います。

池田 長男と次男、あるいは、一人っ子と兄弟の多い子とで、性格の違いがありますね。これなどはどう説明できますか。

屋嘉比 両親のもっている遺伝子が、子供に分配されるのですから、親と子、兄弟同士が似ているのは当然です。

ところが、数十万もあるという遺伝子の分配の仕方は、クジを引くようなもので（笑）、

その組み合わせは無数にちかいですから、兄弟同士でも違ってくることになります。

——なるほど。環境的な面ではどうですか。

屋嘉比　むしろ、幼少期の両親の育児態度、家庭環境といった面で、両親の性格の影響力は大きいと思いますね。

池田　人間の場合は、とくに、そうした^{しつけ}躾、教育の役割を重視する必要がありますね。

屋嘉比　そう思います。たとえば、アメリカの心理学者サイモンズ博士は、とくに、幼少期の子供にもっとも多く接する母親の育児態度を重視しています。

母親が子供に対して、支配的か服従的か、保護的か拒否的か、という二つの尺度の組み合わせで、子供の性格形成を規定しようとしています。

池田　両親の責任は平等であるといっても、母親は胎内にいるときからもっとも長く子供に接しているわけだから（笑）、母親の影響の比重はたしかに大きいものがあるでしょうね。

屋嘉比　そう思います。たとえば、母親が子供に対して、過度に支配的で保護的であると、これは「干渉しすぎ」になります。

逆に、保護的で服従的な態度は「あまやかし」です。服従的で拒否的なのは「無関心」、支配的で拒否的なのは「残酷」という態度になる、というのです。

これはもちろん、過度にいきすぎた場合ですが、大なり小なり、これらのどれかの傾向に

あてはまるのではないでしょうか。

——たしかに、長男に対しては厳しく、次男あるいは末っ子に対しては放任したり、あまやかすという傾向はありますね。

屋嘉比 それから、一人っ子で、兄弟ゲンカの実験がないと、どうしても孤立的になり、成長してからの人間関係で、ギクシャクするといった場合もあるようです。

池田 そのとおりだと思います。ともかく、性格形成の条件には複雑なものがあるが、やはり、両親自身の人生を生きる姿勢が大事でしょうね。

みずからが価値ある目標にむかって、充実して、生きぬき、成長してゆく姿勢がなければ、真実の教育はありえない。

人間は、夫婦、親子、友人関係にしても、また教師と生徒という師弟関係にしても、すべてたがいの、人間と人間との打ちあいのなかに、自身も触発され、相手にもよい影響をあたえ、ともに成長していくものでしょう。

——ひじょうに示唆的なお話だと思います。

そこで、「遺伝と環境」ということで、よく話題にされる「天才」の問題があります。天才の天才たるゆえんは、いったい何にあるのかということですが。

池田 エジソンが、天才とは、二パーセントのインスピレーション（靈感）と、九八パー

セントのピースピレーション（発汗）である、といったのは有名な話ですね。

屋嘉比 九八パーセントは努力だということですね。

池田 当然、持って生まれた才能や素質が前提になることは事実でしょう。しかし、それだけでは実際に開花し、偉業を達成することはできない。

屋嘉比 「運・鈍・根」などともいわれますね。

池田 そうですね。仏法では人間の開花をもたらしゆく、より根本的な力として、「信根」しんこん「精進根」しょうじんこん「念根」ねんこん「定根」じようこん「慧根」えこんという五根がありますが……。

人間の主体的な条件としては、やはり、集中力と持続力が大事でしょうね。「持続は力なり」ですね。

もちろん、そうした集中力とか持続力とかの特質も、かなり遺伝的な要因として解明されるのでしょうが。

屋嘉比 たしかに、生まれつきの性質という面があります。

池田 しかし、われわれのような凡人でも、深い使命感と目的観をもち、大きな目標が設定されれば、はかりしれないほどの力量を発揮することができるものだ、と私は確信しています。

——偉大な事業を達成した人の生涯には、「師との出会い」という、ある決定的瞬間が、

大きな転機になっていることが多いようですが。

池田 いま、思いつくだけでも、「ソクラテスとプラトン」「ベロッキオとレオナルド・ダ・ヴィンチ」「ベートーヴェンとシューベルト」、また「緒方洪庵と福沢諭吉」「コッホと北里柴三郎」などの例がありますね。たしかに、私の体験からもそう思います。

屋嘉比 誰にでも、人生にあって深い影響を受けた人の存在というものはありますね。

池田 いずれにしても、遺伝といい、環境といい、一人ひとりの個人にとっては、ある意味では、すべてあたえられている現実であり、結果であると、私は思いますが。

より大事なことは、そこから、どのように自己開発していくかということでしょう。仏法では、これを「本因」ととらえています。

屋嘉比 鋭い指摘と思います。医学は、現実や結果の解明に光をあてていきます。と同時に誰もが、もっと根本的な問題があると感じてはいます。

——いま「生命」に関する最先端のテーマとして、新聞・雑誌・テレビなどのマスメディアで、大きな話題になっているのは、なんといっても「^{*}遺伝子工学と^{*}生命操作」の問題です。

そのほか、さかんにとりあげられているテーマを、思いつくままに列挙してみますと、

「^{*}脳戦争」^{*}とか、「老化」の問題、「死の判定」の問題、また人工受精や、臓器移植の問題などがあります。

屋嘉比 寿命と加齢、そして高齢化社会における福祉の問題もありますね。また、植物人間や安楽死の問題とか……。私の専門である医療と、深いかわりがありますが。

池田 たしかに、いずれも人類の未来にとって、重要で、深刻な問題ですね。また、古くして新しい問題として、生命の起源、生命そして人間とは何か、という問題も、あらためて活発に論じられていますね。

屋嘉比 人間と自然環境の問題とか、心身症をはじめとする「心」の領域の問題もありますし……。

——「健康ブーム」もつづいていますし……。 (笑)

屋嘉比 「生命論」というのは、広げてゆけば、限らない広がりのあるテーマですね。

池田 仏典では「諸法実相」(しよほうじつそう) (「法華経方便品」^{*}) と完璧(かんぺき)にとらえている。

また、さきほどの「総勘文抄」という御文には、

「此の心の一法より国土世間も出来する事なり、一代聖教とは此の事を説きたるなり此れを八万四千の法蔵(ほうぞう)とは云うなり是れ皆悉(ことごと)く一人の身中の法門にて有るなり、然れば八万四千の法蔵は我身一人の日記文書なり」(五六三)

とも説かれています。

せんじつめれば、森羅万象(しんらばんしやう)のことごとくが、「生命」(しよき)の所作であり、営みであり、そのあ

らわれになるわけです。

ですから、「生命論」の範^{はん}ちゅうは、限りなく豊かで、広い。また、奥行きの深い問題です。あらゆる問題は、人間・生命から出発しているわけですから、すべてが「生命論」の範ちゅうに含まれてくることになる……。 (笑)

——たいへんなことになりました。(笑)

ぜひ、そうした問題も、今後のテーマとして、お願いしたいと思います。

池田　そうですね。期待にこたえることはむずかしいんですが、いっしよに勉強しましょう。(笑)

医学と仏法の役割について

——話は変わりますが、近代になって、生命のことをもつとも追究し、研究した学者は誰ですか。

池田　それぞれの立場で名をあげる人は異なるとはいますが……。 「生の哲学」のベルグソンはその一人でしょうね。どうでしょうか、屋嘉比さん。

屋嘉比　ベルグソンですと、異論はないと思います。医学の底流には、つねに思想、哲学

が必要ですが、彼の著書『創造的進化』のなかで「知性は生命にたいする本性的な無理解を特徴とする」との指摘は、印象深く残っています。

——池田先生の『若き日の日記』を拝見しますと、ずいぶんベルグソンの著書を読まれていますね。

池田 何冊か読みました。青春のころの読書は、忘れがたいものです。

とくにベルグソンが「分析」から「直観」へと主張したことには、共感をおぼえました。いま、ふたたび彼の『物質と記憶』や『道德と宗教との二源泉』などが読まれはじめていると聞いていますが……。

——小林秀雄さんなども最後に挑戦するテーマにしていたようですね。

屋嘉比 ベルグソンは生命哲学の分野ばかりではなく、文学者にも関心をもたれたのですね。

池田 そう思います。生命論の受けとめられ方などをみても、医学や文学や物理学など、専門がいかに異なっても帰着するところは同じだ、ということがわかります。

専門は専門として、最終的に目指していくところは、結局、「人間」と「生命」の問題になっ＊ていくことは必然といえます。

今度五千田札の肖像になった新渡戸＊（稲造いなぞう）博士は（笑）、牧口＊（常三郎）初代会長とじ

っこんだったようです。博士は、日本人としてベルグソンと直接交際した数少ない人物の一人です。

—— 那样的えば、牧口先生の『創価教育学体系』に序文を寄せていますね。

池田　そうです。新渡戸博士は、フランスなどの長い滞欧生活からの帰国直後に書かれたようですね。

—— その序文をみますと、教育技術の追究に翻弄ほんろうされている当時の教育界にあって、技術はあくまで従であって「堅実なる人を養成する」ことを重視する牧口先生の「人間教育」を絶賛しています。

これなども、ベルグソンの生命哲学からの影響をうけた経緯もあつてのことではないでしょうか。

池田　そのように想像できますね。初代会長は、すぐれた教育者であり、人生地理学の大学者でした。ですから、当時の教育界の重鎮じゅうちんであつた博士との交流は、必然的な出会いだったのでしょう。

ただここで申しあげたいことは、当時の新渡戸博士は、人間から生命へというベルグソンの生命哲学にもふれ、より深く、ものごとをとらえる境地に立っていかれたのでしょう。そこできつと初代会長の『価値論』の内容を見て、博士が感動なされたような気が私にはする

のです。

そこで屋嘉比さん、医学の分野では、現在大家といわれる人は、誰がいますか。

屋嘉比 アメリカのライナス・ポーリング博士などの名前はよく耳にしますね。博士はすぐれた研究者であるとともに、平和運動の実践者でもあります。

池田 ビタミンCの研究などで、ノーベル化学賞を受けた著名な学者ですね。また、ノーベル平和賞も受けている。

——その意味では、人類のためにたいへん貢献していますね。

屋嘉比 博士の研究所には、いまでも三十三人のノーベル賞学者が研究に従事しています。

池田 すばらしいことだ。それから、イギリスの分子生物学^{*}の分野でしたか、ワトソン博士、クリック博士の名前も、新聞などで見かけることがありますが。

屋嘉比 ええ、両博士は、今日の生命科学の基礎になる理論構築に貢献しています。とくに、DNA（デオキシリボ核酸）という遺伝子の構造を解明しました。科学が人間生命の神秘に足を踏みいれた、偉大なる業績と思います。両博士の研究書は、医学を志す者の教科書です。

池田 あとはどういう人がいますか。

屋嘉比 一九六三年にノーベル医学・生理学賞を受けたオーストラリア生まれのエックルス

博士も大事な人です。

池田 脳を研究している方ですね。

屋嘉比 ええ、^{*}大脳生理学の大家で、たしか東大の生理学教授も師事されたことがあり、私たちもいわば孫弟子にあたるわけです。博士は、最近、一般向けの『脳と宇宙への冒険』という本を書かれています。

その本のなかで博士は宇宙と地球、人類の歴史にふれ、結論として人間の脳を理解するのに「脳を超えた自我意識精神」を想定されています。

——より深く広い次元からの、ものの見方が要求されるわけですね。

ところで、脳のシワの多い少ないで頭のよさがきまると、よく聞きますが。(笑)

屋嘉比 それだけで頭のよさがきまるといのは、もし神が人間をつくったというのであれば、あまりにも残酷な話です(笑)。人間の頭脳のよさが、シワとか脳の大きさとかできまるといのは、あくまで俗説ですね。(笑)

もし、それが正しいとすると、人間の六倍もの脳の重さのあるマッコウクジラや、人間より脳のシワの多いイルカのほうが、人間よりずっと賢いということになってしまいます(笑)。だいたい人間は、自分の脳細胞をすべて使いきっているわけではありませんから、やはりシワの数ではなく、努力の量によってきまるのではないでしょうか。(笑)

池田　ともかく、私たちは、現実^{じやうじ}に生きている、生まれてきてしまったことだけは間違いない。そして生まれながらにして、貧しい家に、富める家に、賢く、愚かに等々、あまりにも差別の境遇^{きんぐう}にはめこまれた運命にある。

その淵源^{えんげん}はどこにあるのか、という問題を、厳しき因果のうえから説き明かしたのが仏法です。

そこで「心地観經^{しんじ かんぎよう}」という仏典には、

「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」

とあります。

これは、仏法では、たんに「今世^{こんぜ}」だけの生命現象の「因果」をあつかうのではない。あくまで、「過去・現在・未来」という「三世^{さんぜ}」にわたる永遠の生命観にたって、すべての現実、現象を掘りさげてとらえ、そこに、仏法は、人間の運命と宿業の淵源を見ていく、という意味になります。また、それをいかにして打開していくか、という法則を提示しているわけです。

屋嘉比　現象面を主に追究する医学から見ますと、たいへんな深い次元からの道理となるわけですね。

池田　ですから、人間が医学から多大な恩恵をこうむってきたこと、また未来もそうであることは揺るぎない事実ですが、医学は、いわば生命の現象面の近因の探究と治療が目的であるといえる。それに対し、仏法は淵源の追究、そして未来の追究であるといえる。

屋嘉比　医学の研究者としては、人間と医学を考えるうえでの大切な示唆を感じます。

池田　大聖人の因果俱時の法門は、さらに、もう一步深いのですが……。

これは、また、何かの機会に論じさせていただきたい。

ともあれ、医学は健康の追究であり、仏法はなんのために生まれてきたかの追究であり、この人生を最高に価値あらしめる生活の歩みです。

その意義から、第三の法門である大聖人の仏法では、それを「衆生所遊樂しゅじょうしようれく」ととらえている。この地球上に生を享け、楽しみきって人生を終わることこそが、私たちの信仰の目的なのです。なかなか凡人ではたいへんなことです。（大笑）

第二章 「生命」の永遠性とは

「出生」の意義

池田　今回は、「出生」の意義をもう少し深め、いちおう、まとめておきたいと思っていますが。

屋嘉比　人間が生まれ出るとき、「宿命」といいますか、さまざまの姿を現じてくることについても、遺伝子による要因とか、医学でも現象面のあるていどの説明がされるようになってきたと思います。

池田　仏法と医学は相反しない。よく戸田前会長が強調しておられたところです。医学はその研究の積み重ねのなかから、一步一步と進歩していくことになるでしょう。

屋嘉比　いわゆる医学は、人間の「出生」という問題についていえば、精子と卵子の受精現象にまでさかのぼって説明することができました。

しかし、この受精によって決定される個々の特質、またそれを決定づける遺伝子の組み合わせが、いかにして決められていくかは、いまだにわかりません。

ところが、最近、「出生」の原因というものは、その前提となる、より大きな背景があるのではないかという見解が、アメリカやヨーロッパの一部の学者によって提起されています。

——生命の神秘性、不可思議さを探るということは、世界的なひとつの潮流になってきているようですね。

池田 いま話題の、「^{*}ニューサイエンス」などでも、「ホロン」（個であると同時に全体としての性格）とか、「ゆらぎ」（生命体の環境への自主的適応）とかいって、「生命」の本質に迫ろうという関心がたかまっているようですが……。

屋嘉比 ええ、つい先日、筑波大学でその国際シンポジウムをやっていました。

私もそのレポートを見ましたが、東洋の「気」とか「靈性」というものを引っ張り出してきて、生命の連動性を説明しようとするフランスの学者もありました。

ただ、いまの段階では議論が白熱しているわりには、どうも暗あんちゆうもさく中模索の感がいなめません
が。（笑）

池田 どこまで納得できるかは別として、ともかく生命の連動性という考え方を、共通の認識基盤にしていることは、まことに大切と私は思います。

屋嘉比 そこで私は、医学的に精子と卵子の結合による生命の誕生といっても、どうも、それだけでは説明しきれない何ものかがある気がします。

池田 そのとおりだと思います。生命の誕生、発生というまことに創造的な営えい為。また誕生してからの、遺伝子などのさまざまな情報にもとづく自己創造の活動は、とても化学的、機

械論的な反応の説明だけではなしうるものではない。

屋嘉比　ですから私は、そこにもっと深い次元の、みずからを誕生、発現せしめてゆく「何か」、また生きつづけようとしていく「何か」があると思います。

池田　いま、屋嘉比さんが指摘されたように、いわゆる人類史が始まって以来、人々は、その生きつづける「何か」が「有る」と気がついていて、と思われることがありますね。いちばんわかりやすい例でお話しますと、ギリシャ語やラテン語で、「有る」という言葉が、そのまま「生きる」を意味する言葉になっているんですがね。

ギリシャ語では「e s t i」、ラテン語では「e s t」という言葉です。

インド古代のサンスクリット語による哲学用語でも「有る」は、同じく「生きている」という概念になっていますね。

しかも、古代ギリシャにおいても、魂の「輪廻観りんね」というものが強くあったようです。

屋嘉比　インドでは、昔から生命の「輪廻観」があった。ギリシャにも、生きつづける「何か」、すなわち生命が、生死を繰り返すという考え方があったのでしょうか。

池田　私もその道の研究者でないもので、その点、ご了承願いたいのですが、たしか、紀元前七世紀ごろであったと思いますが、オルペウス派という宗派が「輪廻観」をいっていたようです。

さらに紀元前五世紀ごろには、ギリシャのピタゴラス派が、「輪廻観」とか「靈魂不滅」というものを、展開していたようです。

これが後代にわたって、多大な影響をあたえたことは、歴史的に有名なことです。

屋嘉比 東洋と西洋の不思議な一致ですね。ピタゴラス派は、プラトンをはじめ、その後のギリシャ哲学の大きな源流になっておりますね。

母の「胎内」は尊厳なる「宝浄世界」

池田 そこで、仏法には「四有^{しゅう}」という言葉があります。

簡単に申しあげますと、生命が「生有^{しょうう}」「本有^{ほんう}」「死有^{しゅう}」「中有^{ちゅうう}」という四つの状態になるというわけです。

「生有」とは、誕生の瞬間を指していると思います。

「本有」とは、誕生から死まで。

「死有」とは、死の瞬間。

「中有」とは、死からつぎの誕生まで。

つまり、生命は四つの状態を三世永遠に繰り返していくという意味があると思います。

もつと深いとらえ方があるかもしれませんが、いちおう、私なりにひと言だけ申しあげておきます。

屋嘉比 仏法は、あくまでも「生命」というものが、永遠性をはらんでいるという大前提となつてゐるわけですね。

池田 そこで、仏教には「希有^{けう}」という経文の言葉があります。法華経方便品にもみられますが、これは、現代の私たちの立場でいえば、「南無妙法蓮華経」という「一法」に巡^{めぐ}り合うということが、いかに「希^{まれ}」であるかということをいっております。

また、爾前^{にぜんききよう}経などに、人間として「生まれる」ということが、めったにないことであり、まれにして不思議なることという意義があつた気がします。

——よく一般的に「まれに」ということを「希有」といいますが、仏教からきているわけですね。

この「出生」がいかにまれなことかは、第一章でもお話に出ましたね。

屋嘉比 第一章でも申しあげましたが、お母さんの胎内の受精卵のうち、出生にまでいたるのは約三分の一しかないともいわれています。

池田 この希^{まれ}なる「生命」の誕生も、仏教では「苦」ととらえております。たとえば、涅槃^{ねはん}経には、「生^{しやう}苦^く」として、つぎの二つがとりあげられております。

まず、はじめてこの世にでること。すなわち受精、受胎することを「生苦」といっております。

つぎに、母胎から生まれるときにも苦をとまなう。これをも「生苦」に含めます。

この母胎から誕生する「苦」には、仏教の初期の段階の修行道地経どうじきょうという経文によれば、二種があつて、一つは狭小な産道を通る場合の苦痛であり、二つは出産後にはじめて外物、つまり外氣、助産婦の手、産湯、産着などに触れる苦痛である。

こういう生苦をなめて生まれるため、人は過去における記憶を忘れるというのがあります。

屋嘉比 なるほど、明快ですね。

池田 また、日蓮大聖人の「御義口伝おんぎくでん」という深い次元では、

「宝浄世界ほうじょうとは我等が母の胎内なり」(七四〇)

と説かれております。また、

「宝浄世界の仏とは事相じそうの義をば且しばらく之を置く、証道観心しょうどうかんじんの時は母の胎内是なり(略)妙法の宝浄世界なれば十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり」(七九七)

ともおっしゃっている。これまた事と理、総別という次元で拝さなければならぬのです。が、いちおう、簡単に申しあげますと、「十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり」、つまり「宝浄世界」とは、特別の世界を指すのでもない。また観念の世界を指すのでもない。

母の「胎内」が、生命の出生するところであり、生命以上にすぐれた宝はない、ゆえに、もつとも尊嚴そんげんなる「宝浄世界」である、とおっしゃっておられるわけです。

屋嘉比 たいへん、深秘じんびな教えと思います。

池田 また、むずかしくなってしまう、恐縮ですが（笑）、仏法では、すべて生まれたものは、かならず滅する。その現象面だけの「有」を「仮有」と説いています。

さらに仏法では生命それ自体に、たとえば「出生」なら、「出生」をうながす不滅の核、つまり「我が」というような常住の存在があることを説いております。

これを「仮有」に対して、「実有じつう」「真有しんう」「妙有みょうう」とも説き明かしております。

屋嘉比 そうですか。医学や科学では、ちよつとでてこない言葉ですね。（大笑）

池田 人間は胎内から生まれる。鳥や魚は卵から生まれる。また星は宇宙空間から生まれる。また冬の枯野は、やがて春になると、美しい花や緑に変わる。

それぞれ、所生しよしやうはちがっても、ありとあらゆる生命は、誕生のドラマを演じる。そしてまた、かならずいつかは滅していく。

——森羅万象しんらばんしやうことごとくが時とともに変化しますね。

池田 私の家は、新宿の信濃町にあります。もう十数年住んでおりますが、よく近くの外苑のイチヨウ並木を通ることがあります。

春になると木々は青い芽を吹き出し、夏は葉が繁茂^{はんも}し、秋になると美しい黄色になります。68
そして冬の訪れとともに、一枚の葉もなくなる。

この四季折々^{おりおり}の光景を、何回となく見ながら、何か生命の深秘なドラマを感じてならないのです。

屋嘉比 たしかに生物というものは、条件が整えば、また環境からの適切な働きかけがあれば、誕生していくということは、そうしたいくつかの小さな例をとってみても、考えられます。

大宇宙の本源の働き

——『仏法と宇宙』を語る』のなかで、星の誕生が語られていましたね。

屋嘉比 私も読みましたが、たいへん感動的な話でした。つまり広大無辺の宇宙で、目に見えないぐらいの小さな物質が集まり、回転をはじめ。そして、誕生のときをつくる。それがあるとき、瞬時にして突然輝きわたるという、ロマンあふれる話でしたね。

そこで仏教に説かれている「実有」とは、どういうことになるのでしょうか。

池田 いや、むずかしい質問です。(笑)

たとえば、天空にきらめく無数の星の誕生を、ひとつの例にとってみれば——大宇宙それ自体は、これら星々の母胎のような存在ととれる。

ですから、大宇宙それ自体に、太陽とか、金星とか水星とか、また銀河星雲とか、また、われわれの住んでいる地球のような無数の星を「出生・誕生」させゆく力用りきゆうというものがある、と私は考えたいのです。

つまり、宇宙それ自体が、生命を誕生させゆく慈悲深い存在である、と仏法では説かれている。その「生きている」大宇宙の本源の働きを、ひとつの軸としながら、無数のきらめく星雲が誕生していこうとする力用の、その実在的な当体とうたいを「実有」ととらえていきたいと思っています。

まあ、もっと深いとらえ方をなさる方もいらっしやると思いますが、いちおう、これでご了解願いたい。(笑)

屋嘉比　すると人間も母親の胎内という場を借りながら、といいますか、即してといいましょうか、生命それ自体の力用によって、「出生」という厳肅げんしゆくなる事実を示していくととらえるわけですか。

池田　そうとっていただければ、ありがたいんですが。(笑)

ですから、生命というものは、いついかなるときでも、創造性を内在し、さらに能動的で

あり、まことに積極的な蘇生^{そせい}への力そのものをもっていることがわかります。

そこで経^{*}釈に「一身一念法界^{ぽうかい}に遍^{あまね}し」と。これも深義があるのですが、簡潔に申しあげますと、「生命」には、つねに宇宙大の生命に達しゆこうとする壮大にして、限りなき律動^{りつどう}がある、ということになります。

屋嘉比 人間の生命が宇宙大の広がりをもつということは、まことに卓見^{たっけん}であり、概観していえば、フロイトやユングなどに端を発する深層^{*}心理学が光をあててきたのも、まさしくその一点にあつたといえると思います。

深遠な仏法の生命観

池田 しかも、生命には、顕現への「内」なる働きがある。

それが「因^{いん}」となり、それと相互に交差しあう多くの「外」なる条件を「縁^{えん}」として、いわゆる「出生」がなされていくと思います。

屋嘉比 その点について、何か仏法では御文^{ごもん}があるのでしうか。

池田 大聖人の「三世諸仏総勘文教相廃立^{さんぜしよぶつそうかんもんきやうそうはいりゆう}」という御書にあります。

「内外相応し因縁^{いんねん}和合して自在神通の慈悲の力を施^{ほどこ}し」（五七四）

という御文です。

これは簡単に申しあげますと、仏法には一往いちおう、再往さいおうという深い次元の法門がありますが、ここでは、一往、人間の生命の誕生という観点で論じますと、「因」というのが「生命」の頭在化けんざいしゆく力用である。

また「縁」というものが、その頭在化の助縁じょえんとなる働き、たとえば親と子になる縁ともいえると思います。

つまり、内なる「因」と、外なる「縁」とが相応し、和合して、生命というものが誕生すると説かれているわけです。

屋嘉比 「出生」の意義を、仏法が深秘といおうか、たいへん深遠なる次元から、鋭く見きわめていることに感服します。

池田 そこでさらに、「一念三千理事」という御文には、

「業ごうに二有り一には牽引けんいんの業なり我等が正く生を受く可べき業を云うなり、二には円満えんまんの業なり余の一切の造業ぞうごうなり」(四〇六)

とも説かれております。

これは、十界の生命、たとえば人間に生まれるものもある。また、動物などの畜生界などに生まれるものもある。

そうしたさまざまな姿を現じるその因となる「牽引の業」というものがある。またそれに對し、男女、体つき、體質、性格、能力などの個々の特質を生じさせる因となる「円満の業」というものがある、とおっしゃっているわけです。

屋嘉比 仏法は、厳しく人間の生命の因果をみていく法となるわけですね。

池田 そこで、日蓮大聖人の「御義口伝」という御文には、

「生死しやうじを見て厭離えんりするを迷と云い始覚しかくと云うなりさて本有の生死と知見するを悟と云い本覺ほんかくと云うなり」(七五四)

とおっしゃっておられる。

これはまことに、甚深じんじんの法門を説かれておられますが、私なりに簡潔に申しあげますと、仏法の眼、ひとつの法理を達觀した眼からみれば、「生」も「死」も、すべて永遠に実在するということになるわけです。ここが、仏法のひとつの極理ごくりともいえるのではないでしょうか。

私も、まことに浅学ではありますが、生命が永遠であるということが、少し感じられるような気がする昨今です。ありがたいことと思っております。

「諸行無常しよぎやうむじやう」すなわち「仮有けう」。この「諸行無常」の社会。「仮有」である人間や社会の、より深い次元から、人間そして人生と社会というものを見きわめていけるようになったことは、

最大の幸福者と思っております。

少々のことでは、動じない自分を見いだすことができるということは、仏法の実践者として、これ以上のありがたい境涯はないと思っております。

科学と宗教の関係

——話題を変えて申しわけありませんが（笑）、よく日本の急速な技術力の発展は、応用が得意だったからといわれますが。

池田　そうともいえませんが、観点を変えれば、納得しうるものは受け入れるのが早いというよさがあるのではないでしょうか。ですから、科学の公理に対しても、それがまったく新しいものであったとしても、ひとたび理解すればたいへん忠実に受け入れるともいえるでしょう。

屋嘉比　そう思います。

科学の公理を人間がとり入れていくのは、ごく当然のことのように思われます。だが、つい近年まで、実際の科学の進歩の歴史は、人間の偏見との闘いの歩みでもありました。現代のアメリカでさえ、その残像のようなことがあります。数年前、ダーウィンの進化論と聖書

をめぐって、象徴的な出来事がありました。

——ダーウィンの進化論は、聖書の教えに反するとして、学校で教えることが、問題になったことがありますね。

池田 私も新聞で見たとき、たいへんに驚いた。

たしかその問題は、法廷まで持ち込まれ、アーカンソー州とテネシー州では、最高裁までいったんではなかったでしょうか。

キリスト教のグループが、神が自分の姿に似せて人間をつくったという聖書の教義を、ダーウィンの進化論といっしょに学校で教えるべきだ、と訴訟を起こしたわけです。結局のところ、その訴えは却下され、実現されなかったようです。

屋嘉比 現代はともかく、十九世紀に、ダーウィンがビーグル号で南半球を航海し、動植物や地質の観察から、はじめて進化論を唱えたときの弾圧はひどいものでした。

——なぜ、このようなことが、現代でも問題になるのでしょうか。

池田 進化論は理論としては成立しても、ダーウィンの進化論そのものには、現実矛盾する事柄もでてきているという学者もいるようですね。

屋嘉比 そのとおりです。アミイバなどの原生動物から人間までの進化を解明するのは、たいへんなことです。

そこで、全部を証明できないとなると、今度はまた聖書の天地創造説を持ち込み、同じレベルで扱おうとするような、時代に逆行した考え方が顔をだしてしまふ場面もでてくるわけですね。

——考えてみると、人間の心を本当にとらえ、納得させるということは、たいへんなこととつくづく思います。

池田 まったくそのとおりです。ですから仏法では、

「石中の火・木中の花信じ難けれども縁に値うて出生すれば之を信ず（略）此等の現証を以て之を信ず可きなり」（かんじんのほんぞんしやう「観心本尊抄」二四二）

と、まことに明快な表現で説かれています。この文意は、生命のなかの仏界は凡夫には信じがたいけれども、現証によって信すべきである。このように宗教は、あくまでも誰人も心から納得し、心からの満足を得られるということが大前提でなければならぬ、というわけですね。

屋嘉比 一見、単純のようで、鋭い洞察を包含した御文と思います。科学、医学においてもすぐれた理論とは、そのとおりの現証があつて、はじめてそういえるわけです。

その意味でも、現証を重んじる仏法はたいへんな科学性をもった宗教だと思います。

池田 高等宗教は、けっして科学と相反しないということが公理です（笑）。そうでなけ

れば普遍・妥当性を持ちえない。私たちも信じないでしょう（笑）。科学と宗教は、相互に尊敬しあっているべきものだと思いますね。

屋嘉比 そうでしょうね。

考えてみると、私たちの日常生活でも、科学性などということをしていまいち意識しなくとも、生活のなかで当然のこととしています。

池田 そうです。人間のひとつの生活の知恵になっている、と行っていいでしょう。ですから、昔から、「論より証拠」という有名な格言がある。また西洋にも同意義の警句がある。

——ええ、「範例は教説にまさる」(Example is better than precept) というのがあります。

屋嘉比 そうした格言が、洋の東西を問わず、昔からいわれてきているのも、人々が實際経験のなかで自然のうちに体得してきた道理、といえるのではないのでしょうか。

池田 そうです。ですから日蓮大聖人の御文には、

「仏法と申すは道理なり道理と申すは主に勝つ物なり」(「四条金吾殿御返事」一一六九)
とも説かれております。

屋嘉比 「主に勝つ」とはどういうことですか。

池田　ひとことで申しあげますと「主」というのは、現代でいえば社会、あるときは権力ということになるでしょうか。

ですから、さまざまな経緯けいゐがあつたとしても、仏法の正しき道理、正しき法というものがあれば、人生また社会において、見事なる勝利の実証を示していけるといふことになるでしょうか。まあ、これはさらに深い仏法の論議があるのですが……。

屋嘉比　なるほど。仏法とは、本当に人間の生き方にそつた理ことわりと思いますね。

人類の意識を変えた一枚の写真

屋嘉比　第一章で、先生が、「地球自体もまた一個の生命体」という見解を、さりげなく話されましたが、私はたいへんに感動しました。

じつは、私はこの対談もあることですし、また自分の勉強にもなればと思い、さまざまな外国の関係文献を見ております。

そのなかに、第二代会長であられた戸田先生の思索に迫るような理論体系があつた。これこそ現代の最先端をゆく、科学的なシステム論として、世界から注目されていることがわかつたのです。

池田 そうですか。簡潔に私どもにもわかるように（笑）、話してくれませんか。

屋嘉比 すでに先生もご存じかもしれませんが、地球が「生命圏」として存在しているという科学者の提唱です。

池田 それは私も聞いています。名前は忘れましたが、アメリカとイギリスの学者ではないでしょうか。

屋嘉比 そのとおりです。イギリスのJ・ラヴロックとアメリカのリン・マーギュリスという人が提唱したものです。

彼らは、大気中の化学的組織や地表温度、その他、さまざまな面において、地球がみずから「バランス」と「調整」を図っているという実態を調査したわけです。

池田 彼らは、調査した無数のデータをつきあわせてみて、

「地球全体を一個の生命体とみなす場合にのみ、これらの現象は理解できる」という実証的な結論を導き出そうとしているのではないのでしょうか。

屋嘉比 彼らは、その理論を、さしあたって「ガイア仮説」と名づけております。

池田 いままでの科学の概念では、どうしてもその理論を表現できないので、ギリシャ神話に言葉を求めたということでしたが、本当でしょうか。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 「ガイア」とは、どういう意味になりますか。

屋嘉比 例の「カオス」(混とん)のなかから、大地を生み出した女神の名前だった、と思います……。

池田 ユニークな科学者には、ロマンがありますね。(笑)

屋嘉比 先生は以前、数人の宇宙飛行士と会談されていますが、そのなかで地球を「生命圏」としてとらえるような話がありましたか。

池田 おしなべて彼ら宇宙飛行士は、宇宙船から「一個の地球」という実体を見るのは、劇的かつ深遠な精神的体験である、と語っておいりました。

屋嘉比 はじめて宇宙船から地球を撮った、あの一枚の写真ほど、私ども人類の意識を変えさせたものはない、と私は思います。

池田 たった一枚の写真で世界を変革したという、事実の革命でしたね。

屋嘉比 最近は、見慣れてしまっていて感動がなくなってしまうしましたが(笑)、未来の人類にとってのたいへんな出発であった、と私は見たいと思います。

池田 私も、そのとおりと思います。

後世の歴史家は、きつと二十世紀を代表するシンボルとして、位置づけていくでしょう。

「かけがえのない地球」の何ものかを、あの写真は無言のうちに訴えかけてくる。

ですから、核廃絶の平和運動にあっても、自然保護の運動にあっても、そのひとつの象徴ともなっていますね。

屋嘉比 この「自然」と「人間」の「共生」ということは、「地球という生命体のなかの人間」から、さらに「宇宙生命のなかの地球」へと、広がっていくのではないのでしょうか。

池田 それは、ひとつの流れでしょう。

この流れを逆流させてはならない。また、もはや逆流はできないでしょう。

「宇宙」と「地球」と「生物」という連関性が脈動し、連動し、根幹をなしゆくことは、ひとつの真理であるからです。

屋嘉比 その一点こそ、今後の科学の重大課題と思います。

「老化」のナゾ

——また、ちょっと話題を変えますが（笑）、「生」をうけたものかならず老いる。人間の老化の現象を、どう考えたらいいのでしょうか。

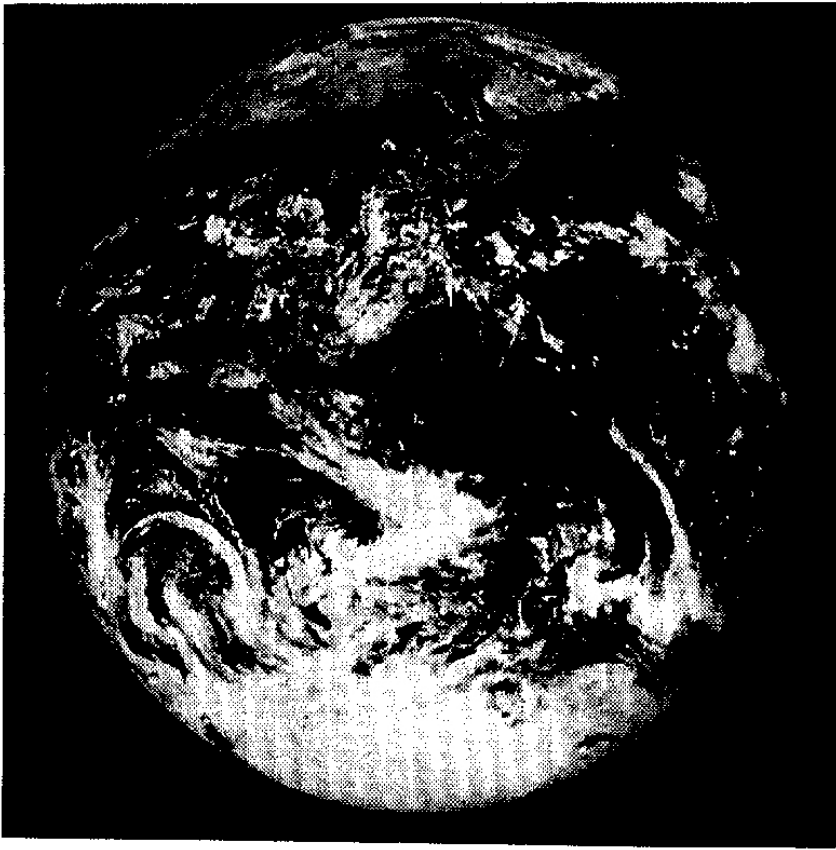
屋嘉比 医学が急速度に進歩しても、たしかに、「老化」という問題は、まだまだ、ナゾにつつまれているといわざるをえませんね。

——少々、顔のシワが伸ばせても（笑）、老いてますますかくしゃく嬰鑠えいさくという人がいても、根本的にはどうしようもないことですから。（笑）

池田 生きゆくための重大問題です。

「老化」と「死」という問題は、永遠に人間をして宿命的に支配していくものだ。

屋嘉比 ですからいま、「老年医学」が盛んに研究されています。各地の大きな病院には



宇宙船から撮った地球。

「老人科」があります。

池田 老化現象は誰もが実感できる。だが、その解決策となると、現代社会に残された最大の難問のひとつといえるのでしよう。

心理学、社会学、政治や経済なども含め、総合的にとりくむべき問題です。

屋嘉比 歳をとっても、私はこのとおり元気だ、という人もいます。しかし、あるていどの年齢に達すると、精神機能も低下し、肉体的にも、そこかしこおかしくなってきました。

（笑）

池田 でしようなね。いわゆる加齢^{かれい}にともなう生理的な変化の現象ですね。

屋嘉比 たとえば歳をとるにしたがい、身体全体の組織から、しだいに水分が減っていきま

す。

池田 躍動する若さを「みずみずしい」と表現します。誕生したときの子供の体重の八〇パーセント前後が、水分の重量だと聞いたことがあります……。

屋嘉比 そうです。ところが、成人では六〇パーセントに減り、老人になると、個人差はありますが、ほぼ生まれたときの三分の二になります。

——樹木のように枯れていくんですか。（笑）

屋嘉比 また、「人は血管と共に老いる」とよくいわれるように、歳とともに全身の動脈

硬化が進みます。さらに、全身の生理的機能が徐々に低下していきます。

よく中年以降、目が遠くなったという人がいますが、これは医学的には眼球の水晶体が硬化してくるためです。これが、いわゆる老眼です。

——よく、目とその周辺には、年齢がでる、といいますが。(笑)

池田 人生のそれなりの域に達した人の顔つきというものには個性がある。

それは、目の輝きとか、目の表情が個人差をつくりだすからだ、という人もおります。ですから、目をかくすと個々の判別がむずかしくなるといふ人もおりますね。(笑)

——だからサングラスが必要になるんですね(笑)。目のまわりの老化が、いちばん老いを目立たせることになりますから……。

屋嘉比 いや、サングラスは、目の老化を防ぎます(笑)。紫外線から目を守るのです。

——頭髮にも大変化がおきます(大笑)。精神機能が低下しはじめるのは、何歳ぐらいを境目にしてでしょうか。

屋嘉比 意外と早くから低下するものもあります。知能テストの成績などは、二十歳がピークで、その後は徐々に低下していくようです。二十歳を過ぎると、毎日、十万個の脳細胞が死滅してゆきますので、それにもなう現象かもしれません。

——すると、私は四十五歳ですから、かなり低下してますね。(笑)

屋嘉比 そんなことはないですよ（笑）。たしかに、脳細胞はすでに九億個以上は減少し

ていると思いますが（笑）。問題は神経細胞の回路です。頭を使う人は、歳をとっても、神経回路はますます発達し、機能が向上することもあるようです。

でも、ふつう記憶力や学習能力の衰えが明らかに目立ちはじめるのは、やはり、四十歳ないし五十歳ぐらいからのようです。（笑）

——このまえ、『朝日新聞』で「高齢化する世界の指導者」という企画をやっていました。意外なほど高齢者が多いんですね。なぜ、各国の政治的指導者の健康がしばしば重大な関心事とされるのか、あらためて、その理由がわかりますね。

屋嘉比 ソ連のチェルネンコ書記長（当時）は七十三歳ですか、よく健康不安説が流れる。また、アメリカのレーガン大統領もたしか同じ七十三歳。大統領選の遊説中に、飛行機のトラブルでつまずいたことが、選挙の結果に影響するかもしれないとニュースになりましたね。（笑）

——名誉会長は、世界の各国の指導者と会っていますが、年輩の指導者がいいか、または若い指導者のほうがよいと思われませんか。

池田 それはなんともいえない（大笑）。その国の実情もあるだろうし、個人差もあるでしょう。ただいえることは、時代が若い指導者を要請していることは、まちがいないと思います。

ます。

屋嘉比 先生が会われた世界各国の指導者はどれくらいの年齢でしたか。

池田 ちょっと年齢はよく覚えていないんですが。(笑)

中国の鄧小平党中央顧問委员会主任とは、二、三回会見しましたが……。

——いま、八十一歳ですよ。

池田 あっ、そうですね。元気ですね。

もう亡くなりましたが、コスイギン首相は、会ったときは、七十歳ぐらいだったでしょう
か。

現在のチーホノフ首相は、七十五歳ぐらいのときだったと記憶しています。

ブラジルのフィゲイレド大統領、ペルーのベラウンデ大統領、ルーマニアのチャウシェス
ク大統領、ブルガリアのジフコフ議長(元首)、すでにやめていますますがメキシコのロペス大
統領、インドのデサイ首相……。

皆、六十歳代もしくは、七十歳代だったと思います。たしかに皆、元気でしたね。(大笑)
オランダのルベルス首相、オーストリアのジノワツ首相は若い人でした。アメリカのエド
ワード・ケネディ上院議員も若かった。キッシンジャー博士はたしか、五十代だったでしょ
うか。

あ、それから周恩来首相は、七十五前後でしたかね。亡くなる一年ぐらい前でした……。86

屋嘉比 革命でもないかぎり、若手の政治指導者はなかなか出てこないものでしょうか。

池田 たしかに安定を求める社会では、相対的に保守化が進みますから、どうしても世代の交代はむずかしくなるでしょう。ときには多くの人々が、若い指導者を待望することもちがいない。その例として、故ケネディが四十二歳で大統領になったような例もありますね。またヨーロッパでは、比較的若い指導者が多いようです。

屋嘉比 しかし世界的には、ますます高齢化しているような気がします。（笑）

—— ちょっと調べてみても、イランのホメイニ師が八十四歳、また独自の外交路線が注目されているチュニジアのブルギバ大統領が八十一歳。七十八歳では、ベトナムのファン・バン・ドン首相、マラウイのバンダ大統領、スリランカのジャヤワルデネ大統領などがいます。とくに共産圏で高齢者が目立ちます。

七十歳以上は、朝鮮人民共和国の金日成主席をはじめ、東欧八か国のうち、五人までがそうですね。

池田 すると、現在の指導者たちにとって最大の政敵は、自分の年齢になってきてしまった感がある。（笑）

要請される「人類のための宗教」

——ところで、名誉会長は、多数の方々と会い、また激励をしておりますが、名誉会長の高齢者観はいかがですか。

池田 いや困ったね。(笑)

私は昭和三年生まれで、「昭和三年会」というのをつくっています。

その会合のとき、同じ年齢であっても個人差と、老化現象のあらわれ方にちがいがあるのを、目のあたりにします。そのときほど、おたがいに、格差を考えさせられることはありませんね。(大爆笑)

屋嘉比 そうですか。たしかに表面にあらわれる老化現象には、個人差があるように見えますが、それ以上に、精神的な面の老化のほうに、個人差がはなはだしいといえるでしょう。

池田 そこで、老いのことは、目の輝きによって、あるていどの年齢になっても、より若く見えたり、若くとも、よりふけて見えたりすることは事実です。

また、苦勞しているから老いの印象が強いとか、苦勞していないから若々しいとか、いちがいにはいえないと思う。それなりの人生の年輪を刻んできた人の顔は、なんともいえ

頼もしさと、安心感を私たちにあたえてくれるものだ。

そういった人々の、物事の本質を見抜く眼は、むしろ歳とともに深まっていくものでしょう。

このへんの自分の人生のしかたを、みずから考えなければならぬと思います。

——それにしても、科学万博に、人間の老化を止める技術が展示されるのは、いつのことでしょうか。（笑）

屋嘉比 いや、その予測は、ちょっとむずかしいですよ。（笑）

池田 最先端の技術を利用することにより、老化遺伝子のナゾを解く研究をしている学者がいるとも聞いていますが、屋嘉比さん、どうなんでしょうか。

屋嘉比 たしかにお話のとおりです。

簡単に申しあげますと、「老化現象」というのは、本質的には細胞レベルの現象です。私たちの身体の細胞は、生まれてから約五十回ほどの限られた回数しか分裂できないという考え方や、生まれたときから老化をつかさどる遺伝子があるとする考え方などがあります。

ある年齢になると、誰でも、この遺伝子が働き出し、（細胞が死滅してきて）老化が始まるというわけです。

池田 そうですね。具体的には、どういうことになりますか。

屋嘉比 たたとえば、動脈硬化やガンなどは、本質的には「老化」にともなう現象と考えられています。ですから、多くの医学者が、生命の本体であるDNA遺伝子に着目して研究しております。

池田 そうしますと、遺伝子の性格や構造に光をあてている段階ですか。

屋嘉比 たとえば、寿命の長い人の遺伝子の構造がどうなっているか、明らかにしようとしています。

池田 それが、いま注目されている生命工学ですね。

屋嘉比 たいへん熱の入っている分野です。

学者によっては、老化遺伝子の発見に昼も夜もないほどです。

池田 その老化遺伝子が見つかる可能性はあるのですか。

屋嘉比 たいへんにおもしろい例があります。子囊菌^{しのう}という菌では、その細胞中のミトコンドリアのDNAが、老化遺伝子と考えられています。ところが、突然変異によってできた、老化遺伝子のない菌は、限りなく増殖しつづけるようです。

池田 すると、人間の老化遺伝子を見つけ、その働きを抑えることによって、すべての人間に長寿があたえられる可能性はあるのですか。

屋嘉比 結果的には、まだわかりません。ただ、もし実現すれば、遺伝子操作の問題は、

人間の運命打開のひとつになる可能性はあるわけです。

池田 運命打開のひとつになればいいですね。

屋嘉比 いまだ希望的観測です。ですから、私は価値ある人生を生きるうえで、科学とともに、人類のもうひとつの文化的財産である宗教の存在意義は大きいと思います。

池田 よくわかります。イギリスのJ・モーレイという思想家は、すでに、

「科学のつぎの仕事は、人類のための宗教を創造することにある」といっていますからね。

屋嘉比 含蓄^{がんちく}ある言葉と思います。

池田 私がこの仏法を知って間もないころでしたが、あるとき、総本山第六十五世日淳^{＊にちじゆん}上人の論文を拝し、たいへんに感銘を深くしたことがあった。それは、多少表現は違っていたかもしれませんが、この「生命」という問題についていえば「勿論^{もちろん}科学の世界でない。経済の世界にもない。此は宗教の世界に於て初めて存在し得るところであります」という内容であったと思います。

屋嘉比 なるほど。たしかに、「生命」「人類」「宇宙」といった根本的問題の解明は、上人のおっしゃるとおり、宗教的次元のことであると、私も一医学者として感ぜざるをえませんね。

第三章

仏法は「生老病死」をどう超えるか

一生を価値あるものに

屋嘉比 「生」から「老」の問題にはいつておりますが、もう少し深く、池田先生にうかがいたいと思います。

池田 人間は、この世に「生」をうけた瞬間から、絶対に避けることのできない「老」の相、「病」の相、そして「死」という厳肅げんしゆくなる相を、現じていかねばならない宿命がある。これだけは厳然げんぜんとして平等です。

屋嘉比 まったくそのとおりです。(笑)

池田 ですから、仏法は、広くみて、衆生しゆじやう、つまり「生」あるものはすべて、この現実から、消え去っていく。

その実相じつそうのうえから、どう生きていくべきか、また生きていかなばならないか、ということとを説き明かしたものだといえるでしょう。

屋嘉比 それこそが、いっさいの根本問題と思います。

池田 私は、この「生命と仏法を語る」も、じつは、この生、老、病、死という「四相そう」を軸にしながら論じていこうと、秘ひそかに思っているのですが……。

——屋嘉比さん、第二章で、「生」の意義、「老」のナゾも、医学ではこれからである、という話でしたね。

屋嘉比 現段階では、一步一步と、解明にちかづいてはいますが、まだまだ時間がかかるでしょう。

池田 いわば、「生命」の実相というものを、東洋の英知が、*えんたき演繹的にとらえようとしたのが、仏教である。*きののう帰納的に近づこうとするのが、西洋の医学である。その両者の方向性に、一致点が見いだされたとき、人類の偉大なる蘇生そせいの開幕となるでしょうね。

なかんずく大乗*だいじよう仏教が、もつともその解答を明確にしていると、私は思っております。

屋嘉比 科学の分野においては、今世紀最大の科学者といわれるハイゼンベルク、ボーア、アインシュタインといった世界的物理学者が、東洋の仏教という存在に、光をあててきております。こうした傾向性が、医学の底流にも湧わきおこってきていると思います。

池田 ともかく私どもは、いちおう、有限であるこの一生を、最高に有意義に、かつ価値あるものとしていきたいものです。

屋嘉比 私も、何人もの患者の臨終りんじゆうに立ち会っておりますが、周囲の人々に厳肅なる「生」と「死」の姿を教えて亡くなる人もいます。

また、やるせない悲しみと苦しみの姿で亡くなっていく人も多くいます。

その亡くなっていく人と、それを取りまく人々の姿を見たときに、ひとつの仕事ではありませんが、心深く、信仰というか、宗教というか、その心が呼び起こされてくる気がします。これは私の原体験げんたいけんです。

池田 まことに尊い体験と思います。

屋嘉比 日本の分子生物学の権威けんいといわれる渡辺格博士いたるは、「他人の死は、客観的にとらえられるが、(中略)自分が死ぬこと、この世からいなくなるということが自分でよくわからない」といっております。

これは、医学を志向するうえで、忘れてはならない点と思います。

池田 たいへんに率直、かつ的まとを射た言葉いと思います。

人間には、さまざまな人生があり、さまざまな死がある。病気がちの人もある。短命の人もある。また火事や交通事故のような、不慮ふりよの死に出合う人もいる。また殺されるような場合もまれにある。

老衰で亡くなる人も多くいる。そして、いわゆる寿命で亡くなる人もいる。それこそ千差万別である。

しかし、長命であったから即幸せそくである、といいきれない場合もある。もちろん、それも幸福のひとつには違いないかもしれないが……。

だが、ここでいちばん大切なことは、心の奥底おうていから幸福を感じとれる一生であるか、悩み、
煩悶はんもんに明け暮れながらの一生であるかということとは、当事者である本人が、いちばんよく知
っていることだと思う。そのへんの人生の深い在り方あを、人はもっともっと考えなくてはな
らない時代ではないでしょうか。

仏典に登場する名医たち

——いつかうかがおうと思っていたのですが、仏法では手術を認めるんですか。(笑)

池田 それは、場合によるでしょう。けっして手術をしてはいけない、という御文はない。

(笑)

歴史的にも、二千数百年以上もまえ、インドに仏教たもを持った大外科医がいた、という事実
があります。

屋嘉比 それは誰でしょうか。

池田 ご存じでしょうが「耆婆ぎば」です。

屋嘉比 仏典にでてくる著名な医学者は、他にもおられますか。

池田 います。日蓮大聖人の「治病大小権実違目じびようだいしょうごんじつゐもく」という御文にもでております。

「所謂治水・流水・耆婆・扁鵲等が方藥・此れを治するにゆいて愈えずという事なし」(九五)

と、耆婆という名医の他にも、治水とか流水とか扁鵲といった、高名な名医の名前が出てきます。みんな、屋嘉比さんたちの先輩ですよ。(大笑)

屋嘉比 それでは、日蓮大聖人の時代には、どういふ方がおられたんでしょうか。

池田 有名な四条金吾という方がおります。大聖人の在家の信徒の一人です。

屋嘉比 治水とか流水とかいふ人は、どういふ経文にでているのですか。

池田 金光明経こんこうみょうきやうという経文にでております。治水が親で、流水が子供です。

屋嘉比 耆婆はどんな人ですか。

池田 釈尊の弟子です。また釈尊の侍医じいであつたという説もあります。

——扁鵲は、どうでしょう。

池田 有名な司馬遷しばせんが書いた『史記』のなかに登場してきます。

屋嘉比 まだ、他におりますか。

池田 中国の「華陀かだ」も御文にでています。これはたいへんな名医であつた、という歴史的資料(『後漢書』ごかんじよ『魏志』ぎし)が残っております。

屋嘉比 ところで、耆婆が活躍した二千数百年前といへば、西洋においては、ギリシャ医

学が華^{はな}を咲かせてくるころです。

池田 そのようですね。古代インド医学、仏教医学とギリシャ医学は、古代人類の東西における、医学の双璧^{そうへき}といっていていいでしょう。

屋嘉比 私も、古代インドの医学について、最近調べてみましたが、たしかに、驚くべき医学的事実があつたことを知りました。

池田 もっと調べてください（笑）。耆婆^{きば}なんかは「耆婆大臣」といって、政治家でもあつたわけです。この耆婆は、「医王」とまでいわれ、仏典にも記されております。

たとえば、彼は脳腫瘍^{のうしゅよう}とみられる病気を治療するために、開頭手術まで行つたようです。それだけでなく、腸閉塞^{ちようへいそく}とみられる子供の開腹手術まで行っている。そして完治させているようです。

——現代人として、たいへんな驚きですが、仏典なり、史実なりの証拠があるんでしょうか。

池田 釈尊が説いた、四分律^{しぶんりつ}という經典にもある。また有名な羅什^{らかし}三蔵が漢訳した、大品^{だいひん}般若經^{はんにやきやう}にも、詳しく述べられております。

屋嘉比さん、インドでは、それ以前においても、痔^じの手術をしたり、膀胱結石^{ぼうこうけつしつ}の手術を行つたようですね。

屋嘉比 そうなんです。私もそうした史実を、『ススルタ大医典』（日本医史学会版）のなかに見つけたときには、信じられませんでしたね。

池田 現代医学に比較して、どこまで技術が進歩していたかは、いまでは知る由よしもあります。せんが、いちおう、歴史の事実です。

——それにしても、そんな昔に、脳とか腸の手術をして、痛くなかったんですかね。（笑）

池田 いや、自分はそこにいなかったもので、よくわからないけれども（大笑）、ただいえることは、当時、すでに全身麻酔ますいのようなことがなされていたようです。

——たとえばどんなふうにしたんでしょうかね。

池田 いま申しあげた四分律には、「かんしよく鹹食を与へて渴せしめ、酒を飲んで酔はしめ」と出ております。

ですから、鹹食つまり、なにか相当塩辛いものをあたえて、のどが渴いたところで、多量の強い酒を飲ませる方法でもあったのでしうか。

屋嘉比 あつ、それはアルコールによる麻酔の一種の方法でしうかね。

池田 専門的なことは、私はよくわかりませんが、アメリカの研究者が、耆婆は手術をしたときに、「サンモヒニー」というもので麻酔をかけ、また「サンジヴァニー」というもので覚醒かくせいさせた、という記録があると、なにかに書いていたと思います。

屋嘉比さん、専門家なんですから、一度この本を読んで、私に教えてください。（笑）

屋嘉比 はい、わかりました（大笑）。英文ですか。

池田 英文です。

日本語訳の本はありません。ただ、部分的に日本語に翻訳ほんやくした人もいます。

屋嘉比 「サンモヒニー」とか、「サンジーヴァニー」というのは、聞きなれない言葉ですが、英語ですか。

池田 サンスクリット語なんです。それがいったいなんなのか、まだ確認されていません。この研究者は、朝顔の種からつくった麻酔薬ではないか、と推測していたと思います。記憶なので、多少間違いがあるかもしれませんが、ご了承ください。

屋嘉比 よくわかりました。調べてみます。

——それはそれとして、屋嘉比さん、近代医学では、いつごろから脳外科の手術が行われるようになったのでしょうか。

屋嘉比 十九世紀の末だったと思います。

ともかく、アルコール麻酔による脳の手術は、耆婆が世界で初めてだと思われます。

関心を集める「インド医学」「仏教医学」

——手術したあと、傷口に塗る消毒薬もあったのでしうか。

池田 手術に使ったかどうかは、わからないんですが、それと思われるフシがあるんです。毘尼びに母經もきようという經典に、「身上みづかみに瘡きずを生ぜんに比丘そじゆうさん鹿洩散ろくせうさんを用ひて瘡を洗はん」というくだりがあるんです。

屋嘉比 そうしたものを応用して、なにかの消毒薬が使われていたことは、じゅうぶんに推測できますね。

——それにしても二千数百年もの前に、どうしてこんな高度な医術が発達したのでしうか。

池田 当時の記録の詳細がすべて残っているわけではありませんので、個々の技術については断定はできないのです。ただ、古代インドには、それらの技術の基盤となる「インド医学」、ならびに釈尊や耆婆によつて、そのうゑに創設された「仏教医学」というものがあつたようです。

屋嘉比 いま、先生のおっしゃった「インド医学」や「仏教医学」は、世界の医学史の研

究家のなかでは、最近、とみに関心を集めてきている分野です。

池田 たしか、インドの故ネルー首相の著書『インドの発見』のなかにも、仏教医学のことが紹介されておりましたね。

また、フランスの歴史家が書いた『インド文化史』（シルヴァン・レヴィ著）という本のなかでも、この仏教医学についてふれてあったと思いますが。

ところが、長い間、西欧の医学研究者は、こうした仏教医学の先見性を、なかなか信じることができなかったようです。

——最近は、学問的にも取り上げられてきてるんでしょうかね。

屋嘉比 第二章でも、ちよつと話題になった「ニューサイエンス」を提唱する科学者たちの研究にも、そうした傾向がみられてきましたね。

池田 私たちの知っているところでは、イギリスのジョセフ・ニーダム博士も、東洋医学の研究をしてきていますね。彼は、たいへんに地道に東洋の科学史の研究をすすめてきている。

屋嘉比 博士は東洋科学史の第一人者として、異存のないところです。

それにしても「仏教医学」とはよくいったもので、その先見性は注目に値するものがありますね。

池田 釈尊^{しゃくそん}当時のインドにあつては「医方明^{いほうみょう}」、つまり医学も、帝王学のひとつにされておりましたからね。

釈尊自身も、この医方明という当時の医学の知識については、相当なものがあつたようです。

これは、仏典のなかにも、さまざまな病気やその病因、また薬学や具体的な治療法、さらには病気の予防、看病にいたるまで、おりにふれ、時に応じての広範囲にわたる説法が、随^{ずい}所^{しよ}に見られることでわかります。

屋嘉比 具体的には、どのようなことが説かれておりますか。

池田 ひとつの例をあげますと、ある仏典で、病気は治すことも大事であるが、かからなようにすることがより大事である。それにはどうしたらよいか、というようなことまで、こまごまと説かれております。

屋嘉比 医学の基本です。最近とみに「予防医学」というものが重視されるようになっております。たいへんに先駆的な見方ですね。

池田 たとえば、卑^{ひきん}近な例で「睡眠」がいかに重要であるか、というくだりもあります。とくに「熟睡の心がけ」ということが説かれております。

屋嘉比 医者自身にも、切実なる問題です。(笑)

池田 また、「洗浴」や「手洗」とか、「うがい」の励行などがなぜ大事か、ことこまかに説かれたものもあります。

屋嘉比 たいへんな氣くばりだったわけですね。

——すばらしき「健康維持法」ともいえますね。

池田 ともかく、現実生活に密着した健康法、長寿法を考えたと思われすね。ですから釈尊は、弟子たちが病氣にならないように、健康で修行が達成されるように、つねに配慮していたことがわかります。

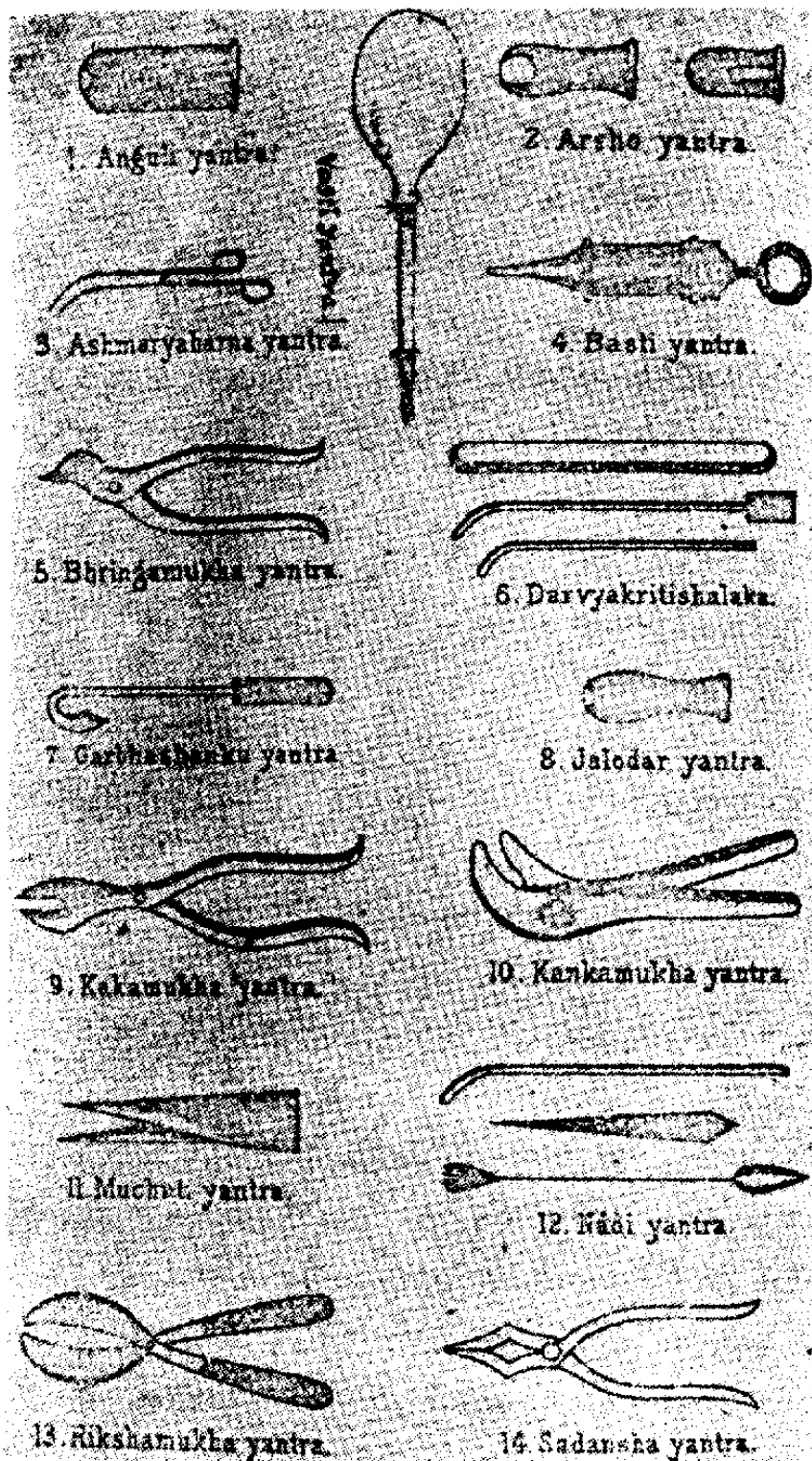
——大指導者たるもの、いちいち細かいことなど考えない、などと思うことは、たいへんな間違いであることがわかりました。

池田 ただ、ここで申しあげておきたいことは、釈尊の弟子たちの姿を見ればすぐわかるように、いざというときは「法」に殉^{じゆん}ずる精神が根本であつたということです。

こうした釈尊の心くばりも、弟子が修行を完結するためであつたということを、けっして忘れてはならないということです。

真実の仏教は科学を否定しない

屋嘉比 その他にも、仏教に説かれているものがあれば、参考にもしたいと思いますので、ぜひ教えていただだけませんか。



古代インドの手術器具。

池田 「食生活」ということについても、増一阿含經ぞういちあこんぎょうという經文に説かれております。

「若し過分の飽食は、則ち氣急に身満ちて、百脈調はず、心をして壅塞ようそくせしめ、坐臥ざが安からず、又食を減少すれば、則ち身羸つかれ心懸はるかに、意慮固まることなし」

これはおわかりのように、食べすぎは循環器系じゅんかんきけいに悪い影響をおよぼし、無氣力にする。また逆に食を減らせば、身体がやせるばかりか、心が不安定になる、というような意味でしょうか。

屋嘉比 適度なバランスのとれた食事、大切ですね。いやいや、そのとおりです——これこそ健康の基本ですからね。

——耳が痛いです（笑）。編集の仕事は、まったく不規則なもので……。

池田 まあ、現代医学とは、まったく比較できないものも、多々あるでしょうが……。ご存じのように、インドは昔から多民族国家である。気候も北と南では、はなはだ違っている。さらにカースト制度のような社会の構造があった。

こうした環境や、生活習慣や、社会風土をふまえながら、当時の仏教は、しだいに医学の体系も、必要となってきたと思われまします。

——なにごとも、その時代背景、民族意識というものを、知らねばならないと思います。そこで、もう少しおうかがいしたいのですが、他にも医学関係のことが説かれた仏典はあ

りますか。

池田 大乘仏教である法華経にもあります。また権大乘教や小乗教ではありますが、**維摩**
経ききょうや、**雑阿含経**ぞうあこんきょうなどの仏典にも数多くみられます。

とくに**仏医経**ぶつゐききょう、**医喻経**いゆききょう、**治禪病秘要経**じぜんびようひようききょう、**療病痔経**りょうびようじききょう、**十誦律**じゅうじゆりつなどには、多く医学的なものが
説かれております。

屋嘉比 釈尊の時代とほぼ同時期のギリシャでは、医学は最高の経験科学として、尊ばれ
ていたようです。

ヒポクラテスの「**誓い**オルコス」などは、いまでも、**座右の銘**ざゆうのめいとしている医師がおります。
古代インドにおいても、そうした当時の科学としての医学を、仏教が徹底的にふまえてい
るということになりますね。

池田 最高の英知は、東西にわたって一致しているものですね。

ところで、よく仏教は科学的でないとか、科学を否定しているとか、批判されてきたが、
とんでもない間違いです。真実の仏教は、けっして科学を否定はしていない。

いな、科学の合理的、実証的なもののとらえ方を、もっとも大切にしているのが仏教です。
よく戸田前会長は「仏法は科学を尊敬し、科学は仏法を尊敬していかねばならない」とい
われておられた。

私は、そこにこそ「科学」と「宗教」とが、人類に貢献しゆく、ひとつの同じ志向性を共有する、尊い基盤ができると思っっている一人です。

——そこが「科学」と「宗教」の未来を志向するうえで、重大なカギと思います。

屋嘉比 仏法と医学はけっして相反しない、ということがよくうなずけます。すると、手術をしたほうがいいものについては肯定すると、とってよろしいのですか。

池田 ですから、極力手術しないで治せるものであれば、それにこしたことはないわけです。

ゆえに強盛なる信仰ごうじょうということが、すべての大前提となりますが、手術しなければ治せないとはっきりしている外科的な症状なんかは、当然のことです。

ただし、よく戸田前会長もいっておられたが、なんでも手術、手術という傾向も、現代社会の深い問題であると思います。できうるものであれば、この尊厳なる身体にメスを入れずにすむなら、そのほうが望ましいと思います。

とくに、高齢になられた方々の手術はむずかしい、ということも考えねばならないと思います。

屋嘉比 よくわかりました。また、よくわかります。医者自身も手術をうけるのはいやです。（大笑）

——大聖人のお手紙のなかには、なにかございますか。

池田　いくつかあると思いますが、そのひとつのお手紙に日蓮大聖人は、なんじようひようえしちろう南条兵衛七郎という信者へ、

「病人に薬をあたふるにはさきに服したる薬の様を知るべし、薬と薬とがゆき合いてあらそひをなし人をそんずる事あり」（「南条兵衛七郎殿御書」一四九六）

とおっしゃっておられる。

簡単にいえば、あまりいろんな薬を、作用も知らないで重ねて飲んではいけない。また時間の間隔も考えて飲むべきである、というような意味だと思います。

屋嘉比　いや、薬の処方は、近代医学でも治療学の基礎です。七百年以前に、治療学の基本のうえから指導された御文があるとは、たいへんな驚きです。

——最近、なんでもかんでも、生体に化学物質を投与したがる傾向がありますが、危険なことですね。それが原因で起こる体内の諸変化についての研究は、十九世紀後半から本格化されたようです。

屋嘉比　ですから私は、大聖人のこのご指導は、正しい意義があると思います。

仏法は人生の医学

——それでは、仏様でも医者や薬が必要なのでしょうか。（笑）

池田 それは当然でしょう。（笑）

大聖人様も「示同凡夫」^{*じどうぼんぶ}であられる。「凡夫僧」^{ぼんぶそう}でもあられる。また生身のお姿であられる。ゆえに気候の変化や、お疲れなどによって、当然、なんらかの影響はあらわれる。ですから、多少の病もあるでしょうし、悩みもある。そうでなければ、凡夫の苦悩が、おわかりにならない。

——それが自然だと思えます。また道理だと思えます。

池田 法華経では、「仏は少病少悩」と説かれている。なにか特別な存在であられれば、衆生済度は、永久にできないでしょう。^{しゅじょうさいいど}

よく戸田前会長は、「猿の世界は猿がいちばんよく知っている。また鳥の世界は鳥のほろが、われわれよりも知っている……、もったいない譬えであるが、同じように末法の凡夫の苦悩は、同じ凡夫のお姿であられる大聖人がいちばんよくお知りであり、お救いになってくださるのである」という意味のことをいっておられた。

そのへんで、いちおうわかってください。(笑)

——たいへんな迫害と大難の御一生であられ、普通の人間では耐えられないでしょう。

池田 そう思います。

永遠の人類のために、大正法を残してくださるために、忍辱にんじくして下さったのです。

屋嘉比 佐渡もそうでしょうけど、身延みのぶの沢も寒かったでしょうね。

池田 「八寒を現身に感ず」(「富木入道殿御返事」九五五)

という御文もあるほどですから……。

また身延の山中のご様子を、

「八年が間やせやまいと申しとしと申しとしどしに身ゆわく(略)今年は春より此のやまい・をこりて秋すぎ・冬にいたるまで日日にをとろへ・夜夜にまさり候いつるが・この十余日はすでに食も・ほとをととどまりて候上」(「上野殿母御前御返事」一五八三)

とも……。信徒へのお手紙のなかにも、このような御文があります。

ですから、もったいない限りですが、肩もこられたでしょう。ご尊体もいかばかりであつたか、と私は拝察します。

つまり外用＊げゆうのお立場で、凡夫僧という姿を現じられている以上は、現象面では、私どもと同じ人間としてのお姿であることは、当然となるでしょう。

屋嘉比 医学者としてもその姿のほうで、納得いきます。神秘的なもの、架空かくうのものは、現代人は信じられませんからね。

池田 そうでしょうね。要するに仏法は、色心しきしんともに健全に、そして色心ともに生きいきとして、社会のなかで限りなく生きゆくことを教えている。

その仏法の根幹となるものは「慈悲」である。

屋嘉比 「医は仁術」とよくいいますが、仏法は人生の医学ともいえますね。

池田 「ニンジュツ」とか「ジンジュツ」とか聞くと、「忍術」の「猿飛佐助」を思いだすが（大笑）、それとは違うんでしょうが、本当に「仁術」の医学であってほしいですね。それが人々の要望です。

ほんの一部でしょうが、人を煙にまく「ニンジュツ」のようなものもありますね（笑）。本当に人々の悩み、苦しみを治し、希望をあたえぬいていくことが「ジンジュツ」なんでしょうね。（大笑）

屋嘉比 そうなんです。（大笑）

池田 そこで、仏法の真髓しんずいである「御義口伝おんぎくでん」という大聖人の口伝書には、

「仏心ぶつしんとは大慈悲心だいじひしん是なり」（七六九）とあります。

大切なことは、けっして利害であつてもならない。損得であつてもならない。ただひたすらに、人をして、この一生は当然のこと、永遠にわたる人生の生きがいと蘇生への、勇健ゆうけんなる原動力をあたえゆく「大法」たいほうを教えゆくことにある。

それを私どもは、日夜、実践しております。これも、言葉をかえていえば、ひとつの「仁術」かもしれません。

屋嘉比 医学者として忘れてはならない、大切な課題と思います。

池田 ところで、医学に限らず、天文学でも、数学でも、この古代インドにおいては、学問的に大変に進歩した時代であつた。有名な歴史的事実です。

さらに政治や文化においても、かの有名な阿育大王アソカだいおうや迦式志加王カニシカおうに代表されるような、平和国家のひとつの理想の姿ができあがつた。

その基盤となる思想というか、哲学といおうか、それが即そく仏教であつたということを、私は誇りにしております。

と同じように、複雑な現代社会、また未来において、仏法の真髄である大聖人の仏法を基盤として、さらに光輝ある社会と世界を、現出していくという悲願が、私どもの「祈り」であり「行動」なのです。

——たしか、ガンダーラ美術の時代も、見事な文化の開花がなされた時代でもありました

ね。

それはさらに、中国の唐代の文化、日本の白鳳^{はくほう}、天平^{てんぴょう}の文化とも全部連動^{れんどう}し、つながっているようです。

池田 まったくそのとおりと思います。ひとつのすぐれた文化が開花した場合、世界に広がっていくのが、歴史の方程式である。また自然な道理といってよい。

ゆえに、完全なる根ができあがってしまえば、世界への開花は早い。根っ子を固めるのがたいへんです。それがいまの時代と思っています。

「成長」のピークは二十五歳

池田 ところで屋嘉比さん、人間の若さは何歳ぐらいがピークですか。

屋嘉比 生物的な意味での「成長」の頂点は、だいたい二十五歳です。それからは、どうしても下り坂です。(笑)

池田 すると、やはり二十五歳ごろで、ほぼ人の背丈や、足のサイズなどの体形も、固まってくるとみてよいですか。

屋嘉比 そのとおりです。その意味では、幼年期、少年期から二十五歳までが、一個人の

人間が心身ともに形成される大事な時期となります。

——だが、脳だけは違うようですね。

屋嘉比 ええ、だいたい三歳過ぎまでに、人間の脳の重さは大人の七〇〜八〇パーセントになります。

池田 この三歳ぐらいまでの成長期の脳に、いったん刻み込まれたさまざまな刺激は、そのまま先天的な素質のような習性となってしまう、と聞いたことがあります、どうでしょうか。

屋嘉比 そのとおりです。とくに三歳までにできあがった「性格」は、一生をとおしての基本になる、といえると思います。

池田 ともかく、どんなに小さい子供でも、驚くほど、独立した一個の人間としての人格を、その内面にもっていることは事実ですからね。

そういう意味からも、三歳ぐらいまでの躾しつけがたいへんに大事だ。

屋嘉比 たしかに、医学的にも、心理学的にも、三歳ごろまでの育児環境、また教育が大切だということはいえると思います。

——最近の親は、そうしたことを聞くと、すぐ「幼児天才教育」を連想しますね。(笑)

池田 いや、その子が一生涯、幸せになっていけるような環境というか、思いやりを、両

親がもつことが大事だと思う。夫婦ゲンカなんかは、あまりよい環境ではないようですね。

(笑)

屋嘉比 そのとおりです。

池田 教育を心がけることは、当然、大切と思いますが、子供の成長の段階、段階において、その子のためにを見守ってあげたらよいか、ということが、素朴のようではあるが、大切な教育であることを知らねばならないでしょう。

——その意味では、しっかり「しつけ」することも大切ですね。「しつけ」の第一は食事にあると思います。

屋嘉比 心理学的にみても、食べ物好ききらいが多い子供は、ゆがんだ性格になる傾向が強いといわれています。

池田 十九世紀に、世界で初めて幼稚園をつくったので有名なドイツの教育家・フレーベルも、『人間の教育』という本に、同じようなことを書いておりましたね。

たしか、「子供は食物のいかんによって、怠慢たいまんにもなれば勤勉にもなり、また無気力にもなれば、活発にもなる」という内容だったと思いますが。

屋嘉比 長年の幼児教育体験の上から、児童の傾向をみていったわけですね。

——この前、大人にとっても食生活がいかに大事か、というような調査結果がでておりま

した。

屋嘉比 なにについての調査でしょうか。

——「交通事故多発者の食生活」というものです。

二十三歳と二十五歳の、交通事故を起こしたドライバーのアンケートをとったものです。

それによると、砂糖を多くとっている人が圧倒的に多いというんですがね。

屋嘉比 なるほど、砂糖の過剰摂取かじようせつしゆが人間の身体におよぼす影響は、ドイツのダフティと

いう博士などが古くから指摘しています。眠気ねむけをもよおし、集中力が低下します。

池田 すると、私なんか貧乏育ちで、甘いものばかり食べてたから、まずかったな（爆笑）。私はもうこの歳としだから、別として（笑）、子供たちにはよく指導し、見守っていかねばならないと思います。

屋嘉比 子供の非行も、食生活と深い関係があるという調査があります。

——そうですか。「だいたい問題のある子供は、三度の食事をきちんと食べない。決まった時間に食べないで、外食が多い。家族といっしょに食事をしないで、一人で食べたり、友達と食べたりしている場合が多い」という、新聞社の統計資料もありますね。

池田 これは聞いた話ですが、アメリカの上院には、「栄養問題特別委員会」というのが設置されているそうです。そこで以前出したレポートにも、「家庭内暴力の多くは、食べ物

にも問題がある」と報告されているそうです。

屋嘉比 最近の子供に「根気が欠ける」のは、家庭でのきちんとした食生活のしつけがなされていないからだ、と主張する学者も少なくありません。

池田 でしょね。ま、これは一概にはいえない場合もあるでしょうが、やはり食事は、楽しく語らいながらというのが理想でしょうね。

できるだけそうした方向にもっていけるよう、努力をはらっていくことが、また、そうしたとする気持が大切なのでしょう。

屋嘉比 “どのようなものを食べ” “どのような調理の仕方” “どんな雰囲気の中かで” 食事するかが大事ですね。人のことはいえませんが。(大笑)

——朝食をつくらない母親、朝食を食べない子供も増えているようです。

屋嘉比 昔は、お母さんが朝食の支度をする。その台所のまな板の音が、一家の目覚まし時計に、どの家庭もなっていた。五感のうちでいちばん早く目覚めるのは、耳のようですね。

(笑)

池田 ともかく、朝ごはんがおいしく食べられるかどうかで、その日の身体の具合がよくわかる。(笑)

ですから大聖人は、

「食には三の徳あり、一には命をつぎ・二にはいろをまし・三には力をそう」（「食物三徳御書」一五九八）

と、説かれております。

屋嘉比 一日の活動のエネルギーは、なんといっても朝食ですから、もっとも大切なことと思います。

池田 私の恩師は、よくこんなことをいっておられた。

「よく食べて、よく寝られれば、人間は健康なのである」

と。先生ご自身の姿を見ても、まったくそのとおりだったと思います。

やはり食事と睡眠というものが、生命体としての自身を維持し、働かせゆくひとつの源みなもとと
いうか、リズムなんでしょう。

——ところで、食べ物を、医者によく「かめ、かめ」といいますが（笑）、どうなんですか。

屋嘉比 大事なことです。よくかむことは消化をよくし、胃をまもります。

また、物をかみ、味わうということは、大腦に刺激を与えます。そして大腦から身体のさまざまな器官にまで、その刺激が連動していきます。

——朝食をとることが、心身ともの目覚めにもなるわけですね。（笑）

屋嘉比　そうです。五感のうちではいちばん目覚めが遅い味覚を、起きた直後に刺激しますと、頭がはつきりしてくるんです（大笑）。それと、やはりじゅうぶんな睡眠も必要になりますね。

池田　近ごろの子供は、どうも睡眠不足が目立つようですね。

NHKの調査でも、「いましたいことはなんですか」という質問に、小学六年生の四人に一人、中学二年生では三人に一人が、「ゆっくり寝たい」と、答えていたそうなんですが。

屋嘉比さん、睡眠不足を医学的にみると、どんな影響がありますか。

屋嘉比　人間の体内には、発育にたいへん関係の深い成長ホルモンがあります。それが昼間よりも、眠っているとき、とくに熟睡中に分泌ぶんびつされます。

とくに思春期の子供の場合は、睡眠中に多量に分泌されるということが、ドイツのフインケルシュタイン博士らによって、解明されています。

——やはり「寝る子は育つ」（笑）。他にはありますか。

池田　集中力がなくなり、無気力さが目立つようになるようですね。

屋嘉比　脳が疲労しますから、知覚、記憶の低下が、てきめんにあらわれます。

池田　生物には、それぞれに必要な一定の睡眠量がある、と聞いたことがあります。屋嘉比　ええ。たとえば、オオナマケモノという動物は、一日二十時間は眠っているそう

です。(笑)

——ウマは二時間といわれていますが。(笑)

屋嘉比 この睡眠ということも、たいへん不思議なことで、生命的観点からも、検討しなければなりません。

自分自身の老化を知るには

——ところで、若い人のなかには、「病」はともかく、「老」はまだまだ先のことだ、自分には関係ないと思っている人も多いと思いますが。

池田 それはそうでしょうね。(笑)

若いときから、そんなことばかり考えるような人間では、もはや心が老化だ。(笑)

私の恩師は、「青年が、若年寄りになってはいけない。青年は、青年らしく、徹夜で人生を語り、未来を語り、哲学を語るようであってはいけない」と厳しく指導していた。

私もそれが自然であると思う。

屋嘉比 同感です。私は、若さとは単なる年齢的なものではないと思います。ましてや、若いときはなんでも勉強し、なんにでも挑戦していくべきだと思います。

池田 ただ、人は生きてゆくそれぞれの段階で、十代には十代の、二十代には二十代の、三十代には三十代の、そして五十代には五十代の、通りゆかねばならない人生の軌跡^{きせき}はあるべきだと思います。

——自分も若いとばかり思っていたけれど、もう四十代の半ばを過ぎてしまった（笑）。まったく「光陰矢のごとし」ですね。「もっと若いときに」という反省が必ずあるものです。

池田 ですから、人はひたすらに生きる若いときもある。おおいに働くときもある。家庭をもち責任ある立場になるときもくる。社会の第一線からひいて、人生を深く考えねばならないときもくる。やがて「老い」とか「死」という現実^{じつ}に直面するときもくる。

そうした幾つもの、さまざまな年輪をへていくなかで、どれだけ奥行き^{おくぎ}の深い、広がりのある、自身の確信ある人生観^{じんしんかん}がもてるかどうか、大事となってくると思います。

——その意味では「老化」とは、単なる年齢的、肉体的問題ではなく、一步一步の、人間的な「成長」の軌跡でなければならないといえますね。

屋嘉比 生理学的にみても、人間はその細胞も、絶えず変化をはてしなくつづけていきます。考えようによつては、誕生して心身がどんどん成長していること自体、同時に心身ともに衰えていくという宿命的な方向に、すでに向かっているわけです。まことに厳しいものと思います。

池田　ですから仏法は、この厳しき現実の人生のあるがままの姿を「生」「老」「病」「死」の四苦ともいつている。

さらに「八苦」、つまりこの四苦とともに「愛別離苦」（愛するものと別れる苦）、「怨憎会苦」（憎むものと会う苦）、「求不得苦」（求めても得られぬ苦）、「五盛陰苦」（心身を形成する五陰の不調和による苦）といった、生命がもつ本然的な「苦」があるとも説いているわけです。

屋嘉比　人生も生活も厳しい。（笑）

医学的、生理学的にみても納得のゆく達観した観点と 생각합니다。

——これこそ、絶対的に避けられない人生の厳しき縮図ですね。

池田　私なんか凡愚ぼんぐの身であるが、ただ、若いときから、医者からも短命といわれていた。また自分でも、そう思ってきた。ですから、いつも「生死」という問題に悩んできた。

そして入信して、たまたま、大聖人の「御義口伝」の一節にぶつかったときに、一種の衝撃を受けたことを覚えている。

屋嘉比　どういう箇所ですか。

池田　それは、

「一切衆生生老病死を厭離おんりせず無常遷滅むじようせんめつの当体に迷うに依って後世菩提ごせぼだいを覚知かくちせざるなり」

という御文です。

簡単に申しますと、これは、人間というものは、「生老病死」という四苦を、本来的に生命それ自体にもっている宿命がある。それを明らかに、達観することができない。

ゆえに、この自分自身の無常遷滅きわまりない姿というものに、「迷い」が生じてしまうのである、ということです。

屋嘉比　すると、「後世菩提を覚知」とは、どういう意味になるんですか。

池田　ここが少々むずかしいんです(笑)。結論からいえば、この自分の生命は三世である、と感得した境涯とでもいいましょうか。

ここが、いかなる哲学者、宗教家、科学者、政治家といえども、この「無常遷滅」の当体ということにとらわれ、解決できない。解決したと思っても、部分的であって、根本的な解決はできない。三世を通曉つうぎよう、解了げりようされた悟りの「仏」に学び、行じ、信じていく以外ない、ということなんですよ。

——ちよっと話を変えますが(笑)、自分自身の老化を知る、わかりやすい目安はなんですか。

屋嘉比　傷の治り方なども違ってくるようです。

池田 同じような傷でも、年齢によって治り方が違うわけですか。

屋嘉比 ええ、たとえば、五十歳の人では、二十歳の人の二倍の時間がかかります。

また六十歳では、十歳の子供の五倍も、時間がかかりますね。

――髪が薄くなるのはなぜですか。(笑)

屋嘉比 むずかしい質問です。ただ、一つの説としては、毛髪に栄養を運ぶ血管が老化し、どうみやくこうか動脈硬化を起としていくための影響が考えられています。白髪がしだいに増えるのもそのためです。

――若ハゲの人はどうなんですか。(大笑)

屋嘉比 それは男性ホルモンの影響が強いからでしょう。ですから外見的にはむしろ強そうで男性的な人におきてもいいわけです。

――なるほど。外面だけで人は判断できない(笑)。むしろ、そのほうが落ち着いてみえて得することもありますね。(笑)

池田 本当に人間の身体は不思議にできておりますね。「妙」の一語に尽きる。

血液も脳、肝臓、腎臓といった人間の身体のもっとも大事なところに、最初に送られているようです。また栄養をあたえていくようですが。

屋嘉比 そうです。ですから、高齢で血液循環が低下してくると、生命の維持に直接関係

のない頭の毛などは、ほとんど栄養がいなくなり、切りすてられるわけです。(笑)

——自分もなんとなくそんな気がするのですが、耳が遠くなるのは、どういうわけですか。

(笑)

屋嘉比 専門的にいいますと、聴力をつかさどる神経細胞の数が、だんだん減少したり、萎縮いしゆくしたりするからです。

やはり、年齢がすすむにつれてみられる老化現象のひとつですね。人間の聴力は、二十代がピークなんです。

池田 それと足が大事だ。足には、あらゆる内臓などの反射点が分布している、と聞いていますが。

屋嘉比 ええ。手足の筋肉のなかにある神経は、脳にまで伝わっており、足を動かすと反射的に脳の働きを活発にさせ、身体全体を活性化します。

また、足の裏の土踏まずを刺激すると、胃腸の動きを活発にするようです。

「永遠でありたい」という願望

——ちよつと話をすすめさせていただきます(笑)。屋嘉比さん、医学はいつごろから始

まいったんですか。

屋嘉比 いわゆる西洋医学となりますと、十六世紀後半から十七世紀にかけて勃興ぼつこうしています。

医術としては、相当古くから、エジプトやインドにあった、という説もあります。

——大昔は、病気になった人や老人は、共同生活からはずされていった、ということは何かで読んだことがあります。

屋嘉比 そうですか。食糧不足の関係かもしれませんね（笑）。ともかく、医学というもの、「四相」というのでしょうか、そのなかの「病」「老」という人間の「苦」を、なんとか解決したいというところが出発点であったことは、論をまたないところです。

池田 要するに、人間それ自体の「長く生きたい」、さらに「永遠に生きつづけたい」という、本然的な「意志」と「願い」と「祈り」とが、結晶されていったんでしよう。

屋嘉比 たしかに、そうした願い、祈り、一念は、いまでも誰にでもありますね。

現代医学を志す私にもあります。（笑）

池田 この世に、生きとし生けるものすべてが変化し、滅していくものである。それでも人間は「永遠でありたい」という心情は、消すことができない。

そこで、いまから五千年前においても、古代エジプト人は、自分をミイラにして、来世ま

で生きようとしたのは、あまりにも有名です。

また、古代バビロニアでは、不老不死ふろうふしの薬を求めぬいて、多くの国々を遍歴へんれきしたという神話までありますから……。

屋嘉比 バビロンの栄華えいがの時代ですから、四千年以上も前のことになりますね。

池田 秦しんの始皇帝しこうていもまた同じく、徐福じょふくという側近に命じて、不老長寿ふろうちようじゆの薬を探しに行かせたということも有名な話です。

——一説によると、日本にまで足をのばし、和歌山県の熊野地方にまできているそうです。この地方には、いまでも徐福伝説として残っているそうです。

池田 ああ、そうですか。不老長寿の薬を求めたというのも、われわれ現代人には夢物語のようにみえても、当時の人々はそれなりに真剣だったのでしょう。

ですから、それらの願いは、しだいにひとつの信仰体系となり、そこにひとつの宗教というものの原形がつけられていったのではないか、と私は考えます。

——たしかに、旧約聖書の「創世記そうせいき」には、神のように不死になれるという「禁断の木の実」の物語がある。

中国の道教には、不老長寿のための「道術」「仙術」というのがある。

古代インドのバラモン教の聖典にも「靈魂の不滅」が信仰されていた。

屋嘉比 その現実性は別としても（笑）、いつでも時代や国を超えた、ひとつの共通性というものはありますね。

——私も学生時代は、いわゆるカント、デカルト、ヘーゲルなども読んでみました。そうした西洋思想、哲学も、その方法論はさまざまであっても、目指す究極の一点は「人間いかに生くべきか」、そして「生命とは」という方向性であったと思います。

屋嘉比 さすがジャーナリストは幅広いですね。（笑）

——いや、私のは雑学です。（爆笑）

それでこのまえちょっと哲学事典をみたんですが、「そのいずれもが一つをもって生命を定義する試みは、すべて失敗に終わっている」となっていました。（笑）

池田 ですから、近代文明の進歩の源となったこれらの思想、哲学というものも、いまだその途上であって、けっして到達点に達してはいない。

東洋の英知の真髓しんずいといいきれる大乘仏法のみは、「悟」という絶対性といえる「法」があると、申しあげておきたいのです。

屋嘉比 たしかに西洋の哲学は、「生氣的」生命論とか、「機械的」生命論であるとか、または「哲学的直観」とか、部分的には納得できるものがあっても、もうひとつピンとこないものがありますね。（笑）

池田 今世紀初頭から、そうした部分観を統合して、全体的に生命をとらえようとする学問が出現したと聞いていますが、どうなんでしょうか。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 具体的にはどうということなんでしょうか。

屋嘉比 ドイツの動物学者ハンス・ドリーシュが提案したものです。

彼は、長年の研究から、生命にはどうもそれ自体がもつ「自律性」「協調性」があるのではないかと推論していったわけです。

彼は、実験によって、細胞のような存在にも、その性質があることを確認し、「全体連関性^{ぜんたいれんかんせい}」というものを提起しているんですね。

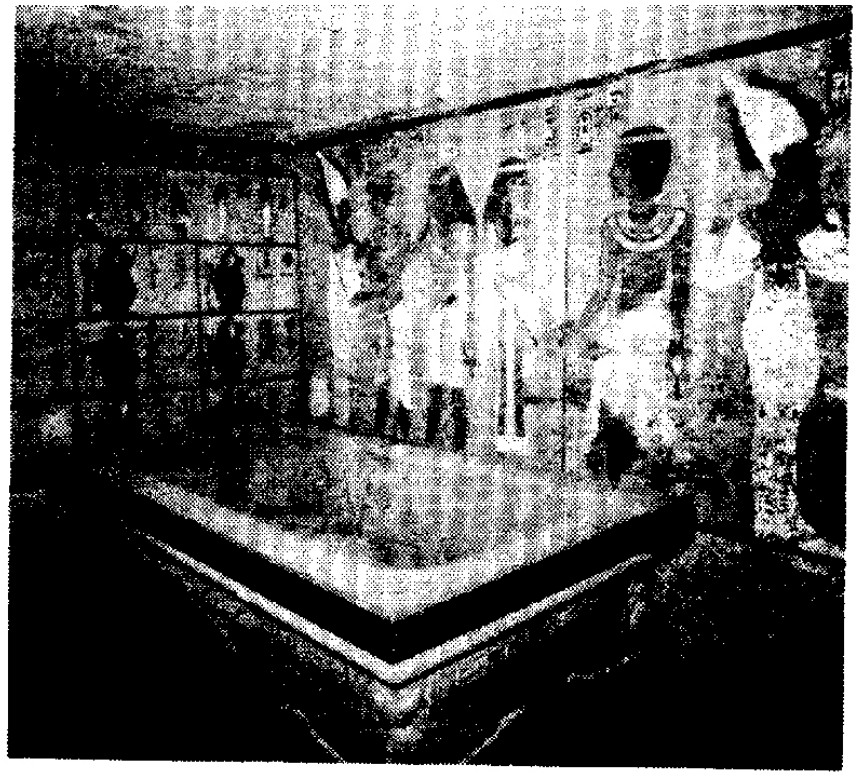
池田 他にもそうした学者はおりますか。

屋嘉比 イギリスのジョン・ホールデンという医学者もそうです。彼は「生命」と「環境」との関係が密接不可分であることを、生理学の分野で実験証明しております。

池田 それが「全体的生命論」といわれるものですか。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 「全体的生命論」というのは、ちょっと詳しくはわかりませんが。概観して言えば、「生命」とは部分が集まったものとしてだけでは認識できない。あくまでも生命全体



ミイラを保存してあったエジプトの石棺。

からの原理的な把握はあくがどうしても不可欠となる、
というようにとってよろしいでしょうか。

屋嘉比 そういつてもさしつかえないと思います。
つまり生命現象というものは、個々の物
理学や化学の法則が成り立つ部分もあるが、こ
れを「還元主義かんげん」といいます。それによって
生命全体をとらえることは、どうしてもむりが
あると考えているわけです。

—— それにしても、全体的生命といっても、
まだまだ生命というものの部分観のような気が、
私にはしますが。(笑)

屋嘉比 そのとおりです。

ですから私は、ある医学者が吐露とろしていた、
まったく正直な言葉が忘れられません。

それは、「複雑ひみょうにして微妙びみょうきわまりない生命
現象は、究めきまてゆけばゆくほど、解とき難がたい幾多

の問題にぶつかる。現代の進歩した自然科学の力によっても、なお打ち壊すことのできない幾多の障壁しょうへきがある」と。

仏法で説く「不老不死」

——仏法では万人の願いである「不老不死」について、なにか説かれておりますか。

池田 日蓮大聖人の「如説修行抄によせつしゆぎようしやう」という御文にあります。

「万民ばんみん一同に南無妙法蓮華經と唱となえ奉たてまつらば（略）人法共に不老不死の理ことわりあらわ顕れん時を各各御覽おののおのぜよ」（五〇二）

とのおおせなのです。

ですから、この「不老不死の理」とは、別しては、仏の悟りの法門なわけですが、まことにありがたいことに、大聖人様は「万民一同に」とおっしゃってくださっているわけです。

そこで、ご存じのように、仏法では「仏」の異名を「如来にょらい」ともいっておられます。

この「如来」とは読んで字のごとく、「如如にょにょとして来るきた」と解釈します。

この「如如として来る」、その本体は何かといえは、「瞬間」「瞬間」の生命それ自体をさしています。

この瞬間の生命というものは、過去から現在へ、そして現在から未来へと絶えまなく流れていく。その三世にわたって存在していくという意義において、「過來」「如来」「未来」ととらえているのです。

またむずかしくなってますみません。(笑)

屋嘉比 大切なお話と思いますので、ぜひともお願いします。

池田 ところが、この「過來」「如来」そして「未来」と、絶えまなく存在していく生命というものが、われわれ凡下の眼には、とらえようとして、とらえられないものである。

この、まことに不可思議なる「瞬間」の生命の実体を、戸田前会長は、法華經の開經である「無量義經」の經文をひいて、わかりやすく私どもに話してくださっていた。

屋嘉比 どういう内容ですか。

池田 ちょっと読んでみます。

「其の身は有に非ず亦無に非ず
因に非ず縁に非ず自他に非ず
方に非ず円に非ず短長に非ず
出に非ず没に非ず生滅に非ず
造に非ず起に非ず為作に非ず

(中略)

青^{しょう}に非^ひず黄^{おう}に非^ひず赤^{しやく}白^{びやく}に非^ひず

紅^くに非^ひず紫^し種^{しゆじゆ}種^{しき}の色^{しき}に非^ひず……」

つまり「生命」とは、「有る」とか「無い」とか、「方」すなわち四角いとか、「円い」とか、「没」するとか、「生滅」とか、「造」るとか、「起」るところかといった、ありとあらゆる概念^{がいねん}によつても規定^{きてい}できない。

それでいて巖然として存在し、一貫したものである、というわけなんです。

屋嘉比 わかります。

池田 ですから、この瞬間である「生命」というか、「一心」というか、「一念」の實在は、本来、見ることもできない。色もない。体重もない。(笑)

屋嘉比 生理学的に人間の身体をみても、絶えまなく細胞が分裂し、入れかわり、脳までも物質的には新陳代謝していきます。肉体も固定したものはありません。(笑)

だから、「これが生命だ」といえるようなものはなにもありません。(笑)

——「心」も、人間はしょっちゅう変わる。(大笑)

池田 そうした、変化してとどまることなき人間の実相を、仏法は「五陰^{おん}仮^わに和合^{わごう}するを名^{なづ}けて衆生と云ふなり」と説いております。

これは、人間という存在も、「色陰」しきおん「受陰」じゅおん「想陰」そうおん「行陰」ぎょうおん「識陰」しきおんの五つが仮に和合しているというわけです。

「色陰」とは、有形の物質、身体の物質的側面

「受陰」とは、六根くこん（眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根）を通し、外界のものを受ける心
入れる心の作用

「想陰」とは、受け入れたものを知覚し、心に想い浮かべる作用

「行陰」とは、想陰にもとづいて起こる意志や行動の善悪に関するあらゆる心の作用

「識陰」とは、認識作用、識別作用、また受、想、行の作用を起こす根本の意識・心の本

体

をさしていると思います。

そこで、この「仮和合」けわごうでありながら、人間は、みずからの意志で行動する。また生きている。ですから、そこにひとつの一貫した「自分」というものの存在があることも、よくわかるわけです。

屋嘉比さんのおっしゃるとおり、人の細胞の構成成分も一年もたてば、すべて変わるといわれるが、自分自身は一貫しています。

——赤ん坊のときの自分と中年のいまの自分は、まぎれもなく同一人物です。（大笑）

池田 われわれ凡夫ぼんぷは、「有形」なものはわかるが、「無形」なものには無意識になりがちなものです。(笑)

ですから、瞬間それ自体に実在する生命というものは、それなりの傾向性をそれぞれもつたひとつのリズムとも、いえるかもしれない。

それが、「有形」「無形」「有情」「非情」をとわず存在していくわけです。

その見ることもできない、とらえることもできない、だが、実在する、その瞬間の「生命」のなかに、すべての時間も、空間も、くまなくおんざい蘊在おんざいされるものである。

それを仏法では、「我」ともとらえております。

屋嘉比 普通にいう「生きている間」という意味での「生命」と、仏法で説く「生命」の違いが、よくわかりました。

「常楽我浄」の人生へ

池田 重ねて申しあげますが、その「一心」といおうか、「一念」といおうか、瞬間の生命といっても、瞬間、瞬間の連続である。その過去から現在、現在から未来へという瞬間、瞬間の流れは、とどまることはない。

それはまた「誕生」から「生」へ、「生」から「死」へ、「死」から「無」へ、すなわち「空」^{くう}へ、また「無」すなわち「空」から「有」へというように、森羅万象にわたって、それぞれの現象、姿というものを演じながら、流れていくわけである。

つまり、生命というものは永遠に「生死」「生死」を繰り返えしゆくのが、本来の姿なのである、というわけです。

この点について、戸田前会長は、仏法で説くこの三世の生命観というものを、法華經壽量品第十六のなかの「方便現涅槃」^{ほうべんげんねはん}という經文を引きながら、よく話してくれました。

屋嘉比 その壽量品とは、どういう經文なんでしょうか。

池田 この壽量品によって、釈尊の一代五十年の説法が完結するといわれております。

簡潔に申しあげますと、ひとつの意義は、「文上」^{もんじょう}「文底」^{もんてい}という次元がありますが、仏の生命が無量、すなわち永遠であることを、はじめて明かしております。

さらに結論していえば、大聖人様は、

「所詮壽量品の肝心南無妙法蓮華經こそ十方三世の諸仏の母にて御坐し候へ」^{しよせん}（「壽量品得意抄」一二一二）

とおっしゃっておられる。

つまりこの宇宙の有情、非情のありとあらゆる森羅三千を貫く「大法則」であり、十方三

世の仏の成道じょうどうの本源の「法」たる「南無妙法蓮華經」の一法が文底に秘沈ひちんされているところに、この寿量品の元意があるわけです。

——よくわかりました。

池田　そこで恩師は、この難解なる寿量品の「方便現涅槃」を、卑近な例をとおし、わかりやすく展開しております。それは、

「涅槃、つまりわれわれが死ぬということは、方便である。人間は誰でも歳をとる。そしてこの世の中で生存する生命力がだんだん衰えてきて死ぬ。だが、この身体は死んでも、われわれ自身の生命それ自体は、大宇宙の生命に溶けこんで、『我』として存在し、また生死を繰り返すのである。いわば、疲れを癒いやすすために夜寝るようなものだ。朝、目がさめて起きれば、また同じ人間である。これが違う人間だったらいへんなことになる」

というような内容でした。（大笑）

屋嘉比　なるほど。明快だ。（笑）

池田　また「もし、われわれが死なないとしたら、地球は老人ばかり増えて、たいへんに困ることが起きてしまう。死ぬところにいいところがある」ともハッキリいっておられた。

（笑）

——いや、明快です。よく思索してみれば、そのとおりです。これもひとつの「妙」なん

でしょうか。

池田 そう思います。「生」も「死」もすべて「妙」であり「妙法」であると、大聖人はおっしゃっておられるわけです。

まあ、戸田先生は「本有＊ほんぬの生死」という大聖人の仏法をふまえられながら、この「方便現涅槃」についておっしゃっていたんだと思います。

そこで、ある御文には、

「宿命なければ三世を知ることなし」(閻浮提中御書えんぶだいちゅうごしよ 一五九〇)
とおっしゃっておられる。

ですから、同じ人間に生まれても、福運のある人、長命の人、短命の人、病気がちの人など、さまざまな生まれながらにしての、宿命というものがある。ゆえに「三世にわたる生命」を知ることができないか、とおっしゃっているわけです。

屋嘉比 すると、仏法は厳しく生命のなかに因果の「法」をみていくのですね。

池田 そうですね。またそこで法華経以前のある経文には、「上品じょうぽんの十悪は地獄じゅうあくの引業いんごう(中略)下品げぽんの十悪は畜生の引業」というのもあります。

まあ、殺生せつしよう、偷盗ちゆうとうなどを重ねた者は、来世は地獄に墮おちたり、犬や猫や鳥などの畜生界に生まれなければならない、というわけです。

——厳しいものですね。(笑)

池田 ただし、真実の仏法を持った場合は、かならずいかなる者でも、その宿命を転換できるといのが、第三の法門たる大聖人の仏法であり、それが御文のいたるところに説かれております。

ともあれ、因果の理法は厳しい(笑)。ですから、「きびしきなり三千羅列なり」(「御義口伝」七一四)とおっしゃっておられる。

私どもの日々の信仰のひとつの目的も、この自分の「我」がもつ宿命というか、宿業というか、それを変革したいがためなんです。

そこで仏法では、「三世」の生命を達観なされた仏にそなわった「常」*「楽」「我」「浄」という「四徳」というものが説かれております。

——その四徳とは、どういうものでしょうか。

池田 これも簡単にいいますと、「常德」すなわち、仏の境地は永遠に不変である。「楽徳」すなわち、無上の安楽である。「我徳」すなわち、自身の「我」の生命が自由自在で、他からなんの束縛も受けることがない。

そして「浄徳」つまり、煩惱のけがれなき清浄の完成という意義になると思います。

屋嘉比 すると、仏法で説く「不老不死」とは、肉体的な永遠を説くわけではないわけで

すね。

池田 おっしゃるとおりです。

ですから、「不老不死」すなわち「生死」「生死」とめぐりゆく、自身の「生命」の实在を達観した、自在無碍じざいむげにして、清く、強い、そして永遠にくずれざる自分の「一念」というか、「二心」というか、それを築きあげていくのが、私どもの信仰の目的なのです。

——すると、仏法は「現世利益主義」だ、なんていうのは、無認識もはなはだしいですね。
(笑)

池田 そのとおりです。

われわれ人間は、煩惱のかたまりみたいなものだ(笑)。その苦悩と煩悶はんもんの自身の「我」を現実の人生、生活にあつて、「常楽」へ「我浄」へ、よりたかき人生の目的に向かいゆく大いなる煩惱ぼんのうへと、転換せしめゆく絶対的法則が「妙法」である。

ゆえに私どもは、妙法の「以信得入」*いしんとくにゆう「以信代慧」*いしんだいえという法理、法則にのっとつて、日々仏法を信じ、行じ、学び、そこから人生、社会の価値創造をしているわけです。

この一人ひとりの人間の幸せと蘇生そせいへの運動は、偉大なる時代変革の、いっさいの基本となると思っております。

第四章

人生の幸福・仏法の死生観

医学的に証明された「生涯青春」

——最近は、高齢化社会ということが問題になっていきますので、そのへんから、お願いしたいと思います。

池田 わかりました。なんですか、最近、アメリカの数人の博士が、人間の脳の重要な働きの中には、その人の生き方によって、歳としを経るごとに活発になるものがある、と発表した、という話を聞きましたが、屋嘉比さん、本当ですか。

屋嘉比 ええ、本当です。

——われわれ、中年には朗報ですね。(笑)

屋嘉比 昨年(一九八四年)、すでに『ニューヨーク・タイムズ』が、その研究成果を「老人と脳の働き」というテーマで、まとめて報道しています。

池田 一般的には、人間の脳の働きは、ある年齢に達すると衰えていく、ということのようでしたが……。

屋嘉比 ですから、今回の調査で注目されるのは、人によっては、八十歳ちかくなっても、知能が進歩している、という報告なんです。

池田 それは、どのような研究調査をしたんでしょうか。

屋嘉比 アメリカの国立老化研究所が、二十一歳から八十三歳までの男性の脳を、断層写真で撮影し、その結果をまとめました。

脳の働きのなかには「結晶型知能」という、物事の判断力、洞察力をつかさどる働きがあります。

その調査によると、その働きが、青年や中年よりも、老人のほうが、明らかに優秀な場合がある、というんです。

池田 よく「長老」とか「大御所^{おおごしよ}」といわれる年配の方々^{かたがた}が、いざというときに、急所をついた、^{あたいせんきん}価千金の決断をくだす場合がありますね。

その特質が、医学的にも証明されたわけですか。

屋嘉比 そう思います。

デンバー大学のホーンという博士も、独自の研究から、同じ意見を述べています。

池田 とくに、高齢になっても、社会のなかで、積極的かつ創造的な仕事をしている人に、そうした傾向が多くみられるようですが。

屋嘉比 アメリカには、その半生を、人間の頭脳の老化という問題にかけてきた、老人医学の権威、シェイ博士がおります。その博士が、

「一部の精神能力は、六十歳代で衰えをみせ、多くの人は八十歳代までに衰える。だが、社会生活に参加している老人の場合は、精神能力は変わらないばかりか、進歩する場合もある」

と、ハッキリいっております。

またエックルス博士やベーカーマン博士も、同じ見解を発表しています。

池田 すると、私どもがいつもいっている「生涯青春」ということが、医学的にも証明されたわけですね。(笑)

ともかく「老い」とは、人生の完結といえるかもしれない。ゆえに、人生は最後の一瞬まで、創造と建設の連続でありたいものだ。この心構えを、生涯もちつづけたかどうか、その人の人生の価値を、決定していくともいえるのではないでしょうか。

屋嘉比 そうでしょうね。シェイ博士も、「自分の生活に閉じこもる老人は、確実に衰える」といっておりますから。

またカリフォルニア大学のダイヤモンド博士も「脳細胞の減少は、青年時代のほうが最大で、その後はあまり顕著でない」とも主張しております。

年齢ではきまらない人生の価値

——ところで屋嘉比さん、「高齢」とは、何歳ぐらいを指すのですか。

屋嘉比 ふつう七十歳から八十歳ぐらいです。

最近では、その年齢に達する人が増えているわけです。

池田 どのぐらい増えているのですか。

屋嘉比 昭和五十五年の国勢調査では、高齢者の比率は、一千人のなかで、約四十三人となっています。これは、前回調査の昭和五十年から、約八十八万人増加しています。

池田 それ以上の年齢の場合は、どうですか。

屋嘉比 たとえばいま、八十五歳まで生きている人は、一千人のなかで、五人ぐらいのようです。

池田 男女の比率は、どうですか。

屋嘉比 男性が一人とすれば、女性はほぼ二人の割合です。

——私は、男だからいうわけではありませんが（笑）、長生きするにしても、できるだけ、病気やなんかで人に迷惑をかけないように、生きたいと思うんですが。（笑）

池田 男性は短命、女性は長命というのは別として（笑）、その人の人生の価値は、年齢だけですべてがきまるとはいえないと、私は思っている。どうでしょうか。

そこに、人生のひとつのみずかしさがあるんでしょうね。

よく戸田前会長もいっておられた。

「人間は使命があれば死なないし、使命がおわれれば死ぬ」と……。

——人生の真髓^{しんずい}を、簡潔にいわれておりますね。

ところで池田先生、いちばん長生きできる職業は、なんでしょうか。

池田 それは屋嘉比さんの分野です。（笑）

統計的なものはわかりませんが、著名な人では、ピカソ（九十一歳）やルノワール（七十歳）をはじめ、画家は、長寿が多いようですね。

——政治家なんかも長生きしていますね。ジャーナリストは、短命のようだ。（笑）

池田 職業柄、お医者さんは、長生きの人が多いんでしょう。（笑）

屋嘉比 いや、「医者^{ふようじやう}の不養生」というぐらいですから。（笑）

ちよつと、世に天才といわれる人の「寿命」を調べてみたんですが。

科学者ニュートン 八十四歳

作家ビクトル・ユゴー 八十三歳

教育者ペスタロッチ 八十一歳

科学者ダーウイン 七十三歳

詩人ウィリアム・ブレイク 七十歳

画家レオナルド・ダ・ヴィンチ 六十七歳

哲学者ヘーゲル 六十一歳

音楽家ベートーヴェン 五十七歳

詩人ダンテ、社会学者マックス・ウェーバーが五十六歳、作曲家チャイコフスキーは五十三歳、というんですがね。

池田 短命の場合はどうですか。

屋嘉比 それもいくつか、調べてみました。

モーパッサンは四十三歳、精神病で亡くなっています。ショパンが結核で三十九歳、バイロンが三十六歳、モーツァルトが三十五歳、ともに肺炎などが原因になっています。

池田 「死因」については、なにかデータのようなものがありましたか。

屋嘉比 いわゆる職業病は別として、ハッキリ出ているものが少ないんです。

ただ、日本で職業別に調査したものがありませんでした。それでは、

「指導者は、脳卒中、ガン、心臓病」

「学者は、ガン、伝染病」

「芸術家は、結核」

となっています。

——欧米では、比較的指導者に、精神病の割合が多いらしいですね。

池田　そうですね。やはり生活環境は、死因にも関係してくるのでしょうかね。

屋嘉比　それについては、第二次世界大戦にかかわった指導者の死因について、調べた本がありました。

ルーズベルトは「脳血管障害発作」

ウイルソンは「脳卒中」

ヒトラーは「パーキンソン氏病、自殺」

ムッソリーニは「神経梅毒、銃殺」

フランコは「動脈硬化症」

レーニンは「脳軟化症」

毛沢東は「脳軟化症」

と、なっています。

——やはり、政治家や指導者は、脳とか心臓に関係した病気が多いんですかね。

大聖人の御入滅は六十一歳

屋嘉比 仏法の歴史のうえではどうでしょうか。

日蓮大聖人は、おいくつでお亡くなりになったのでしょうか。

池田 六十一歳です。

老衰であつたと伝えられています。

屋嘉比 ああ、そうですか。

当時としては、六十一歳は御長命だつたと思いますね。

池田 ともかく、大聖人は想像を絶する「大難四度」^{よたび}であられた。

また、数知れない苦難の連続の御生涯であられた。

屋嘉比 たいへんだつたでしょうね。

池田 ですから、「人生」何歳ということとは、けっして、いちがいにいうことはできないと思いますが、私の寿命観は、ひとつの基準として、大聖人様が「六十一歳」で御入滅なされている、この「六十一歳」というものを、一つでも、二つでも、越えて生きぬくことがで

きれば、ありがたいことではないか、と思っております。

屋嘉比 深い基準をもっておりますね。

池田 また、大聖人様は、御入滅の一年前にすでに、

「今年は正月より其の気分出来しめつたいして既に一期いちごをわりになりぬべし、其の上よわい齡既に六十にみちぬ、たとひ十に一・今年はずぎ候とも一二をばいかでか・すぎ候べき」(「八幡宮造営事」一一〇五)

と、御自身の寿命があと一、二年であることも、おっしゃっておられるんです。

もちろん、その後も弟子、信徒に、数々のお手紙をあたえられたり、また重要な「相承書そうじょうしょ」も、お残しになっておられます。

屋嘉比 なるほど。なるほど。

池田 像法時代*^{ぞうぼう}の中国の天台大師*は、六十歳(数え)で亡くなっています。

日蓮大聖人は、この天台大師の臨終りんじゆうの姿について、

「天台大師御臨終の記に云く色白し」(「妙法尼御前御返事」一四〇四)
と、したためられております。

屋嘉比 「色白し」というのは、これまた「天寿」をまっとうした姿なんでしょうか。

池田 そうですね。この天台大師についても、仏法じようぶつでいう「成仏」の姿で亡くなった、と

記した古文書が約三十種類残っております。そこで、仏法では、

「また天台は六十歳御入滅、蓮祖は六十一歳御入滅なり。これ則ち像末の教主の序、豈不思議に非ずや」(「観心本尊抄文段」)

と、説かれております。

つまり、中国の天台大師は六十歳、日蓮大聖人は六十一歳であられる。像法時代の教主と末法の御本仏の御入滅には、不思議の義があるとおっしゃっておられるわけです。

このことについては、三つの深い意義があると、説かれておりますが、今回は、少々むづかしくなりますので、略させていただきます。

屋嘉比　そうしますと、日本の伝教大師^{*}の場合は、おいくつだったんでしょうか。

池田　五十六歳です。『伝教大師の一期略記』という古文書には、やはりみずからの臨終を予言した、ということが記されております。

また、弟子への遺言を残し、これまた安祥^{あんじやう}として入滅したことが、記されております。

屋嘉比　いまは、死因となる病気の解明が進んでいることもありますが、統計的にみても、老衰という病名で亡くなるというのは、たいへん少なくなっているんです。医者立場からは、老衰で亡くなるのが理想と思われませんが。

池田　いや、それについては法華経の「序品」^{じよぽん}にあるんです。

「仏此の夜滅度したもうこと 薪尽きて火の滅するが如し」
と、仏の涅槃の姿について説かれているんです。

「薪尽きて火の滅するが如し」――
これが万人の願いでしょう。

高齢者に大切な精神的充実感

――ところで屋嘉比さん、いわゆる「老人ホーム」は、全国でいくつぐらいあるのですか。
屋嘉比 だいたい二千五百か所で、十八万人前後の人が、入居しているようです。

池田 意外と少ないですね。

屋嘉比 そのなかに、いわゆる寝たきり老人のための「特別養護老人ホーム」もあります。
また、自分で身のまわりの世話ができるていどの場合の「養護老人ホーム」、個人契約による「軽費老人ホーム」などがありますが、まだまだじゅうぶんではありません。

――最近は、老後の医療保障までついたマンションが、ブームになっているようですが。

池田 よく「核家族」といわれますが、日本では家族といっしょに生活する老人が、外国と比較すれば、多いようですね。

屋嘉比 だいたい七〇パーセントでしょうか。

しかし、昭和三十年代は、八〇パーセントぐらいでしたから、減少しています。

池田 欧米では、二〇パーセントか、せいぜい四〇パーセントになっていたと思います。

(デンマーク、アメリカ、イギリスの「三か国老人調査」)

屋嘉比 欧米では、個人主義が徹底されているということも、あるのではないのでしょうか。

池田 しかし、トインビー博士などは祖父母、両親、子供の「三世代家族」が理想的だといっておられた。また、デンマークなどでは、子供と別居していても、やはり、お互いの家から三十分以内に住む場合が多いようです。

——スウェーデンの福祉政策は、人口対策という一面もあったようです。

たとえば、十九世紀のなかごろ、新天地アメリカへの移民があいついだ。

また一九三〇年代の世界恐慌の余波で、国民が生活維持のため子供を産まなくなった、という背景もあったようです。

屋嘉比 日本の場合、福祉の面では、やはり北欧三国がひとつの目標でした。

しかし現在では、北欧型福祉が、かならずしも人間の幸福と結びつかない、という「見直し論」もかなりあります。

池田 ともあれ、世の中というのは、すべてに光があたっているようでも、かならず影が

あるものだ。

いつの時代も、その象徴的な例が、子供であり、女性であり、老人といていいでしょう。指導者は、つねにそのことを忘れてはいけない、と思っております。

屋嘉比 いまは、誰でもが、福祉、福祉という。信用できませんね。（笑）

もつともつと、一人ひとりが賢明にならなくてはなりませんね。

池田 一人ひとりが社会の事象を見ぬく、鋭い力と眼をもつことです。まなこ

ここで私がいつも思い出す、日蓮大聖人のお言葉があります。それは日女御前にちによごぜんという方に書かれたお手紙のなかで、

「周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、其の末・三十七代・八百年の間すゑずゑは・ひが事ありしかども根本の功によりてさかへさせ給ふ」（「日女御前御返事」一二五〇）と、おっしゃっております。

私は、この御文をいつも身に体していかなばならない、と思っております。

これは、中国の名君であった文王という王さまが、つねに政治の原則として、老人を大切にしました。すなわち、国民の心の奥底まで掌握しやうあくすることができたがゆえに、国が栄えた。その子、武王も父の遺志を継ぎ、大軍である殷いんの紂王ちゆうとの大戦争に勝ち、三十七代、八百年もの長い間、多少の問題があっても、その「根本の功」によって繁栄していった、という史実を

いわれたものです。

つまり、政治にあつては、あらゆる人々が心から納得し、安心して生活できるように、ということが根本となる。これこそ、当然といえば当然すぎるほどの原理といつてよいでしょう。

屋嘉比 軍事費を増やそうとしたり、増税ばかり考えているのとは、大違いですね。

——ところで、スウェーデンのような福祉国家が、深刻な人間疎外の問題をかかえていることも事実です。老人の自殺者も多い。さらに、目的観を失い、労働意欲の低下により、青年の無気力化が深刻な課題となっている。麻薬やアルコール中毒患者も、少なくないようです。

屋嘉比 アメリカの『内科学年報』に、次のような言葉がのっています。

「人命を救う研究をする社会は、そのために延長された生命に、責任を負わなければならない。科学は単に寿命を延ばすだけでなく、生命力のあふれた人生をつくることが重要なのである」

池田 いい言葉です。現代社会の重要課題です。それとともに、人間は、社会における自分自身の存在感、使命感がなくなることほど、寂しいことはない。

これは、高齢者の方々にとっても、まったく同じである。もちろん、さまざまな場合があるでしょうが、高齢者だからといって、そうでない人とのお互いの心の奥に、なにか特別な



スウェーデンの老人対策にも「見直し論」が…。(撮影／糸数昌寧)

壁ができてしまうことほど、不幸なことはない
と思う。

それでは、かえって心を閉ざしてしまふし、
無慈悲である。悠々たる最後の人生の総仕上げ
ができるように、自然体の流れをつくるべきで
ある、と私は思っております。

ですから、高齢者の方々が、精神的な充実感
をいかにすればもてるのか。それを考慮してい
くことが、もつとも不可欠ではないでしょうか。
屋嘉比 老人医療でも基本となる、もつとも
大切な考え方と思います。

心の病は「八万四千」

——ところで屋嘉比さん、日本人の病気は増
えているんでしょうか、減っているんですか。

屋嘉比 残念ながら、病気になる人は増えています。

池田 最近の厚生省の調査では、十軒のうち、三軒以上に病人がいると聞きましたが、ずいぶん多いですね。

屋嘉比 じつは、たいへんな問題なんです。

国民の七・二人に一人が、なんらかの病気にかかっています。

池田 こうした傾向は、いつごろからですか。

屋嘉比 昭和三十年ごろから徐々に起きています。四十五年には一〇・七人に一人と増えています。

池田 それでは、昭和三十年以前はどうでしたか。

屋嘉比 三十年以前は二六・四人に一人でしたから、現在は、なんとその四倍ちかくにもなっています。

池田 病める現代人というが、さまざまな社会の矛盾や不安、圧迫とあいまって、現代人が精神的にも肉体的にも衰弱している。私は、仏法で説く「五濁悪世」*ごじよくあくせという時代相が、病気という面にも、如実にょじつにあらわれてきておる気がします。

そこで、病気の数はいくつぐらいあるんですか。

屋嘉比 約五万といわれています。通常、病院では七千百二十九項目に分類されます。こ

の数は、WHO（世界保健機構）が定めたものです。

池田 宇宙船でケガをしたような場合も、はいっていますか。（笑）

屋嘉比 あります（笑）。事故などによるケガは、E分類におさめられており、宇宙船の分類は「E845」になります。（笑）

池田 薬の数はどうですか。

屋嘉比 厚生省で認可している薬の数は、約九万九千あります。

——仏法では、病気の数について、なにか説いたものがありますか。

池田 あります。

仏法では病の数やまいを「四百四病しひやくしびよう」とも、「八万四千」とも説いております。

「四百四病」は「身の病」の数をいっております。「八万四千」とは「心の病」を指しております。この「八万四千」とは、数値すうちというよりも、たいへんな数になるということをしていると思います。

ただ、『大智度論だいちどろん』という経釈などには「姪欲いんよくの病二万一千」、「瞋恚しんにの病二万一千」、「愚癡ぐちの病二万一千」、それらの「三毒*を等しくもつ病が二万一千」で「八万四千」となるというものもあります。

——かつて、『朝日新聞』の科学部が企画した記事に、

「たいていの都会人は、心か身体のバランスをくずしている。いまや病気の種類は、人間の数ほどあるといえるかもしれない」

と、いつておりました。たしかに現代は、ますます複雑化していますから、どんどん新しい病気ができてくるんでしょうね。

屋嘉比 文明病は、水俣病みなまたのような公害によるものもありますが、多くは「心の病」といっていいでしょう。

そうした意味では、仏法が「心の病」について、「八万四千」と説いていることは、たいへんな先見性と思いますね。

——「四百四病」とか「八万四千」とは、どのような御文に、説かれているのでしょうか。

池田 いくつかありますが、日蓮大聖人の「治病大小権実違目じびようだいしやうごんじつのもく」という御文にも説かれております。はじめの「四百四病」については、

「夫れ人に二の病あり一には身の病・所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上いじやう四百四病なり」(九九五)

と、説かれております。

屋嘉比 「地大」「水大」「火大」「風大」というのは、何をたてわけたのでしょうか。

池田 この「地大」「水大」「火大」「風大」を、仏法では「四大」といつております。

この「四大」とは、いくつかの次元でとらえられるのですが、ここでは簡単に、私どもの身体に即して申しあげますと、「地大」の働きとは、骨や筋肉や歯、髪、爪、皮膚といったものにあらわれています。

また、「水大」は血液や体液。「火大」は生命を維持する体温や消化作用。

「風大」は呼吸や新陳代謝などになると思います。

仏法では、この「四大」に即し、概括的に「病やまい」というものをとらえ、この人間の身体の「四大」が不調和を起こすと病が起る、と説かれております。

屋嘉比 生理学的にもよくわかります。たしかに皮膚の色ツヤ、血液、体温、呼吸などは、病気を調べるうえでの基本となります。

池田 こうした身体にかかわる病については、大聖人も、

「此の病は設たとい仏に有らざれども・之を治す」(九九五)

と、おっしゃっておられるわけです。そこで、さらに大聖人は、

「二には心の病・所謂三毒いむゆる乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙・六師等も治し難し何に況や神農・黄帝等いか いわん しんのう こうていの方薬及ぶべしや、又心の病・重重に浅深・勝劣分れたり」(九九五)

と、説かれておるわけです。

「三毒乃至八万四千」つまり、人間のどうしようもない「貪とん」「瞋じん」「癡ち」といった煩惱ぼんのうによ

る病は、さきほど申しあげたように、「八万四千」の病となっていく。

そうした人間内奥の煩惱からくる病というものは、いわゆる医学上の病氣にとどまらず、人間の不幸をもたらす、あらゆる現象にまで広げてみる事ができるわけです。

——鋭い眼ですね。

池田 こうした人間につきまといっている宿命的な病は「二天・三仙・六師等」、「神農・黃帝等の方薬」——いわゆる聖者でも大医学者でも治すことができない。

屋嘉比 戦後、「社会病理学」という新しい学問も生まれましたが、たしかに社会の病、人生における「心の病」というものは複雑かつ深刻です。

池田 ですから、「人生」「社会」そして「生命」の、新しき蘇生そせいと新しき発現をもたらしゆく「大良薬」による以外にない、というのです。

結論的にいえば、その最高の大良薬を仏法では「妙法」ととらえているのです。

そこで「浅深・勝劣」とありますが、敷衍ふえんしていえば、浅い病には、それぞれの時代のそれなりの宗教の役割があつた。またそれなりの方薬ほうやくで治すなおことができる。

しかし、深き心の病はいかなる方薬も、いかなる過去の宗教も治すことができない。ゆえに最高の方薬は、普遍ふへん妥当性とうたいせいをもった新しき高等宗教による以外ない、という御文なのです。

——そうしますと、「心の病」は、医学では治せないのでしょうか。

池田 いや、そういうことはありません。ですから大聖人様は、

「人の煩惱ぼんのうと罪業の病輕かりしかば・智者と申す医師くすしたち・つづき出でさせ給いて病に随つて薬をあたえ給いき」（「妙法曼陀羅供養事」一三〇五）

と、おっしゃっておられるわけです。

仏法で説く「心の病」というのも、一般的な「心」の病もあれば、「社会」の病、そして「生命」の奥深い病もある。多重にして、さまざまな次元があるわけです。それを「八万四千」とも、仏法では説かれているわけです。

仏法で説く「業」の内容

——ところで、一九八四年の三月、アメリカで、まことに痛ましい報道がありました。それは、十七歳のときから不治の病にかかり、二十五年間も昏睡状態こんすいがつづいた、最愛のわが娘の生命維持装置を、年老いた両親が、みずからの決断ではずさなくてはならなかったというものです。

屋嘉比 ありました。その娘さんは、多発性脳脊髄硬化症せきずいという不治の難病にかかり、四十二歳になったとき、親が「死なせる権利」を裁判所に訴え出て、裁判所の判決がくだされ

たものでしたね。

池田 親自身が希望したとはいえ、また裁判所がその正当性を認めたとしても、そうせざるをえなかった両親が、いちばん苦しかったでしょう。

人にはいえない、悲しさと苦しみがあったと思います。これこそ、人間の「業苦」としかいいようがない。このニュースを知ったとき、私は心が痛みました。

屋嘉比 たしかに、人間の「業病」というのでしょうか。そうしたものは、医学とか法律でも解決しようのない、人間のどうしようもない問題をはらんでいると思います。

——よく「業病」といいますが、仏法で説く「業」とは、いったいどういうことなんでしょうか。

池田 これがむずかしいんです。(笑)

仏法では、ひとくちに「業」といっても、「現業」・「宿業」、「善業」・「悪業」・「無記業」、「福業」・「非福業」・「不動業」、「漏業」・「無漏業」・「非漏非無漏業」、「順現受業」・「順次生業」・「順後受業」等々といったように、多次元、多角度から、この「業」というものをとらえております。

仏法で説く「業」というものを、ひと言で申しあげれば、「身」と「口」と「意」にわたるさまざまな人間の「所作」が、そのまま未来における自身の幸、不幸という結果をひきお

こそ原因として、加算しつつ、内在していることをいっております。

屋嘉比　そうしますと、私たちの日常生活の意志や行動が、すべて当てはまることになるわけですか。

池田　そうなんです。それも「善」もあれば「悪」もある。また軽いものもあれば重いものもある。また浅いものもあれば深いものもある。それこそ多種多様にわたるんです。

簡単に申しあげますと、たとえば、カゼをひいた患者に薬をあたえ、よく休ませれば、じきに治るとか、有名な作家が書けば、本が売れるとか、われわれ人間の眼でも、目先の物事の因果関係、損得というものはわかるわけです。

——よくわかります。

池田　これは、仏法で説く「現業」の範はんちゅうなんです。

ところが人間は、「善業」「悪業」といった、自分自身の内奥ないおうに刻みこまれた、生命の厳しき因果というものは、わからないものです。

仏法は、その「生命」といおうか、「我」といおうか、その自身の内奥の「業因」「業果」の因果の理法を、明快に説き明かした法、ということができると思います。

そこで、ここがむずかしいところなんですが、三世の生命からみるならば、人間には、過去世で積んできた「業」というものもあるはずなんです。

これが善いものや、また軽いものや、浅いものであればよいわけですが、自身の「我」という深層のまた深層に刻みこまれてしまつて、凡下ほんげの眼では見ることも、知ることもできない、深く重い「業」もある。

この深く重い「悪業」が、人間の「業苦」、つまり不幸をもたらす、というわけなんです。

屋嘉比 こうした過去世からの「業」を「宿業」というわけですか。

池田 そのとおりです。さらに、この宿業は、「現業」つまりいま生きている現実の生活のなかに、刻々と刻まれていく「業」と重なりあつたり、一体となつたりして、厳しく自身の「我」に存在するというわけです。

ですから、仏法は今世だけでなく、三世の生命のうえから、厳しく生命の因果をみていく法と、とっていただければありがたいんです。

屋嘉比 つまり、人間の幸、不幸は神のせいでもない（笑）。他人のせいでもない（笑）。自分自身に、根本の原因があるというわけですか。

池田 簡単にいえば、そういつてよいでしょう。

そこで屋嘉比さん、医学の方面では、「遺伝子」ということが、最近、たいへんに注目されてきているということでしたね。

屋嘉比 ええ、前にも申しあげましたが、人間の寿命を延ばすための、「老化遺伝子」

「ガン遺伝子」「糖尿病に関する遺伝子」などの研究が盛んに行われています。

急激な進歩を遂げた遺伝子研究

——アメリカでは、生物工学を応用して、すでに食肉牛をたくさんつくることが、実用化されておりますね。

屋嘉比　そうです。食肉牛のメスは、一年に一頭しか子供を産みません。ところが、すぐれた牛の卵子をとりだし、人工受精させ他の牛に移植することによって、すぐれた食肉牛をたくさんつくることができます。

——このバイオテクノロジーは、日本でも行われていますね。

屋嘉比　ええ。この生物工学の分野は、最近、急激に進歩してきましたものです。

人間が受胎した瞬間にもつ遺伝子に、背が高くなるとか、太るとか、ハゲるとか（笑）、といった基本的な情報が組み込まれています。

最近では、この遺伝子による病気の治療も、研究される段階にはいっています。

池田　この遺伝子というものを、私どもにもわかりやすくいうと、どうなりますか。

屋嘉比　生まれたときに、その人の一生を左右するような、膨大な数の因子が、極微^{ごくび}の遺

伝子のなかに「情報」として存在しているわけです。こうした事實は、ひと昔前の医者も科学者も、誰も信じなかったことです。

池田 仏法では「眷属^{けんぞく}」というものが説かれております。親子や一族、親族といったものは、この「眷属」というものの一つの範ちゅうにとらえられます。

「眷属」には仏法上の深い意義があるのですが、ひとつには、

「天性親愛なるが故に眷と名づけ、更に相ひ臣順^{しんじゆん}するが故に属と名づく」（『法華玄義』）
という意義になります。

つまり、「天性親愛」——もともとの生命の傾向性が、親しいというのでしょうか。そしてそれが、「相ひ臣順」——お互いに連関性をもち、交わりあっている、というわけです。

屋嘉比 医学者としてみれば、親と子の遺伝の関係ともとれますね。

池田 そこで、人間の似たような親と子といっても、それぞれが一個の独立した存在であることも間違いない。それでいて、その性分は似通っているものが多くある。

ですから仏法では、生命の内なる「因」と、外なる「縁」との相応、和合といううえから、人間生命が誕生する。

つまり、母親の胎内に即して、それを「縁」として出生すると説かれていると、前にも申しあげました。

屋嘉比 ええ、そうでした。

池田 そこで、生まれてくる子供は、過去世の自分のもつ「業」、すなわち「因」によって、その「因」に見合った「縁」、すなわち親を選び、その因と縁とが合致して誕生してくる、というようにもとらえられてくると思います。

屋嘉比 遺伝情報は、両親から遺伝子を通じて、子供に伝えられます。ですから、遺伝子に含まれる膨大な「情報」は、仏法で説く「業」の一部があらわれてくるものとも、類推でききる気もします。

池田 ただ、「業」の論議それ自体は、屋嘉比さんにはすみませんが（笑）、生命それ自体の「我」というか、電子顕微鏡を通して見ることができる遺伝子よりも、一段と奥深い次元の論議と思います。

屋嘉比 なるほど……。じつはダーウインの進化論を世に知らしめたことで有名な、イギリスの生物学者ハックスリーも、遺伝の問題を考えていくうちに、この仏法の「業」という問題に、はいらざるをえなかったという事実があるようなんです。

人間にのみ可能な「業」の転換

——過去の「業」によって、未来の「果」が決定してしまうのであれば、人間の努力と向上心は、無意味になってしまふのではないですか。(笑)

池田 いや、仏法で説く「業論」というのは、運命決定論みたいなものではないんです(笑)。人間のもつ「業」というものをとらえ、その人間の「業苦」、つまり苦しみ、苦悩をば転換し、自身の変革とともに、時代、社会の変革へと志向しゆくための「法」を、仏法は明かしているのです。

屋嘉比 そうでしょうね。人間が向上心や努力を捨てたら、生きる意味がなくなってしまう。(笑)

池田 一般的に、動物には創造的な主体性はないと思われる。人間には創造性がある。そこに人間としての一つの証^{あかし}があるのではないでしょうか。さらに仏法の深い眼から見れば、人界に生まれてきたこと自体が、「悪業」の生命から「善業」の多き生命へと変えゆく可能性をもった、ということになるのです。

ここに根本的な、人間の主体性の裏づけがあると私は見ております。

屋嘉比 第一章で、遺伝によつてすべて人生は決定されない、と池田先生がおっしゃった意味が、わかる気がします。

池田 ただし、それであっても、「一闡提^{いつせんたい}」という、無明長夜^{むみようちやうや}のような人生を送るようなものもある、と仏法では説いております。

この「一闡提」というのは、ひとつには、現代的に言えば、人の苦を楽しみとするような、わるいことばかりしている快樂主義者、享樂主義者を指していると思います。

——しかし、努力してもどうしようもない人間の苦しみ、悲しみというものもありますが。

池田 そのとおりです。

そうした人間の本然的な苦しみ、「業苦」には、その「業因」がある。その「業因」は、「煩惱」の働きによつて生じるのであると、仏法は明かしております。

長くなったので省略させていただきますが、仏法の真髓の眼は、この「煩惱」をもつつみ、「善」の方向へ、「幸」の方向へと動かしゆく、宇宙大に広がりゆく、清浄にして、力強い「我」というものがあることを、明快に説き明かしております。

この「煩惱」をば、「善」の方向へと働かせ、無限に価値を創造せしめゆく現実的法則を、通途^{つうず}の仏教の範^{はん}ちゆうではいまだ明かされなかつた仏教の真髓である第三の法門、すなわち日蓮大聖人の仏法は教えているのです。また、それを「煩惱即菩提^{ぼんのうそくぼだい}」また「無明即法性^{むみようそくほつしやう}」と

いった「法理」として明かしております。

そこから、一個の人間における宿業というか、宿命の転換ということも、可能となってくるわけです。ですから、かりに大聖人が、この「大法則」をお説きくださらなかったら、人類は永遠に、暗き無明の闇に閉ざされ、煩惱と業・苦の大海の波を流離しゆく運命に、なっ
てしまったであらうと思います。

屋嘉比 仏法が、人間の奥のまた奥の「生命」というものに光を当て、そこからいっさいを
変革しゆく「法」、ということがよくわかりました。

——しかし、信仰を一生懸命やっても、かならずしも長命の人だけではないと思いま
すが。

池田 まったくそのとおりです。

仏法の歴史のうえからも、釈尊の弟子であつた目連もくれんも、バラモンに殺されている。

また大聖人のお弟子のなかでも、鏡忍房きやうにんぼうというお弟子が、小松原の法難で、東条景信かげのぶ一味
に殺されております。

また、熱原あつはらでは三人の信者である農民が、法のために殉死じゆんしし、斬首刑ざんしゆけいになつております。

屋嘉比 代々の御法主ごほつすのなかで、どちらかといえば若くして亡くなった方はおられますか。

池田 そうですね。ほとんどが御長命であられますが、第十七世日盈上人にちえいしょうにんが四十五歳、第

四十一世にちもん日文上人、第四十五世にちれい日礼上人が四十六歳、第五十世にちじよう日誠上人は四十二歳で御遷ごせん化げなされておられます。

外見ではわからない人間の幸、不幸

池田　そこで、私はいつも思い起こす、大聖人のお言葉があるのです。

それは、

「人身は受けがたし爪の上の土・人身は持ちがたし草の上の露つゆ、百二十まで持ちもちて名を・くたして死せんよりは生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ」(「崇峻天皇御書」一一七三)

との、まことに私どもの心を強くうつ一節です。

屋嘉比　いつも思うのですが、大聖人様は名文家でもあられたのですね。

池田　そう思います。ですから私は、このまれにして、草の上の露のごとき一生を、使命をもち、誇りをもって生きぬくことができれば、またその使命を果たすことができれば、これほど幸せな一生はない、とつねづね思っております。

ゆえに、私どもは、日夜、正しき「法」を持ちたもち、その法を弘ひろめ、人々のために、またより

よき社会建設のため、平和のために、貢献しゆくことを目指し、努力しております。

人間の幸、不幸というものは、外面から見ただけでは絶対にわからない。生命は客観を含めた主観である。外から客観視するだけでは、これまた見る人の主観で、その人の幸、不幸の一次元だけしか見えない。

屋嘉比 自分の幸、不幸は、自分がいちばんよくわかるものです。人間は自分自身まで、不幸であつても幸福であると詐^{いつわ}つたり、騙^{だま}したりはできないものだ。

——たしかに、外見だけではわからないものです。資産家であつても、自殺したりする例も多い。「ナイロン」を発明したのは、アメリカの天才化学者・カロザーズです。

彼はその功績で、勤め先のデュポン社から「生涯、どこへ海外旅行しても、どここの高級レストラン、バーで飲食しても、そのいっさいの費用は会社が負担する」と約束されたそうです。しかし、そんな満ち足りた生活に嫌^{いやけ}気がさしたのか、彼は四十一歳という若さで自殺しております。

屋嘉比 彼の場合、自らの知性により、あらゆる地位も名誉も保証された。しかし、それでも幸せとはいえなかったわけですね。これに似た例は、意外とありますね。

——また、有名人であつても、家庭内の陰湿な葛藤^{かつとう}があつたり、ひと皮むくと、醜^{みにく}い人間性であつたりすることが、意外と多いですね。そうした場合、死に方も概してよくありませ

んね。

池田 人の行く末は、誰もわからない。ゆえに、自分自身で正しき人生の大道をみつけないがら、その大道を自分らしく歩み、みずからを磨いていくことが大切でしょう。

——さまざまな経験をし、年を経れば経るほど、そのことが実感できますね。

池田 よく私の恩師はいわれた。

「人生の総仕上げの年齢こそいちばん大切だ」

と。戸田先生は、「そのためにも、大法の大道を見失ってはならない」といわれた。

——そう思います。

池田 私のまわりにも交通事故で亡くなった人もいる。病気で亡くなった方もおられる。

短命な人もおられる。さまざまな人間模様を、私は知っているつもりだ。

しかし、ここでいえることは、「南無妙法蓮華経」という、宇宙の根本法則に生きぬいた人々の、不慮の死というものをよく見ると、かならずといっていいぐらい「大きく宿命の転換がなされている」と、まわりの人々がいつております。

また、なんとなくその死を予感していた場合が多いようです。

——よく聞きますね。

池田 それらは、永遠に連続しゆく三世の生命のリズムを、それなりに知り、さわやかな

「生」と「死」との姿を、鮮あざやかに見せていたと感じとれますね。

屋嘉比 たしかに、そういう方がおられます。

池田 当然、人情としては、別離の寂しさや悲しみはあるかもしれない。

しかし、いわゆる「仏界」の作用というのか、苦悩を味わうようなことは、まったく近親の方々の姿には見られないものです。

——わかるような気がします。

池田 そうした人々の「死」の姿というものは、さわやかな夢のようであり、そのさわやかな夢が、縁ある人々をさらに勇気づけ、希望へと志向させながら、力強い波動の輪となっているようです。

屋嘉比 私も立場上、多くの方々の「死」の姿を見てきて、亡くなる寸前まで「生きぬくんだ」という力をみせて、苦しまず、笑顔で、反対に、私どもに生きる力をあたえてくれる場合がありますね。

“永遠”を決定する「一念」の強さ

池田 私がいつも感銘を深くする、大聖人様のお手紙のなかに、

「謗法の大悪は又法華經に歸しぬるゆへに・きへさせ給うべしただいまに靈山にまいらせ給いなば・日いでて十方をみるが・ごとくうれしく、とくしにぬるものかなと・うちよろこび給い候はんずらん」（「妙心尼御前御返事」一四八〇）

という、まことに甚深のお言葉があるんです。

「日いでて十方をみるが・ごとくうれしく——。このようなひろびろとした心で、さわやかな一念で、死を迎えることができるのであれば、これほど幸せな人生もないであろうと、思っております。

屋嘉比 そうした奥深き人生の生きざまというか、その人の内面というものは、第三者には、やはりわからないでしょうね。しかし、事實は事實です。

——それでいて、その近くにいた人に、なんらかの示唆というか、感動をあたえていくのだと思います。いや、よい勉強になりました。（笑）

池田 法華經寿量品に「更賜壽命」という經文があります。
簡単に申しあげれば「更に壽命を賜え」という意味です。

ですから、信仰して亡くなった、多くの方々の姿を見たときに、客觀的にも、医学的にも、その人の寿命が、二年も三年も、十年も二十年も延ばされていたという例が、まことに多いんです。

屋嘉比 たしかに、医師の眼からみても、その人の「生きゆこうとする力」が強い場合、難病を克服している場合が、かなりあります。

池田 そこで、大聖人様は、

「生の記有れば必ず死す死の記あれば又生ず」（「御義口伝」七三〇）

と、おおせになつておられる。これが三世の生命の大原則である。

ゆえに「死」は恐ろしきものでなくして、むしろ自然そのものの、新しき「生」への一瞬の眠りに通ずるといってよい。そこに、仏が「死は恐ろしい」とみていることは「無明」である、という意義があるわけです。

ですから、その意味においては、妙法への「信」強きことは、最大に「安心」なのです。また「安全」なのです。この世の劇が終わったなら、疲れて休む。そしてまた、生命力を蓄えて、つぎの「生」の活躍の劇を、繰りかえしていけばよいわけです。

——そのお言葉、感銘します。

池田 つまり、この世が「生の記」であり、亡くなつても、そのまま「死の記」となるというのです。そして「又生ず」、つまり「死」は、かならず新たな生命誕生への原動力となり、瞬発力となつていくわけです。

屋嘉比 人生の総決算の姿は、そのままつづくということとは、わかるような気がします。

——しかし、目連とか鏡忍房や、熱原の三烈士のように、殺されたり、また交通事故にあれば、苦しいのではないですかね。

池田 いや、妙法という「法」自体に帰命きみようし、殉じた場合じゆんは、そのまま「仏界」という法のなかにはいることができるのです。

この点は、かつて私も、戸田前会長にうかがったことがある。すると先生は、「眠るときに、ちよつとなにか夢をみるが、すぐに深い安らぎの眠りにはいるから、心配なものなのです」

といわれた。

——そうですか、わかりました。

池田 要するに、その人のもつ「法」が大事となる。その人のもつ「一念」の強さが大事となる。死後の宇宙空間の「十界三千の法」との感応かんのうがあるからです。

——そうですか……。

屋嘉比 私の知る多くの医師もいっていますが、ガンとか脳卒中とか、交通事故で亡くなっていく人は、不幸なようであるが、一面的にはいえない気がします。

生きぬいている間の、人生の価値がどうであつたかが、幸、不幸を決定するものであると。——いや、たしかにそう思われることもありますね。

少々、極端な話で恐縮なんですが、もう七十歳ちかくなるんでしょうか、ある殺人犯の母親が「息子の死刑を私は祈っている」と語っていたという、痛々しいニュースがありました。よく、われわれマスコミ仲間でも話し合うんですが、いくら親が長生きしても、子供が殺人者であつたり、強盗などをして捕まった場合、その親は子供かわいさのあまり、かえって苦しむ。この場合は、かえって長命が不幸となっている。どう考えたらよいのかと……。

屋嘉比 医学者として、こんなことをいってよいかわかりませんが、つきつめて考えていくと、生きているほうがいいのか、いなくなってしまうほうがいいのか、わからない場合もありますね。

池田 それは当然、天寿をまっとうし、生きぬくことが、正しい自然の道理であると思います。しかし、一寸先が闇であるこの人生と社会にあつては、長生き即幸せといいきれない人もいるかもしれない。そこに、確固たる自身の生命観をもった人と、そうでない人との違いが出てくると思います。

どうでしょうか。

屋嘉比 そう思います。

池田 私も、三十七年間の仏法の実践のうえから、さまざまな事象を見、聞き、指導もしてきましたが、仏法の鏡にてらしてみたときに、部分観でなくして、長い眼からみた全体観

のうえからの幸福観が、わかるような気がします。

幸福というものは、近づけば近づくほど、消えてしまう。不幸というものは、強く実感的に感じるものである。また、幸福の絶頂の裏返しは、不幸の奈落ならくそれ自体ともいえる場合がある。

——長生きそれ自体が幸せなのか、短命なのが不幸なのか、むずかしい問題ですね。

池田 要するに、深い幸福感は、地道な人生のなかにあるような気がします。

「派手な虚栄的なものは消費に等しい」といった哲学者がいたが、私もそう思います。

地道な一日一日の、正しい法則のうえにのっとった生活の生きがいのなかに、幸福感は広がっていく。その正しい生命観をもっていれば、すべてのものを乗り越えていくこともできると思います。

第五章 「脳と心」の神秘を探る

「春」の表現にも細やかな感受性が

屋嘉比 どうやら春めいてきましたね。

私は、沖縄出身なもんで助かります。(笑)

——昔の人は科学者ですね。「暑さ寒さも彼岸^{ひがん}まで」とは、よくいった。(笑)

池田 四季のリズムは、本当に不思議を感じる。万物がこのリズムにのっとっている……。——そこで、気分転換にもなりますし、今回は四季について、少し語っていただければと思います。

池田 そうですね。

四季には、初春とか、初夏とか、仲秋とかいうように、それぞれ「初」「仲」「晩」という言葉がついております。

屋嘉比 そうですね。

池田 ところで「春」には、それ以外にも「浅春^{せんしゅん}」「早春^{そうしゅん}」「陽春^{ようしゅん}」などと、さまざまな呼び方がある。

屋嘉比 まだありますか。

池田 「仲春」「芳春」、また「惜春」などとも、昔の人は語り、詠み、また書いたりしましたね。

——すると「立春」という言葉は、どういう意味になりますか。

池田 間違っているかもしれませんが、「春立ちける」の意味と思っておりますが。ですから、森羅万象がいつせいに春の模様を絞なす、という意味でしょうか。

屋嘉比 「春眠暁をおぼえず」などというのは、人間だけです。（笑）

池田 日、一日一日と明るさを増しゆく陽光は、生命を、じつとはさせておかない。

冬を耐え、すべての生命が、厚いカラをたたき割り、萌え出づるさまは、壮大なリズムを感じさせる。

ですから、春の姿に、種々な表現があるのは、やっと寒い冬が遠のき春を迎えた、その喜びといつか、ほっとした、素朴な感情のあらわれともとれる。

屋嘉比 そうでしょうね。日本人は、細やかな感受性が、とくにあるように思われますが。池田 そう思います。

——日本人は、草木の緑ひとつとってみても、とらえ方は微妙です。

池田 「もえぎ」「うぐいす」「あさみどり」等々、なかなか味わい深い言いあらわしがある。心の余裕を感じさせるとともに、言葉の生命から、その微妙な色合いが浮かんでくるよ

うだ。

——俳句が生まれた理由も、このへんにあるんでしょうか。

池田 古来、日本人には、繊細な美意識が、自然なかたちで溶け込んでいると思います。

——外国には、俳句にみあった言葉がなく、よく翻訳者が苦勞しています。

一草一木といえども生命の当体

屋嘉比 ところで、この地球上には、何種類ぐらいの植物が、あるのでしょうか。

池田 たしか、陸生植物だけでも、約三十万種と読んだことがあります。

屋嘉比 すると、生物のなかでは、植物がいちばん多いんですか。

池田 どうでしょうか。たしかとはいえませんが、この地球上で、全生物の種類は、百三十六万種ともいわれておりますからね。

屋嘉比 そうしますと、種類としては、やはり鳥などの動物や、虫や魚などのほうが多いわけですね。

池田 そう思います。ただ、同じ「科」のものが多いのは、植物のほうが圧倒的のようです。

ですから、仏典にも、たくさん植物の名前は、数多く見られます。

屋嘉比 どのくらい……。調べた人はおりますか。

池田 おります。たいへん、その方は苦勞されたようです。仏典の原本であるサンスクリット語、パーリ語と、漢訳した名称とを、一つひとつこと細かに比較しながら、その植物の種類はなにかを、調べていったようです。

その研究で明らかになった数は、四百九十八種です。

屋嘉比 たいへんなものですね。

池田 このなかには、仏典の原本に記された植物の呼び方が、似たように漢訳され、現在にいたっているものも多いんです。

——どんなものがありますか。

池田 たとえば、有名な「菩提樹」ぼだいじゆは、サンスクリット語でも「bodhi-vrksa」です。

また、「曼殊沙華」まんじゆしやけは、「manjusaka」などとなっています。

屋嘉比 それにしても、二千数百年も昔に、仏典のなかに植物が数多く登場してくるのも、不思議ですね。

池田 仏法は、この宇宙のあらゆる実在、現象というもののすべてを、生命的存在ととらえ、それを「諸法」とも、「森羅三千」とも、「森羅万法」とも説いている。

この「森羅」という意義は、あらゆる実在であり、現象である「法」というものを樹木に譬え、樹木が無数に繁茂しゆく姿、また無限に並び連なるさま、をいつているわけです。

また、「三千」とは多数という意義です。

屋嘉比　すると、仏法には、一言一句にも、深い次元からの生命への洞察がある……。

池田　そう思います。たとえば、一草、一木といえども、生命の当体である。

そのうえに立って、草木には草木としての姿があり、働きがある。鋭くその性分や特質をとらえているといつてよいでしょう。

また別次元からみれば、仏法では、甚深なる法門を、広く、正しくわからせるため、譬というものが多く使われている。そして多くの植物が、その譬えに使われている。

その意味から、仏法に、この草木などの植物をはじめとし、万般にわたる深い洞察の眼があつたことは、じゅうぶんうかがえるわけです。

屋嘉比　すべての物事を、正しくとらえようとした、仏法の科学的な姿勢を感じます。

池田　そこで、ひとつの例として、「法華經」のなかに、「薬草喻品」という経文があります。す。

——「薬草喻品」とは、どういう経文でしょうか。

池田　詳しくは、さまざまな文献がありますので、勉強していただきたいのですが、簡潔

に申しあげれば、仏の慈悲の雨は、種々雑多な草木の上にも平等に降りそそぐ。

すなわち、妙法という最高の薬は、国境、民族、また時代や社会制度を超え、いつさいの人々の煩悩ぼんのう、苦しみを、平等に解決しゆく「法」である、ということだと思います。

屋嘉比 譬えというのも大切です。それによって、深い真理を知ることもしける。

池田 仏ほとけの尊称のひとつに「世間解せけんげ」というものがあります。簡単に申しあげますと、因果がの理法を悟り、世間せけん、出世間しゅつせけんをとわず、ものごとの道理をよく理解する、という意義と意思いしです。

ですから、仏教では大事な仏典を残すため、何を使ったらよいかという、こと細かなことにも気をくばり、丈夫で保存性のある多羅樹たらじゆというヤシ科の樹きを選び、その皮や葉に刻みつけたというのも、そのひとつのあらわれといってよいでしょう。

屋嘉比 まだ、紙がなかった時代ですね。

池田 そうです。

屋嘉比 そうした努力があったからこそ、仏典が長く残り、中国で、紙が発明される時代にまで、受け継がれることができた……。

池田 そうです。「法華経」では「令法久住りようぽうくしゅう」とある。すなわち、仏法が未来永劫えいごうにわたって伝えられていくことを祈り、願ったわけでしょう。

屋嘉比 日蓮大聖人の仏法では、植物を譬えにひかれた御文はございますか。

池田 時に応じ、人に応じ、数多く説かれております。そのひとつの例として、身延みのぶの沢から、鎌倉に住む乙御前おとごぜんという女性に与えられたお手紙には、

「木は火にやかるれども梅檀せんたんの木は、やけず」(「乙御前御消息」一二二二)

と、梅檀たんとの木に譬えて、妙法の力用りきゆうを説かれている。

また、妙密上人みょうみつという人には、

「麻あさの中の蓬よもぎ・墨うてる木の自体は正直ならざれども・自然に直すくなるが如し」(「妙密上人御消息」一二三九)

とのお手紙がある。

これは、よもぎも、麻のなかでは真っ直ぐに伸び、曲がったりしない。と同じように、妙法にのっとった人生は、清らかな正しい生き方となることを、譬えておられるわけです。

屋嘉比 はあ、仏法の難解な法門を、少しでもわかりやすくしてあげたい、との思いやりからでしょうか。

泥沼のなかでも清浄無垢に

——「蓮華^{れんげ}」という言葉が多いですね。

池田 そのとおりです。

「妙法蓮華經と申すは蓮に譬えられて候」（「上野尼御前御返事」一五八〇）
とも説かれている。これは深遠^{しんえん}にして、重々の義があるんです。

いわゆる「蓮華」とは、花が咲くのと実がなるのが同時である、という性質をもっている。
屋嘉比 これは、数ある植物のなかでも、蓮華だけにみられる特徴ですね。

——そういえば、二千年も前の蓮^{はす}の種子が、遺跡から発見されたことで、たいへん話題になったことがありました。

池田 そうそう、いまからもう三十数年前でしたか、亡くなった東大の大賀^{おおが}一郎博士が発見し、世界的に有名になりましたね。

——千葉県の検見川^{けみがわ}遺跡から三個発掘し、「大賀ハス」と名づけられました。

池田 まさかと思ったんでしょうが、その翌年でしたか、その種子から立派な蓮華の花が咲き、いや、驚いた。当時、新聞にも大きく報道されましたね。

屋嘉比 強^{きようじん}靱な生命力としか、いいようがないですね。

私はまだ、そのころは、小学校にもあがっていませんでしたが。(笑)

池田 いまでは、全国に株^{かぶ}分けしていると聞いています。

——東京近郊では、町田の薬師池公園の池に植えられています。

池田 そうそう。先日、町田に行っただんですが、時間がなくて。惜しいことをしました。



見事に開花した「大賀ハス」と発見者の大賀一郎博士。

(笑)

——今年の開花は、七月ごろだそうです。

池田 そうですか。見事な花を、咲かせることでしょう。

屋嘉比 図鑑で見たことがあります、蓮華の種子は、真っ黒い皮で包まれていますね。

池田 ところが、中身は真っ白です。

きょうも、じつは東大阪市の友人の方々が、地域の公園に貴重な蓮があるのでということ、
で、「ハス」の資料をわざわざ届けてくれたんです。

屋嘉比 その「ハス」も天然記念物ですか。

池田 そのようです。府の教育委員会の指定書の写真も、添付してくださってましたから。

(笑)

ここの「ハス」も、大賀博士が昭和十五年に発見したそうです。これも、千五百年くらい
前の原始的な「ハス」のようです。

写真を拝見しましたが、ともかく見事な花でした。

——蓮の歴史も、相当なものようです。種類によっては、一億三千五百万年前もの化石
が発見されているようです。

池田 そうですか。また古来、蓮華とは、もっとも高貴な花として尊ばれてきました。

たとえば、五千年前のエジプトでも、王家の紋章となっていた。それが印された遺品が発掘され、カイロ博物館に展示されているそうです。

古代インドでも、理想の花であると同時に、薬草としても珍重ちんちょうされていた。

屋嘉比 おもしろいもんですね。

池田 当時は「蓮根療法れんこんりょうほう」というものもあったようです。釈尊の弟子舍利弗*しやりほつの難病が、これで快癒かいゆしたと、説かれています。

また、この花は腎臓、胃腸病の漢方薬とされていたり、さらに葉は、止血薬しけつやくとしても使われていたようです。ご存じのように蓮根れんこんは、滋養強壯剤じようきやうそうざいともされてきた。

屋嘉比 なるほど。そうですか。

池田 また、仏の座法を「結跏趺坐けつかふざ」といいますが、これはもともとは「蓮華座」といわれ、蓮華の咲く姿に模したといわれております。

——これは有名ですね。妙法は、なぜ蓮華以外の花を用いなかったのでしょうか。

池田 鋭い質問です。それについて、日蓮正宗第二十六世日寛上人にちかんは、「蓮華は、多奇なるゆえである。余花は妙法をあらわすに堪たえられない」

と、その理由について、余花の七種をあげ、明快に説かれているのです。

——具体的には……。

池田 その七つを、

「いちじくのように、無花有菓」

「山吹のように、有花無菓」

「胡麻や芥子のように、一花多菓」

「桃や李のように、多花一菓」

「柿のように、一花一菓」

「瓜や稲のように、前菓後花」

「一切の草木のほとんどは、前花後菓」

だからである、とおおせです。

屋嘉比 本当に、実証性を感じますね。

池田 さらに大切な意義は、蓮華という花は、泥沼のなかにあって、そこで成長する。それであって、泥に少しも染まることなく、清浄にして無垢なる花を咲かせる。

この姿を、『法華経』の「從地涌出品」では、

「世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し」

と説かれております。

屋嘉比 蓮華のような、清らかな人生でありたいものです。

しかし、いまは社会がわるすぎる。むずかしいですね。

池田　そこが大事なんです。ですから、現実社会に生きるうえでのさまざまな問題、悩み、さらにまた、鎖につながれたような自己の煩惱の淤泥おでい、その中であって、いかに生き抜こうか、いかに道を開いていこうとするか、またさらに、人間として、より高い境涯にいたろうとするか、それが人生というものでしょう。

よく仏法は「蓮華の法」といわれるが、厳きびしき人生と社会にあって、この宇宙の確かなリズムというか、法則にのっとり、みずからの生命を、生きいきと発現はつげんし、社会に貢献しゆくために、説かれたのが仏法である、というわけなんです。

気休めや自己満足だったら、誰も信じない。(笑)

科学も哲学も宗教も「生命」に帰着

池田　屋嘉比さん、科学万博を見てこられたんですか……。

屋嘉比　ええ、編集部の方といっしょに、報道関係への公開のときに行ってきました。

池田　私は忙しくて行けそうもありませんが、なにがよかったですか。

屋嘉比　丹念たんねんに見ようと思えば、三日間はかかるそうで、いろいろありました。

池田 「宇宙体験」や「生命の誕生」などが、わかりやすく、巨大スクリーンに再現されたのもあるそうですね。

屋嘉比 私はやはり医者ですので、はなやかな科学技術の粋をつくしたロボットや、壮大な映像の迫力もさることながら、「生命」ということを扱ったパビリオンに関心を持ちました。

——ハイテクの競演といわれる、今回の科学万博の特徴のひとつに、「生命の不可思議」とか、「宇宙の神秘」とか、「生命」をテーマとしたものが多くあるようです。

池田 十五年前の大阪万博には、まだそうした傾向は、なかったと思いますが。

——そのとおりです。

屋嘉比 パンフレットのなかにも、「人間の生命の偉大さ」「すべての生命が共存できる地球」、また「科学技術はあくまで、人間のための、人間を大切にするものでなければならぬ」等々、こうしたキャッチフレーズが意外に多いのに、私自身驚きました。

池田 すると、大きな新しい潮流が、世界的に始まっているということでしょうね。

屋嘉比 そう思います。

池田 つねづね論じているように、科学も哲学も宗教も、「生命」という一点に帰着せざるをえない時代にはいつてきたことを、私はたいへんにうれしく思います。

——そういえば、先日『朝日新聞』に、「医療と宗教を考える会」という勉強会が発足した、という記事がでていました。

屋嘉比 宗教とは無縁な存在であった近代医学が、宗教となんらかの接点を見いださざるをえなくなってきたことは、まぎれもない事実です。

——その理由は、「死」とか「難病」とか、「医学倫理^{りんり}」といったものを突き詰めていくと、医学と宗教が接近せざるをえなくなるからだ、と、世話人のひとりである中川米造大阪大学医学部教授が、いつておられたようですが。

池田 そうそう。昨年でしたか、「生命科学と人間の会議」が、箱根かどこかでありましたね。

——箱根です。

池田 そこでも、「生命の尊厳」をめぐって、各国の第一人者といわれる学者が、真剣な論議をしていたようですが。

屋嘉比 そうです。サミットを構成する七か国（日本、カナダ、フランス、西ドイツ、イギリス、アメリカ、イタリア）の学者が、一堂に会して開催されたものです。

なかでも、日本の桑原武夫博士の「生命科学と人間について」という基調報告は、たいへんな感銘をあたえたようです。

——私も、その会議録を手に入れたんですが、とくに博士は、「物心両面における世界の調和的統一を模索せざるをえぬところに、追いつまれたようにさえみえる」と、強調していたように思いました。

池田　なるほど。真理をついている。この認識は、世界各国の学者にとっても、共通のものであったようですね。もはやこの流れは変わらないであろうし、また変えてはならない。

第二回目はフランスのパスツール研究所なども加わって開かれると聞きましたが。

屋嘉比　そうです。

——また、この春（一九八五年）、宗教を心理学の立場から研究する国際学会も、京都で開かれます。

屋嘉比　この会議には、現在アメリカで、「死」を専門に研究していることで有名な精神科医のキューブラー・ロス博士や、深層心理学しんそうしんりがくの「新しい波」をつくるのに中心的な役割を果たした学者が、多数参加する予定です。

池田　テンポが早くなってきた感じがしますね。ともあれ、「生命」というものを究めきわようとすればするほど、宗教と科学は歩み寄らざるをえなくなる。

時代の進歩とともに、科学は宗教を欲し、宗教は科学の裏づけを求めていく、ということでしょうね。

——そう思います。ところで、その宗教の内容が、課題になっていかなければならない。

池田　そういうことですね。最近、科学者のなかでも、宗教と科学は共存しうるか否か、^{いな}ということが、盛んに論じられてきていると、聞いております。

ただ、そこでいえることは、部分観ではあるが、多くの西欧の科学者が光をあててきているのが、東洋の仏教であることは、間違いないことでしょう。

屋嘉比　不思議なくらい、一致しておりますね。

池田　何人もいると思いますが、アメリカのカプラ、ボーム、スイスのユング、またドイツのフロム、フランスのジャック・モノー等々、多くの科学者が、同じ志向性をもっていたことも、そのひとつの例といえないでしょうか。

屋嘉比　そうですね……。

池田　また、今世紀の傾向として、「現象学」^{げんしやうがく}などでも、もはやこれまでの科学者自身の物の見方それ自体を考え直さなくてはならない、という哲学的思潮があるようですが。

——そのとおりです。たとえば、ドイツのフッサール、フランスのメルロ・ポンティも、そうした問題意識から出発しています。

フッサールの「私は内的確実性に到達しなければならぬ」という言葉には、私も共鳴をおぼえます。

池田 精神医学の方面では、とみに有名なエーリッヒ・フロムなどはこの点、より明快です。彼フロムは、自身の思想^{し そうへん}遍歴^{れき}を語ったなかで、仏教というものに、大きな影響をうけたと述べております。

屋嘉比 それは……、どんな内容でしょうか。

池田 彼は『ブッダの教え——理性の宗教』と『仏教の知識』という、二冊のドイツの仏教学者の著書を読んで、

「これを天啓^{てんけい}のように感じた。完全に合理性の上に成り立ち、非合理的神秘化や、啓示^{けいじ}や權威に訴えることを必要としない精神体系を初めて知った」

とまでいつているんです。

屋嘉比 はじめて知りました。フロムは、学生時代に『自由からの逃走』などを好んで読んだ、なつかしい思い出があります。しかし、彼が仏教にそこまで関心をもっていたとは驚きです……。

——科学の進歩とともに、ますます仏法の法理への関心がたかまるでしょうね。

池田 そう思います。とともに、忘れてならないことは、宗教は本来、この人生を生きいきと生きゆく力と、勇氣と希望とを与えるものでなくてはならない。

その意味において、いかなる哲学も、宗教も、もはや力を失ってしまったこの社会におい

て、唯一、大乘仏法だいじょうぶつぽうの真髓しんずいたる日蓮大聖人の仏法が、万人をして、蘇生そせいへ、幸福へとほこびゆく、たしかなる「大法則」であり、一大平和勢力となって開花していることが、私どもの最高の誇りです。

その一人ひとりの蘇生の運動を、私どもは、日夜、しているわけです。

百年前の万博に「健康機器」が

——ところで、万国博覧会は十九世紀の一八五一年、ロンドンで初めて開催されています。

池田　そう、十九世紀末は「発明」「発見」、また「冒険」「探検」などが、あいついだ時代だったね。

屋嘉比　医学の分野でも、細菌学者パスツールのように、「神の死」が、科学時代の到来をもたらし、という人もおります。

近代医学も、この十九世紀が出发点です。

池田　先日、フランスから、十九世紀のパリ万博の貴重なパンフレットを、持ってきてくれた人がおりました。

それを見ていましたら、いま流行りはやの「健康機器」と同じような絵がでてたんですがね。

屋嘉比 はあ。どんなものが出ておりましたか。

池田 それが「ぶら下がり器」とか、「背すじ延伸器」^{えんしんき}とか「足踏」^{あしぶみ}、ウエスト調整器」なんていうものなんです。

今度持ってきますので、屋嘉比さんもいっぺん研究してみてください。みんなで、公園をマラソンしている絵とか……、なんだか「空気清浄装置」もありましたよ。(笑)

屋嘉比 当時も、健康ブームだったんですね。

池田 その意味がどうかわかりませんが、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」^{けんぜん}という、ローマの詩人(ユウエナリス)の言葉をうけて、クーベルタン男爵が提案した近代オリンピックも、この十九世紀末から始まっておりますね。

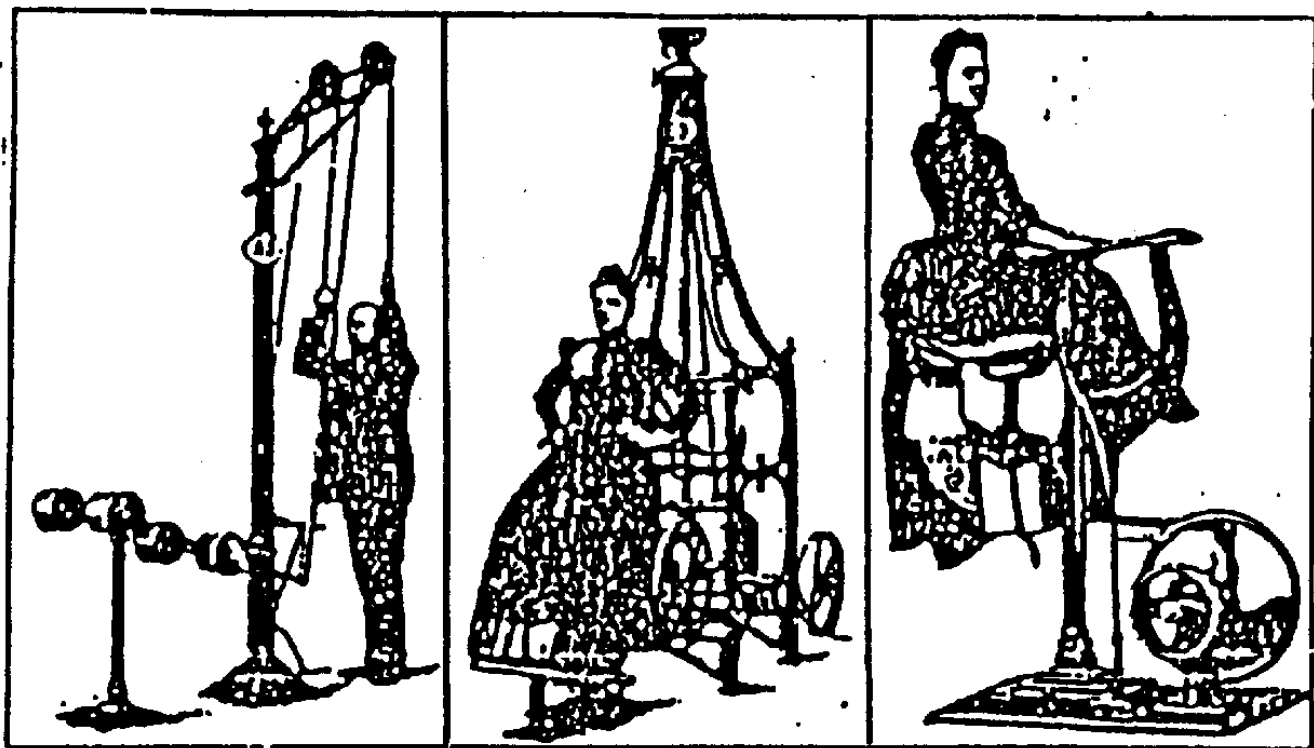
ともかく、この時代の人々は、新しいもの、強いものを志向していった……。

その影響が、文学作品などにもあらわれていますね。

——誰でも知っているのは、子供のころ読んだ、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』です。(笑)

池田 そうだ。この本では冒頭で、主人公のアリスが、「何もすることがないのにあきあきした」と語るくだりから、物語は展開していく……。

——ええ、それでアリスは「驚異の国」^{ワンダーランド}の夢に、どんどんおちていきます。



19世紀末のパリ万博に出品された「健康機器」。

池田 この作品は、一般には、童話として読まれてはいるが、ここでも数学教師でもあった作者ルイス・キャロルの、当時の文明に対する鋭い眼が感じとれるわけです。

——そういえば、小説『白鯨』^{はくけい}の主人公は、あの巨大な鯨^{くじら}を死にもの狂いで追いつづけます。その理由を聞かれたとき、「気鬱^{きうつ}から逃亡するためだ」と答えています。

池田 『白鯨』もこの時代の名著です。未知なるものを追い求めたいという、人間の常なる願望が、主人公の姿とおし、あざやかに描かれている。「心の空白」にさいなまれた、この時代に生きた人々の心情に、強く訴えるものがあったんでしょう。

——ところで「万国博覧会」というのは、そこが新文化の起点といわれるほど、世界中が注

目してきた。なかでも、十九世紀末のパリ万博には、各国がより抜きの展示品を出品し、新技術を競っています。

池田 日本も、よく参加できたね。

屋嘉比 まだ幕末でしたからね。

池田 そのころは、まだ日本に、正式な国旗がなかったようだ。

ところがパリ万博には、国旗を掲げて参加するために、なんだか、当時、薩摩藩が使っていた「日の丸」を急ぎよ、国旗に格上げしたともいわれている。(笑)

屋嘉比 エッフェル塔が立ったのも、そのころですか。

——いや、それは一八八九年、四回目のパリ万博が開かれたときです。

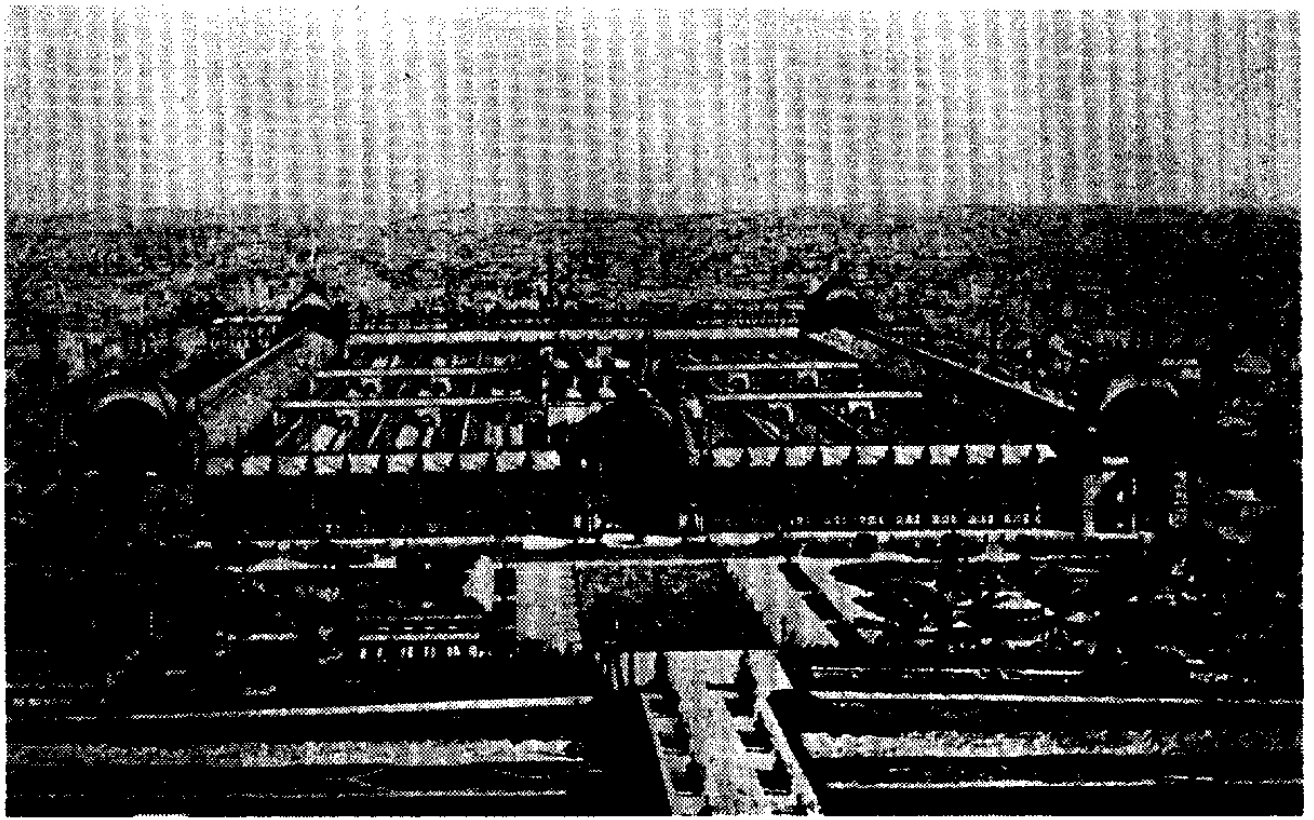
池田 いま、私たちが日常使っている電気製品も、この時代に原型が発明されたものが少なくないようです。

——ちよっと調べてみたんですが、電話も無線もさらに映画も、タイプライターも……。

新しい文明の利器が、つぎつぎと、この時代に生まれています。

新しい発見を求めて、探検に繰り出し、それが考古学ブームや、旅行ブームになっていったのも、この時代ですね。

池田 いま、ここに年表があるが、たとえば、発明王・エジソン、「電話」のベル、「無



19世紀末のパリ万博会場。

線」のマルコーニ、「X線」のレントゲン、「ラジウムの発見」のキュリー夫妻など、みなこの十九世紀の年代に活躍している。

屋嘉比 探検のほうはどうですか。

池田 主なものでも、「ナンセンの北極探検」「とんこう敦煌文献の発見」もこの時代なんです。

それに「シベリア鉄道の起工」「パナマ運河のかいさく開鑿」「オリエント急行の開通」など集中している。

——この世紀末に、パリでは四回もあいついで万博が開かれています。

科学技術の世紀から人間の世紀へ

池田 当時の科学技術の発明・発見の盛んなさまがうかがえますね。

十九世紀末は、「発明の世紀末」といわれるが、早いテンポで科学が進歩した。

そこに、科学の進歩だけが、神なき時代の自由な人間の象徴であるという、「科学万能主義」がしだいに広がっていったと、とらえることもできる。

——と同時に、「世紀末」という思想が、暗雲のように、人々の心に重くのしかかっていた。当時の文学思潮のなかに、ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー、ワイルドに代表される世紀末思潮が芽生えていったのは有名です。

屋嘉比 不思議と、われわれの時代と共通するものが、あるような気がしますね。

どの世紀にも「世紀末」があるのに、十九世紀だけが、とくに「世紀末」が強調されるのは印象的ですが。

池田 「世紀末」というのは、本来はゲーテの名著『若きヴェルテルの悩み』の「世界苦」に象徴される、十八世紀末のヨーロッパ青年たちの、心の葛藤かつとうのさまをいつておったようです。ところが、『広辞苑』や百科事典をみても、「デカダンス」「倦怠感けんたいかん」「懷疑的かいぎてき」等々の言葉は、十九世紀の「近代の世紀末」という言葉の同義語として出ておりますね。

結論からいえば、多くの学者がいうように、既成の社会秩序に対する反発と、本来、人間の幸福をもたらすはずの科学の進歩が、それとかならずしも結びつかなかった、という現実がすでにあったことも、ひとつの大きな理由と思います。

屋嘉比 その限らない延長が、われわれの現代ともいえますね。

人間は取り残され、科学はますます進歩していく。

池田 これも、ちょっと調べてもらったんですが、二十一年前、電卓が、日本で初めて売り出されたときは、一台五十三万五千円。(笑)

——いまは「ホームコントロール」なんていうのもありますよ。外から電話一本で、家の戸締まりから、風呂や電気釜のスイッチを入れることができますそうです。

屋嘉比 ともかく、十九世紀の無声映画が、現代のビデオや時計、テレビに、またタイプライターが、ワープロやパソコンに変わった等々、こうした科学技術の大進歩が、この百年間ということになりますね。

——パソコンもいいが、われわれ中年は、戸惑うだけです。(笑)

屋嘉比 電卓も発達しすぎると、単純な引き算や割り算もできない子供が、多くなると危惧きされています。

池田 まったくそのとおりだ。「科学というものは、結局、人間精神の財産のひとつである」との、有名な科学者の言がある。そうした危惧や戸惑いは、小さなことのようなのであるが、その底流の大きな時代の流れを、みなくてはならないでしょう。

ですから、高度化した技術の彼方かなたに、どうしても人間の精神性をたかめていかなければな

らない——ということは、当然の流れであつたといつてよい。

屋嘉比　それが、今回の科学万博の出展理念にも、あらわれてきていると思います。

——まったく時代が前進している。

科学の論理だけの進歩では、夜道の一人歩きのようなことになってきた。(笑)

池田　私も科学万博を見たい気持もあるが、ちよつと行けそうもない。

ただ、「人間のための科学」とか、「生命重視」とか「生命環境を守る」という方向性が、時代の共通認識として定着してきたことは、画期的な意義があると思います。

——池田先生の『生命を語る』は、英語版とスペイン語版が出版されていますね。このまえ、アルゼンチンの出版社が発行したスペイン語版が、お隣の国、チリの権威ある文学雑誌『パノラマ』から、八四年度最優秀書籍に推せんされた、というニュースがありました。

屋嘉比　チリですか。やはり、人間の根本の問題である「生命」、なかんずく仏法の生命観しやうさというものが、世界的な広がりで、注目されている証左ですね。

池田　私の本のこととは別として(笑)、生命という問題は、古今東西の最重大関心事でしょう。

——やはり、『生命を語る』が、この六月にフランスのシテ・ロシェ社から、仏語版でも出版されるところかかっています。この出版社では、すでに池田先生の『私の釈尊観』を刊行

しています。今後、他の著作も定期的に出していく予定だそうですね。

池田 そのようです。ともかく、科学が進歩すればするほど、「仏法」のもつ普遍性ふへんせいと、その時代の科学の志向性しこうせいとが、ますます近接していくと、私は思っております。いまは、ようやくその入口にはいった段階でしょう。

——フランスの友人から聞いたことですが、そのシテ・ロシェ社の、ベルトラン社長は、「フランスは今日、新しい精神文化を必要としている。仏教も、死んでしまったインドの仏教ではなしに、生きた仏教が必要である。池田先生が、東西の文化交流に貢献された、多大な成果を高く評価して、一連のシリーズに『池田選集』の名を冠することにした」と語っていたそうです。

人間と自然の絶対の「調和」が必要

——ところで屋嘉比さん、いま、スギ花粉症というのが流行はやっていますか。

屋嘉比 全国で、三百万から五百万の人が、この症状を訴えているといわれています。

——私のまわりにもいるんですよ。カゼでもないのに、鼻をいつもぐしゅん、ぐしゅんさせている（笑）。つい、うつるのではないかと心配になる。（笑）

屋嘉比 いや、アレルギー性のものですから、伝染はしないんです。

しかし、いまのところ対症療法だけでは根治できない、春の難病になってしまいました。

池田 春のはじめのように、気象が変化し、不安定なときは、気をつけろ、といいますが。
屋嘉比 ええ、カゼはもちろんですが、身体の節ぶしが痛くなったり、ゼンソクの人発作が起こりやすくなります。

池田 私も今年は、カゼにやられました（笑）。いやいや、困ったものです。

屋嘉比 よく春カゼは治りにくいといわれます。これは、めまぐるしい気温の変化に、身体の調節能力が、うまくついていけないためなんです。

池田 たしかにそうですね。これは気象が、病気の誘因になっている……。

屋嘉比 仏法では、季節の変化と病気についてなにか説かれておりますか。

池田 いくつかあるかもしれませんが、仏法では季節と病やまいの関係を、

「春、万物皆生じ寒出づる故、水大の力がます時、その寒が身体の水大を助け、水大增して火大を害し、そこに水大（寒病）が生じる」（「仏医経」）

というようなことも、説かれております。

屋嘉比 なるほど。「水大」とは、「四大」（地大・水大・火大・風大）のひとつでしたか。

池田 そうです。前にもふれましたが、「水大」とは、湿り気という性分のこと、万物の

生育に欠くことができない働きである。それが増加してくると、今度は「火大」である熱性がじゅうぶんな働きを失ってしまう、ということなんでしょう。

屋嘉比 それでは、春以外の季節についても、なにかありますか。

池田 「夏、万物栄華^{えいが}し、風大の流動性がます時……風大の病が生じる」

とあります。また、

「秋、万物成熟する時、熱多く……火大の病が生じる」

「冬、万物終亡し熱去る時、寒と風多く……地大の病が生じる」

とも説かれています。ですから、人間の身体は、自然の運行との関連だけを考えても、そこに絶対の「調和」が必要になってくる。

何事にせよ、調和ということは基本であり、大事ですね。だから、たまには息抜きも大事だ（笑）。どんなに多忙な毎日の繰りかえしのなかにも、人は花鳥風月^{からようふうげつ}を語り、天空の無数の星々を見ながら、静かに思索する心の余裕がなくては、偉大なる仕事はできないものだ。

屋嘉比 仏法は、宇宙を貫く「法」でありながら、まことに身近なことまで、大切にされておられますね。

池田 いや、大聖人のお手紙のなかには、

「夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり」（「兵衛志殿御返事」一〇九二）

といったように、自然の摂理^{せつり}をとおしながらの御文も多くみられるんです。

屋嘉比 大切なことですね。人間の身体はたいへんに微妙です。気温や日射の変化、風速や気圧の変動が、体調に与える影響は、やはり大きいものがあります。

池田 当然でしょう。人間にとって、もっとも快適な生活環境は、どういう状態になりますか。

屋嘉比 個人差は、もちろんありますが、人工的に室内の温度や湿度を調整できる装置を使って実験したデータがあります。それによると、多くの人がいちばん爽快^{そうかい}であると答えた状態は、「気温二二度C、湿度六五パーセント、風速一メートル以下」ということなんです。

池田 でしょうね。そうすると、やはり五月の、さわやかな季節がいちばんいい……。

屋嘉比 ええ、五月^{さつき}晴れの日本列島は、平均すると、この状態になるようです。

急速に説明すむガン細胞

——そこで屋嘉比さん、現代医学の最大課題となる現代病は为什么呢？
やはり、ガンでしょうか。

屋嘉比 まあ、現代病となると、ガンとか、動脈硬化症とか、精神病とか、ともかくいろいろあります。ただ、よくガンは現代病といわれますが、けっして新しい病気ではないんです。おそらく大昔からあった病気であらう、といわれています。

池田 私もそう思います。エジプトの大昔の人骨にも、ガンのあとが発見されたと聞いたことがあります。

屋嘉比 そうなんです。骨のガンで起こるのと似たような症状の跡が、そのエジプトで発掘された骨には見られたというんです。

池田 これもちょっと調べてもらったんですが、『旧約聖書』に出てくる病気で、ガンと思われる記述が三つある、といった医学者がいるようですが。屋嘉比さん、名前、ご存じですか……。

屋嘉比 それはイタリアのコピサロウではないでしょうか。

——「聖書」のような古い文献は、医学的には、記録として価値がありますか。

屋嘉比 あると思います。

池田 昔の人は、ほとんどが自分がどんな病気にかかっているかもわからずに、亡くなっていたんでしょうね。それが不幸なのか幸福だったのかは、別次元の問題だと思いますが……。

少し前のことになってしまいましたが、伊達政宗も、ガンで亡くなっただてまじわねたんではないか、という新聞記事がありましたね。

屋嘉比 ありました。この研究は、もう二十年以上もまえに、東大や東北大学の医学部で調査した記録もあつたはずです。

その分析では、昔は、かなりの人がガンのような不治の病にかかつていた、という結論になっていたと思います。

池田 たしか政宗は、食道かなんかのガンだったんではないでしょうか。政宗の亡くなる前の記録にも、数か月間、激痛に悩まされたというくだりも残っているようですが。

屋嘉比 ええ、噴門部食道ガンでガン性腹膜炎も併発していたと思われまふ。

池田 ガンという病気は、いつごろから医学的に明らかにされたのですか。

屋嘉比 一七七五年に、イギリスで煙突から出るススによって、煙突掃除夫の皮膚にガンができたことが報告されています。

池田 それでは、そうとう古くからわかつていたんですね。

屋嘉比 しかし、ガン細胞の本格的解明は、ここ十年ぐらいだと思います。

とくに、この一、二年、人間も含めて動物の全細胞に、ガン遺伝子が存在することがわかってきました。ガンの問題は、これからさらに急速に解明されていくと思います。

池田 ぜひこの点は医学に期待したいですね。

屋嘉比 ところが、今後の医学の重大課題は、このガンとともに、やはり「脳」の解明と
いうことがあります。ですから、二十世紀の医学の課題は「ガン」、二十一世紀の課題は
「脳」だ、とよくいわれるんです。

池田 よく聞きますね。最近は「脳死」か「心臓死」か、ということで大問題になってい
ますが、「脳」の問題というのは、どの点の解明がむずかしいんでしょうか。

「脳」も、仏法で説く「色法」のひとつ

屋嘉比 「脳」は専門でないんですが、よく脳とは「心の座」といわれます。

池田 そのようですね。

屋嘉比 ですから、「脳」の問題は、医学的にも最終的には人間の「心」という、まことに不可解な領域の問題にはいつてしまうからだと思います。

池田 そうでしょうね。人間の心の働きというものは驚異としかいいようがない、と書いていたアメリカの有名な平和運動家がおりましたね。

——その本はノーマン・カズンズの『人間の選択』でしょうか。

池田 そうそう。ちょっと見てもらったんですが、カズンズ氏は、「信じるものを選択することが大事なのは、脳の働きまでも変えてくるからだ」と、人間の心と脳について、いかにもジャーナリストらしい表現をしている。

——彼はその本のなかで「信念系」つまり信ずるというような強い意志の働きは、「たんなる精神状態ではなく、大いに重要な生理学的現実である」といっています。

池田 つまり、彼がいたかったのは、人間の脳には、神経細胞ひとつ取り出してみても、百四十億個もの細胞がある。そのうちほんの微々たる細胞でさえ、人間の心の微妙な変化に適応し、驚くほどの化学反応の連鎖^{れんさ}を起こす。この力ほど不可思議なものはない、ということであると思うが、どうだろうか。

——そう思います。ただどうでしょうか。ノーマン・カズンズは、医学の専門家ではないと思いますが……。

医学者は「心と脳」をどうみているのでしょうか。

池田 いや、カズンズ氏はカリフォルニア大学の医学部教授になってるよ。

現代の精神医学や神経生理学などでは、人間の「心」の働きと脳の関係は、相当突っ込んで究明されてきているようですね。

たとえば、喜びや楽しさ、悲しみや苦しきなど、心の変化による脳の化学的な反応の変化

などの研究は、最先端の分野であると聞いていますが、屋嘉比さん、どうですか。

屋嘉比 そのとおりです。とくにアメリカで盛んです。ウイスコンシン大学の心理学者ハリー・ハーロー博士、ミネソタ大学のバーシャイド博士などはおもしろい研究をしています。たとえば恋愛していた男性が、失恋すると、どのように脳の分泌物が変化するか、といった身近な問題をテーマに研究しています。

池田 仏法ではご存じのように「色心不二」「依正不二」「而二不二・二而不二」とも説かれ、人間の心と身体とは密接不可分であり、お互いが相互に作用しあっているのが本来の姿である、と教えています。

屋嘉比 その点に関しては、シカゴ大学の心理学者エックハート・ヘス博士なども、人間の精神状態の変化と目の瞳孔の動きの関係を、研究から明らかにしています。

医学の分野における心の研究は、もちろん仏法の次元とは違いますが、なにかしら、生命の本質論にちかづいているような気がします。

池田 ただ、それが仏法の全体ではないということもご理解願いたいんです。

仏法では、いま、申しあげたように、「生命」というものを一次元からみれば「色心不二」であり、「色心不二なるを一極と云うなり」（「御義口伝」七〇八）と、それが生命の実相を究めた法理であると、説かれております。

——色心の「色」^{しき}とはなんでしょうか。

池田 簡単に申しあげれば、「色」とは、人間の心に対する物質的、肉体的側面である。

屋嘉比 すると、脳というのも、ひとつの「色」のあらわれととってもよいわけですか。

池田 そう思います。それに対し、「心」^{こころ}とはいわゆる心の作用である。つまり、仏法では、「色法」すなわち外形としてあらわれた具体的な相と、「心法」すなわち内なる心の働きというものは、どちらが中心でもなく、「而二不二」、つまり二つであってしかも二つでない。ちよつとややこしいんですが。(笑)

これが実相である、というわけなんです。

屋嘉比 医学のうえからも、まことに示唆のある仏法の法理と思います。

池田 そこで屋嘉比さん、この人間の「心」という存在が、脳にあるのか、ないのか、実際の実験によって調べた著名な医学者がおりましたね。

屋嘉比 ええ、カナダのワイルダー・ペンフィールドが行った実験です。

博士は、二十年ちかく前、すでに亡くなっております。

池田 博士は「てんかん」の原因を見つけるため、この実験を行ったそうですが、どういう実験をしたのですか。

屋嘉比 患者の脳のいろいろな部分に電氣的刺激を与え、その反応を調べたわけです。

池田 いわゆる眼とか、耳とか、鼻とかの「五官」の反応ですね。

屋嘉比 ええ、たとえば、聴力をつかさどる脳の部分に電気の刺激をあたえると、その人は幻聴げんちようを起こすことがわかりました。

また今度は、視覚をつかさどる部分にあてると、幻覚を起こすわけです。手足の運動の部分にあてると、手が自然に動くという反応がでたわけです。

池田 ちょっと気味がわるい氣もしますが。(笑)

いわゆる人間の「五官」の反応、つまり「五識ごしき」を確認したわけですね。

屋嘉比 ええ、ところが、その後患者に聞くと、そうした反応は、医者からむりやりやらせられた感じがする。自分の意思でやったという意識は、まったくない、というんです。

そこで博士は、脳それ自体が心を生むのではない、と結論づけているわけです。

池田 これらの画期的な脳の研究が評価され、博士の名は、世界的に知れわたった……。

屋嘉比 そのとおりです。

宇宙大に広がる「九識」の存在

——「五識」とはなんでしょいか。

池田 いま、申しあげたように、仏法では、人間の「心」というものの働きを、ひとつには「眼」「耳」「鼻」「舌」「身」という五官にともなうものであると、説いているわけです。

「五識」の「識」とは、「境に対して（略）了了別知すること^{りようりようべつち}を名^{なづ}けて識と為す」というように、対象を分析し、認識する作用をさしているわけです。

また、少々専門的になってすみません。（笑）

屋嘉比 いえ、勉強のために、ぜひお願いします。

池田 いまの「五識」と、いわゆる「第六識」である人間の物事に対する思考といふか、思慮といった「意識」は、誰人もよくわかることです。

屋嘉比 ええ、そうですね。

池田 ところが、仏法の高次元の直観^{ちよつかん}の眼は、その「六識」の奥に、「七識」という人間精神の深い内面の世界、また「八識」という、その内面世界の基盤となる「無意識深奥^{むいしきしんおう}」の世界、さらには宇宙大に広がりゆく「大我」である「九識」というものをとらえております。

このへんは、『仏法と宇宙』を語る』でも少々論じさせていただきましたので、略させていただきますが、ともかく「法」を軸として、無限の広がりと深さをもって説かれているのが仏法なんです。

屋嘉比 いま、池田先生が、人間精神の深い内面世界とおっしゃいましたが、それについ

でも、ペンフィールドの興味深い研究がありました。

博士は、人間の高度な心の働きとなる「信ずるということ」、また決心というような「価値の判断」とかいったことは、五官の反応と異なつて、脳のどこの部分を刺激してもあらわれない、と主張しております。

池田 それは、私も聞いたことがあります。当然のことながら、物事への価値判断力などは、人間の心の働きがもつ高度な機能である。それは、あくまでも、脳という「座」を借りて存在しているものだ、と博士はいつていたそうですが……。

屋嘉比 そうです。

池田 でありながら、さきほどのヘス博士たちの研究からも明らかのように、人間の「心」と、物質である「脳」は相互に影響をおよぼしている。

つまり「二にして不二」としか、とらえようがない……。

科学が進むと、たしかに仏法が理解しやすくなることが、これでもわかる。

ともかく、このへんは、医学の今後の重大課題ではないでしょうか。

屋嘉比 そう思います。ところが、池田先生のお話をうかがっていると、仏法は、いわゆる「心」の、さらに奥深い生命の実相じつそうに光をあてておられます。医学はとうていそこまではおよびません。

もはや、心の問題は、医学上においても、高度な哲学との連関のうえから把握されなければならぬ段階にはいったんです。

——博士の考え方は、亡くなってすでに二十年になりますが、現在でも認められているんですか。

屋嘉比 おります。日進月歩に進歩する医学の分野では古典的な研究ですが、この考え方は、現在でもじゅうぶん認められております。

また同じような研究をした、フランスのロジ・ギョーマン博士は、ノーベル賞を受けています。この人は健在です。

池田 そのギョーマン博士の功績は、広く世間で認められておりますね。

——いや、ギョーマン博士は、いっぺん池田先生に会いたいという話があったんではないですか。

池田 あった気がします。互いに多忙で、お会いできなかったんだと思います。

——いま、アメリカの研究所にいますよ。

池田 ああ、そうかもしれませんね。

——二、三年前、ローマクラブの故ペッチェイ博士とギョーマン博士が北京でたまたまいっしょになったそうです。そのとき、池田先生のことにも話に出たと、ペッチェイ博士がパリ

の日本人の医学博士に、あとで語っていたそうですよ。

池田 ああ、そうですか。それは知りませんでした。

「一念」に収まる森羅三千の法

屋嘉比 そこで私は、じつはこの対談を進めるにあたって、池田先生の『仏法と宇宙』を語る』を読みなおしました。

池田 いや、それはどうも恐縮です。(笑)

屋嘉比 そのなかに、この脳の解明と、ひじょうに関連があると思ったことがあるんです。
——どんなことでしょうか。

屋嘉比 池田先生は、人間の一念というものは、宇宙大の広がりをもつものである、と話されておりました。

——ええ、そうでした。人間の「一念と宇宙」という連関性も、まことに不思議ですね。

池田 ひとつの次元でいえば、ミクロ(極小)の世界とマクロ(極大)の世界ともいえま
すね。

これもまた、まことに妙である。この広大無限な宇宙も、その始まりは、はるかに極小の

「火の玉」であつた。まことに小さな原子核の融合が、巨大なエネルギーとなる。

また、極微の遺伝子に、何億もの情報が存在する等々……。

屋嘉比 人間の脳神経細胞の数も、百四十億個ともいわれます。

——これもまた不思議ですね。

池田 まったくそのとおりだ。さらに百四十億個の神経細胞一個一個が、樹状突起をのびし、約千の他の神経細胞と連絡網をつくっている。その連絡網の組み合わせは、これまた宇宙大である、と聞いたことがあります。屋嘉比さん、本当ですか。

屋嘉比 そのとおりです。計算してみますと、この全宇宙に存在する陽子と電子の数は、10の一千乗より少ないようですが、神経細胞の組み合わせは、10の三兆乗にもなります。

池田 要するに、われわれ人間の頭脳の働きの組み合わせは、宇宙大の広がり、無限にちかい数となってしまう、というわけですね。

屋嘉比 これもミクロとマクロのおもしろいところです。こうしたこと＊いちねんさんも仏法の「一念三千」の法理に通ずる気がします。

池田 たとえていえば、そういう考え方もあるかもしれません。私は、一面はそれでけっこうであると思います。

私は仏法者ですから、信仰のうえからみますが……。

屋嘉比 いまの医者は、帰納的^{きのう}な思考の教育をうけていますから、先生のような評価をしてくださるとありがたいんです。

池田 仏法においては、人間の生命というものを「一念三千」とも「一心法界^{いっしんぽうかい}」とも、また「総在^{そうざい}一念^{いちねん}」とも、完璧^{かんぺき}に説かれております。

つまり、この人間の「一心」すなわち「生命」という存在に、この全宇宙の森羅三千のありとあらゆる諸法が、すべて具足^{ぐそく}されてしまうことを、明快に教えているわけです。

ですから、ひとつの次元で、脳の細胞の数という客観的^{こくけん}公準^{こうじゆん}から、この人間の一念というものに、宇宙がすっぽりと収まってしまうことが、ここでも証明された、といってもさしつかえないと思っております。

そこで私どもの信仰の実践、また現実の人生、生活のうえからみれば、「一念三千」「一心法界」「総在一念」といっても、いまだ「理」というか、「觀念^{はん}」の範^{はん}ちゆうである。

日々刻々と変化しゆく現実の生活にあつて、広々と無限に広がる「一念」をもつことが、真の幸福といえる。その「一念」をもちうる、確固たる自身の人生観があるならば、この荒波のごとき社会をば、悠々^{ゆうゆう}と乗りきっていけると思う。

ところが、最大の人生の問題ではないでしょうか。

屋嘉比 そのとおりです。そうでなければ高邁^{こうまい}な理論も価値とはならない。

池田　そこで、その人間の「一念」というものを最極さいごくに開きゆき、一人ひとりが、日々価値の創造をせしめゆく現実的方途ほうとを、第三の法門たる日蓮大聖人の仏法は、説きあかしているわけです。その強き一念の波動は全宇宙の果てまで広がりゆくと……。

この方程式を大聖人は、

「題目を唱となえ奉たてまつる音は十方世界にとずかずと云う所なし」(「御講聞書」八〇八)
とおっしゃっておられるのです。

屋嘉比　ある哲学者が、「脳の問題は科学にまかせても、心の問題は心に返して、人間としてよく生きるという、このことである」と語っていた。

私は心の問題は、医学者もやはり、より広い視野からのアプローチが必要と思います。

第六章

生命尊極の境涯「仏界」

「一念」のもつ無限の可能性

——今回も引きつづき「脳と心」の関係について、お願いしたいと思いますが。

池田 なかなかむずかしいですが（笑）、しかし、どうしても通らねばならない問題でしょう。

屋嘉比 貴重なチャンスです。自分もいろいろと読み、勉強してきましたが、話すことは、また一步、自分のものとすることができますので、たいへんありがたいことと思います。

池田 屋嘉比さん。前の章で、世界の各国も、「脳」の研究と「ガン」の解決は、最先端の学問である、といっていましたね。

屋嘉比 そうです。世界的な重要課題です。

——たしかに、最近、書店のコーナーに「脳」や「心」を扱ったものが多くみられます。

池田 そうですか。ほとんど本屋に行く機会もないもので……。心の広がりというものが、「脳」の働きという次元からみても、宇宙大におよぶという事実を、医学的にもアプローチできる時代にはいってきましたね。

脳医学の進歩も、じつにめざましいスピードで進んでいる。

屋嘉比 医学者たちも、「人間」とは何か、人間とはこれほど無限の可能性に満ちた存在であるかと、びっくりしているようです。

池田 そうしたすばらしい成果が、人類の将来へ向かっての、新たな自信になっていくことも間違いない。人間というものが、本当によりよき方向へ、よりたかき方向へと進んでいくことを、私は祈りたい。

——前の章で、人間の奥深い生命というか、一念というか、「心」という問題について、仏法では、「一念三千」とも、「総在そうざい一念いちねん」ともいう法理があるとうかがいました。

その点を、少しお願いしたいと思いますが。

池田 そうですね。あるイギリスの著名な哲学者が、人間のすべての尊敬の念の基盤となるのは、

「現在というものが、存在全体を、過去も未来も、時間の広がりの中で、つまり永遠をも、自らの内に保持していることを知覚することにある」

と語っていた。

仏法者として、なかなか深い思索の一節と、記憶している。

昔から、多くの哲人たちが願望し、究めきわようとしてきたのは、この一点である。

この大宇宙のなかに実在する自分自身の存在というものが、いったい「なぜ」あるのか。

また、「なんで」あるのか。その人間のもつ一念の広がりがあるのか。

また、この一念が、ご存じのように、どこまで無限の可能性をはらんでいるのか、ということでしょう。

——かのビクトル・ユゴーが「空よりも大きな眺めがある。それは魂の内部である」と叫んだのはあまりにも有名です。

池田 私も大好きで、よく使った言葉です。

そこで、仏法で説く、この「一念」という問題ですが、じつに深く、さまざまな角度からとらえられている。さらに多次元から究明し、説かれている。

ともかく、大宇宙とともに、この小宇宙である人間の一念の微妙さという問題もむずかしい、ということ的前提とさせていただきたいんです。

屋嘉比 当然、そうでしょう。ただ、その理解のなかから、なにか深いものをつかみ、参考にさせていただきたいと思います。

池田 「一念三千」の、また「総在一念」の、「一念」の「一」とは、生命究極の「根本」ということです。

その法理を、ある場合は「肝要」ともいう。また「一実相」とも説かれている。

さらに「中道実相」という意味を含めてもとらえられている。

さらにまた、一瞬刹那せつなの「一」という意義もあるわけです。

屋嘉比 「一」とか「二」とかいう数字の概念とは違うわけですね。

池田 また、ある学者の研究では、「念」という語源について、「心」+「今」プラスと論じている。この「今」は「含」と同じ意義で、心に一瞬のすべてを包み込むことをあらわしている、ともいえる。

さらに「念」ということ自体にも、「思い出す」「記憶する」という心の作用をもっている。また「一」と同じく極めて短い時間、つまり一瞬刹那の意味もあるといわれています。

そこでこの一念は、「刹那相続」というがごとく、遠き過去から瞬間的な現在へと、そしてさらに現在から未来への瞬間、瞬間の果てしなき連続であるわけである。

——たとえば、テレビの一コマ一コマの映像のようなものでしょうか。

池田 わかりやすいえば、そういつてもいいと思います。テレビの画面は、一秒間に三十コマもある。その瞬間のごとき一コマ一コマが、つぎつぎとドラマを映し出し、一貫した連続の映像となる。

屋嘉比 たいへんな速さで映像が動くため、一コマ一コマはわからない。

池田 仏法が説く「刹那」とは、それ以上にはるかに極小の時間の単位のことを指している。「大毘婆沙論」だいびばしゃろんという経釈には、

「一彈指ノ間ニ六十五刹那アリ」

という解釈もあるぐらいです。

これは、指をまるめてはじく動作のなかに、六十五の刹那があるという意味です。

屋嘉比 今の時間の単位では、何秒ぐらいでしょうか。

池田 どうでしょうか。一秒の七十五分の一と計算した仏教学者もいますが、「刹那」の元意は、量ることのできない極小の時間と思います。

——すると、私どもの一生は、また同じく、瞬間、瞬間の連続となるわけですね。

池田 そのとおりです。結論していえば、宇宙の森羅万象、万法ことごとくが「一念」に包含される。

さらにこの瞬間、瞬間の人間の「一念」は、大宇宙へと遍満しゆくことを、明快に説き明かしたのが、この「一念三千」の法門なんです。

屋嘉比 どこに……。

池田 法華経です。この法華経二十八品には、「迹門」と「本門」とがあります。そして序品第一から安樂行品第十四までを「迹門」といい、從地涌出品第十五から普賢菩薩勸発品

第二十八までを「本門」といいます。

そのなかで大事なのは、迹門の方便品第二に「十如是」という法理が説かれている。

さらにこの方便品から、人記品第九の間に「十界互具論」が説かれています。

そして、本門の要法たる寿量品第十六にいたって「三世間」が説かれるという、多次元の論議があり、この「一念三千」の法門があらわされたことです。

これをみずからの悟りのうえから、理論化し体系化したのが中国の天台大師です。

「一念三千」の事実の現象

——「三千」とは具体的に……。

池田 そうですね。有名な「摩訶止観第五」に、

「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す」

とある。

十法界とは、「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人」「天」「声聞」「縁覚」「菩薩」「仏」ということです。

つまり、「一心」「一念」はこの「十界」という十種の境界をそなえている。その「十界」のそれぞれは、瞬間、瞬間変化し、「十界」を相互に具し、十種に変化をしていく。

さらにその十界が互具した「百界」は、のちほど申しあげますが、十如是（相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等）という十種の生命の普遍的側面を常にもっている。そして五陰・衆生・国土という「三世間」があり、それぞれ厳然たる区別をもちながら、すべてわれらのこの一念に具していくというのです。

したがってこの一念は、三千種の世間をはらみ、具しているというのです。

屋嘉比 “乗ずる” わけですね。

池田 いや、仏法で“乗ずる”という意義は、単なる数量的計算ではないんです。生命のもつ立体性というか、奥深さというか、それを三千の法数として表現しているんです。

——「一念三千」の法門は、仏法のなかの最高峰といわれますが。

池田 そのとおりです。そこで多くの宗派が、この「一念三千」の法門を盗みとっていったといわれていますからね。（笑）

この「一念」というものを、どのようにとらえるか……。

これは科学でも、医学でも、最重要的な本質問題ではないかと思えますが。

屋嘉比 永遠の志向性です。

だが現実問題、そこまでいくかどうか……。むずかしいでしょう。

——個と全体、全体と個の関係ともいえますね。

池田 ま、簡単にいえば、この地球上、そして大宇宙のいつさいの現象というものは、全部この五尺の身の「一心」に収まる。六尺の人もいますが（笑）、この一心に、完璧かんぺきに関係、連動していくものである、ということです。

屋嘉比 なかなかむずかしい論理ですが、わかるような気がします。鋭い仏法の眼まなこですね。

池田 さらに、この微妙きみょうにして、変転じつそくきわまりなき瞬間、瞬間に、どのような自己の一念をもつか。この厳きびしき実相じつそうが、現実の人生の幸、不幸を決定していくとらえたのが、じつに仏法なのです。

屋嘉比 すると、「一念」の波動の連続がすべてを決定、方向づけていく……。

池田 そのとおりです。そこで、この「一念三千」の法門については、「理り」と「事じ」という問題があるんです。

わかりやすいいえば、「理」は、人間の一瞬の生命に三千を具すという原理を明かしたことを指します。その原理を、事実のうえで、生命に顕現けんげんすることが「事」なんです。

——一般的に法華經二十八品で、迹門十四品は「理」、本門十四品は「事」といいますね。

池田 そうです。ところが、大聖人の仏法からみると、法華經の本迹ほんじやくともに「理」となるんです。

屋嘉比 すると「事」の法門は……。

池田 おっしゃるとおりです。いくら「一念三千」の法理がある、といわれても、それだけのことであり、観念の域をでない。

ゆえに、結論していえば、第三の法門であられる日蓮大聖人の「文底独一本門事もんでいどくいちほんもんの一念三千たる南無妙法蓮華経」が、唯一末法における「事の一念三千」の当体となるわけです。

ここがもつとも大事であり、肝心要かなめのところなんです。

——よく天台の理の一念三千は、ビルの絶妙な設計図みたいなもので実体がない、といいますね。

池田 しかも「南無妙法蓮華経」は即御本仏日蓮大聖人の御生命そのものであられる。

そこで日蓮大聖人は、この大宇宙本源の法則と一体であられる御自身の生命を、一幅いつぶくの「曼荼羅まんだら」として、根本法の当体とされたわけです。

曼荼羅とは、「功德聚くどくじゆ」とも、「輪円具足りんえんぐそく」ともいい、「本尊」と名づける。この「本尊」とは根本尊敬すべき当体ということです。

要するに、私どもの、この一念は変化、変化の連続である。

この「御本尊」に「南無妙法蓮華経」を唱える一念となったとき、はじめて仏界という尊極の生命がわが一念に始動する。

そこにのみ、全生命、全英知を凝結ぎようけつした、人間の最大価値の行動がある。

眞実に、一念三千が自己の生命に完結できるという意味で、事実の現象がある。これを「事」というわけです。

——たとえば、テレビの理論は知らなくとも、スイッチを入れれば、見ることができるといふのと同じになりますか。

池田 わかりやすくいえば、そういつてもよいと思います。

そのスイッチを入れ、正しくチャンネルを合わせるのが、いわゆる信心です。

信心がなければ、いくら御本尊を持^たつていても、仏界への活性化がなされない。

ですから、要するに過去の八万法蔵の經典も、天台の「摩訶止観」も、すべてこの御本尊の論理的説明、証明書として収まっているんです。

屋嘉比 万般の道理も、同じ方程式になりますね。

池田 なお、本尊論については、「人法一箇^{にんぽういつか}」という、まことに深い法理がありますが、ここでは略させていただきます。

六道輪廻^{りんね}する生命にも「尊厳性」が

——そこでまず、「十界」ということですが……。

れている「六道輪廻」^{ろくどうりんね}、つまり「地獄界」「餓鬼界」「畜生界」「修羅界」「人界」「天界」という境界がある。

そして「四聖」^{しせい}という「声聞」「縁覚」、さらには「菩薩」「仏」という、より高次元の境界が厳然としてある。

この妙なる範ちゆうを、厳としてもっているのが生命の実相である、というわけなのです。
——苦しんだり、悩んだり、自分を見失ったり、また有頂天になつたり（笑）、仏法は現実というものを鋭くとらえていますね。

池田　そこでまず、有名な「観心本尊抄」^{かんじんほんぞんしょう}には、人界互具の九界の姿について、まことに簡潔、明瞭に述べられています。^{めいりょう}

——「観心本尊抄」は、法本尊を開顕された大事な法門ですね。^{かいけん}

池田　そのとおりです。「本尊抄」には、

「数ば他面を見るに或時は喜び或時は瞋り或時は平に或時は貪り現じ或時は癡現じ或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり」（二四一）

と……。

屋嘉比　いや、たしかにそうです。（笑）

池田　しかもこの「地獄界」は百三十六種。「餓鬼界」は三十六種、また三種九種という説もあります。さらに「畜生界」は一万三千三百種あるというんです。

屋嘉比　はあ、たしかに、苦しみとか欲望とかには、さまざまな姿がありますね。

池田　また「修羅界」は、自分の身長が八万四千由旬ゆじゆん。四大海の水も膝ひざまでしかない。これほどおごり、たかぶったときの人間の生命は、自分が大きく見えるというんです。

他人は、そうは見えていない。(大笑)

屋嘉比　ときどきいますね(笑)。「六道」より上はどうなりますか。

池田　これは、反省的自我ともいいます。

いわゆる学者のような「声聞」、また芸術家などの「独覚」どっかくすなわち「縁覚」、さらに人々のために働く「菩薩」があるとされています。

つまり、日常性を突き破って向上しようとする生命の状態です。

屋嘉比　なにかの縁で、勉強するようになったり、人のために働く……。誰でも経験します。

——最近は、自己中心主義で、人のために働き行動することが少なくなってしまった。

池田　それはそれとして、この「九界」の行動とか、姿が、それぞれ顕現したり、冥伏みょうふくしたりする。これは私どもの日常生活でよくみる、またよく感じ、納得できるものです。

ここで重要なことは、仏法の仏法たるゆえんの追究、探究の眼は、尊厳にして無限の力をもつ「仏界」という生命の实在を、いかにして顕現しゆくか、というところにあつたんです。ですから、仏道修行というものは、この「仏界」を湧現ゆげんするために、本来なくてはならない。日蓮大聖人の大仏法は、この一点に凝結され、さらに正しき「本尊」をうちたて、その現実的方途を提示しているわけです。

ゆえに、万人が正しき信心修行をなしうるものなのです。

——その「仏界」という境地について、なにか説かれていますか。

池田 この仏界の姿を、釈尊は「自在人」「自在王」と説いている。経釈では「世雄せおう」とも「能忍のうにん」とも、また「仏の十号じゅうごう」ともいわれている。

——「十号」とは……。

池田 「如来にょらい」「応供おうぐ」「正徧知しょうへんち」「明行足みょうぎょうそく」「善逝ぜんぜい」「世間解せけんげ」「無上士むじょうし」「調御丈夫じょうごじょうぶ」「天人てんにん師し」「仏世尊ぶつせそん」です。むずかしいので、一つ一つの意義は、またいつか勉強してください。

(笑)

ともかく、三世を通観つうかんし、万法に通達つうたつする、完成された円満の境地のことと、私は思っています。

屋嘉比 われわれの社会をみても、高度な科学技術の追究は、声聞、縁覚というんでしょ

うか、その進歩の果てが、人間の自由を束縛し、人間を機械化する管理化社会であった。

どちらかといえば、六道輪廻のほうへ追い込まれてきてしまっている。

——高度な社会にみえるが、心身症や躁鬱病の文明病が蔓延化している。まさしく六道輪廻ともとらえられますね。

地獄とはよくいったもので、だんだんと人間自身が、なにか巨大なものから圧迫を受けながら、下へ下へとさがっていく感じがしてならない。

池田　ともあれ、これまでの人類の歴史の結果は、まだまだ六道輪廻の流転を乗り越えてはいないといえる。

「地獄」の「地」とは、最低のものに縛られるという意味です。

ですから、いかなる時代になろうと、この「縛」を切り、人間自身が上昇していくこともっとも基本に考えねば、人間と社会の抜本的蘇生への道はない。

屋嘉比　重大問題です。最近、「人間学」というような、専門化、細分化した学問をもう一回統合し、病める現代社会における人間自身を見つめ直すという、動きが注目されています。

池田　故トインビー博士との対談のさいに、博士がいわれたことを、私は忘れることができない。それは、

「われわれの技術と倫理の格差は、かつてなかったほど大きく開いている。

これは屈辱的であるだけでなく、致命的ともいえるほど危険なことだ。(中略)

尊厳性そんげんせい——それがなければ、われわれの生命は無価値であり、人生もまた幸福になりえない

いその尊厳性——を確立するよう、一層努力しなければならぬ」

と、まことに厳しい表情であつた。

屋嘉比 トインビー博士の見解は、たしかに正しいと思います。博士が、東洋の高等宗教である仏教に、その解決法を求めていったことは有名ですね。

池田 そうなんです。仏法は、この泥沼のごとき社会にあつて、なおかつ仏界という人間生命の最極なる「尊厳性」の可能性を見いだしている。

そこにこの「十界論」という法理の重大な価値があると、私は思っております。

「無顧むこの悪人」にも菩薩の心

池田 そこで大聖人の有名な「開目抄」には、

「一念三千は十界互具じっかいごぐよりことはじまれり」(二八九)

という一節があります。これを、いちおうの理のうえから申しあげます。

瞬間にあらわれる十界のいずれかの生命は、固定するものではない。つぎの瞬間にはまた、十界のいずれかを顕現し、移りゆく。

この生命のダイナミズムを、仏法の直観智ちよつかんちが見事にとらえた法理が「十界互具」であると、私は思います。

屋嘉比 「互具」という概念は、まことにおもしろい。

池田 ですからこの「十界互具」を、もう一步深く論ずるには、いわゆる仏法の「空論」をお話しなければならぬんです。

卑近な例をとれば、同じ人間でありながら、あるときは悲しみ、あるときは喜ぶ。喜んでいるときに悲しみの生命はどこへいったか、ということになります。

「観心本尊抄」に、日蓮大聖人は絶妙なる譬えたとをひかれ、

「無顧むこの悪人も猶なほ妻子を慈愛す菩薩界の一分なり」(二四二)

とあるように、人間が悪を重ねれば地獄である。それであっても妻子を思いやり、幸せになつてほしいと涙する心もある——ひとつの菩薩界である。

悪の地獄界の人間のなかにも、菩薩界が互具している証拠になるわけです。

——そこから、九界すべての「心」の変化、「互具」もわかります。

自分が、いま対談している。声聞界であると思う。しかし、むずかしくなると頭が痛くな

り、いやになる（笑）。ひとつの地獄界になる。あんまりいい譬えではありませんが。（笑）
人の境涯の変化、「互具」はわかりますが、動物なんかはどうなんですか、屋嘉比さん。

屋嘉比 有情の世界ですから、その方程式は大なり小なり同じと思います。先生、いかがでしょうか。

池田 そうです。そのひとつの例として、オーストリアのノーベル賞を受けたローレンツという動物学者は、本能のままに生きている動物にも、ときに、弱い仲間を助けようとするのがある、といっていますね。これなどは、畜生界所具の菩薩界かもしれない（笑）。要するに冥伏しているんです。

——結論としていえば、この「十界互具」の法理は、われわれ人間の平等性と無限の可能性を解き明かしたと、とってよいわけですね。

池田 そうです。ですから、この六道に翻弄ほんろうされている私どもの一念が、正しき日蓮正宗の本尊に南無し、境智冥合きょうちみんごうしゆくことにより、「仏界」という、無限の生命力を発動する。

一般的にみても、小さな一念の变革が、未来への偉大なる人生の变革へつながっているところがある。とともに、社会の变革へと連動していることも、よくみられるとおりです。

屋嘉比 歴史上の变革をみても、わかります。

池田 さらにその一念を、今世こんぜから永遠にわたる「常楽我淨」の固き一念へと、上昇せし

めていくための「信」と「行」とが、どれほど大事であるか、おわかりいただけたかと思ひます。

——すると、今世だけでなく、永遠の自分自身の一念即我を確立するのが「仏界」の意義であり、信仰の目的となるわけですね。

池田　ひとつの次元では、そういいていいでしょう。言葉で表現するのは、ちよつとむづかしいんです。仏界の生命というのは、他の九界のような具体的なものではない。九界を無限の価値の方向へと動かしゆく、本源的な生命の鋭き働きが、仏界という意義なんです。

これを私どもの生活の一次元でいえば、曇天の日がつづいても、雨の日でも、ジェット機が高度一万メートルに達すれば、煌々^{こうこう}と太陽が輝き、安定した飛行ができる。

と同じく、現実の生活が、いかに苦衷^{くちゆう}にあつても、苦難の連続であつても、この胸中の太陽を満々と輝かせていけば、悠々と乗り越えていける。

この太陽を、たとえばいうならば、ひとつの仏界といえるかもしれない。

屋嘉比　まことに、人生への深き示唆に富んだお話と思います。

池田　ただし、ひとつの次元から、「御義口伝^{おんぎくでん}」という甚深^{じんじん}の口伝書に、

「菩薩とは仏果を得る下地なり」(七三八)

とおっしゃっておられる。それは法のため、人のため、社会のために行動することが菩薩

である。その菩薩という行動の土台なくしては仏界は得られない。ゆえに、観念では仏果は得られない。万巻の仏教の書を読んでも得ることはできない。

そこでまた、仏果を得たといっても、なんら姿が変わるものでもない。六道九界の現実社会のなかで、そのままの姿で生きぬいていくわけです。

お化けみたいな、神秘的な悟りとか、仏というものは、真の仏法ではまったくない。

大宇宙のごとき静寂、清浄の世界へ

屋嘉比 「十界論」は宗教の大革命ですね。

キリスト教では、神に近づくことはできるが、神にはなれない、とか……。

池田 人間として大事なことは、低き境涯から、より高き境涯へ……。さらに、狭小な境涯から、無限の広がりきようしやうの境涯へと進み、広がりゆくことが、幸福の根本となると思います。その最極の一点の境涯が、仏界となるわけです。

屋嘉比 まことに論理的であり、なかなか精緻せいちなとらえ方と思います。

——キリスト教の宇宙観は、どうとらえていますか。

池田 よく「地獄」「煉獄れんどく」「天国」といいますね。

ダンテの『神曲』では「九の地獄」「十の天国」となっていたと思います。私は深く研究したわけではありませんが、ダンテは、『東方見聞録』とうほうけんぶんろくで有名なマルコ・ポーロと、同時代だったのではないのでしょうか。

最近、パリ大学のコルムという教授が『幸福と自由』（副題・深淵しんえんなる仏法と現代性）という本をだしています。そのなかでは、キリスト教をはじめ、ヨーロッパの歴史は、かなり仏教の影響を受けているんじゃないか、と載のっていますね。

屋嘉比 なるほど……。仏法では、六道の世界観を説いたものは、なにかありますか。

池田 あります。そのひとつに、

“地獄は地の下一千由旬以下のところにあり、餓鬼は地の下五百由旬のところ、畜生は水陸空に住し、修羅は海のほとり、海の底に住し、人は四大州に住する”

とあります。

結論していえば、これらは生命の境涯なんです。ですから大聖人は、

「抑そもそも地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或は地の下したと申す経文もあり・或は

西方等と申す経も候、しかれども委細にたづね候へば我等が五尺の身の内に候とみへて候」

（「十字御書」一四九一）むしもち

と、この現実世界を離れたものではないと、おっしゃっているんです。

屋嘉比 それは正しい。私は納得できます。

池田 あの悠久ゆうきゆうのガンジスの流れも、見る人の境涯きんいかんによつては、まったく違って見える。これを「法蓮抄」という御文では、

「たとへば餓鬼は恒河ごうがを火と見る・人は水と見・天人は甘露かんろと見る、水は一なれども果報かほうにしたがつて見るところ各別なり」(二〇五〇)

といわれている。

屋嘉比 人間は、その境涯によつて、宇宙観、価値観が変わってくるというのはよくわかります。

すると、地獄は地のはるか下ですから、仏界とは、逆にはるか高い次元、広々とした次元から、すべてを見下ろしていく境涯と、とってもよろしいんですか。

池田 そういえると思います。

少々、飛躍するかもしれませんが、「仏界」を境涯論からみれば、私どもの地球は、大気圏があり、あらゆる生命はぐくが育はぐくまれている。この大気圏の外は静かな無限の世界である。

ですから、この生命が、宇宙全体の仏界という大生命に融合ゆうごう、一体化していった場合、大宇宙のごとき広々とした、静寂にして汚れなき清浄の世界へ、なんらの束縛も不自由さもない次元へはいつていくということが考えられないこともない、と私は思っている。

国土や草木も人間精神と不可分

——「十如是」は、「法華経方便品」ですね。

池田　そうです。「如是」とは読んで字のごとく、万物の「ありのままの姿」ということである。

そこで生命の働き、作用というものは、かならず、「相」(姿・形)、「性」(性分・心の働き)、「体」(根本の体)、「力」(内在する力)、「作」(力が現実に働くこと)、「因」(生命次元の因)、「縁」(因の補助的因)、「果」(生命次元の結果)、「報」(生命次元の因果を因として、それが姿、形にあらわれたもの)という普遍的側面が存在する。

そしてそれらは、すべて「本末究竟等」ほんまつくきょうとうすることを見事にとらえたのが、この「十如是」という法理なんです。

——「本末究竟等」とは、本も末も、つまり、すべて前の九つの側面が一貫し、調和していることですか。

池田　簡単にいえば、そういうことです。そこで御文には、

「此の三如是本として是よりのこりの七つの如はいでて十如とは成りたるなり」(「十

如是事」四一〇）

と説かれています。

ですから、「相」「性」「体」の三如是が生命の実体である。

むずかしくなるかもしれませんが、仏法はこの三如是を基礎として、空・仮・中の「三諦」、法・報・応の「三身」、法身・般若・解脱の「三徳」という、生命の多次元なとらえ方もしています。

ここでは、空・仮・中の「三諦」について、要略を申しあげますと、

生命の外面の相をみるのが、「如是相」であり、仮諦である。

内面の性をみるのが、「如是性」で空諦。

生命の当体そのものをみるのが、「如是体」であり、中諦となります。

その三諦の「諦」とは、「つまびらか」「あきらか」という義で、生命の実体は、この空・

仮・中の三諦からみることにより、はじめて正しく認識できると、仏法は説いています。

屋嘉比 よくわかります。医療の現場でも患者を身体的側面と精神的側面の両方から見ないと真実がつかめません。また、心身医療というように、医学界でも人間の肉体と精神の統一性を志向するのは、時代の流れですから……。

池田 さらに、その生命が、どのように働き、どのように存在しゆくか、それが「力」「作」

三如是

如是相——表面にあらわれた形、姿、振る舞い

如是性——性質、性分、心の働き

如是体——根本の体、生命それ自体の「我」

如是力——内在する力用、潜在能力

如是作——如是力が現実に働くこと

如因——生命それ自体の果をまねく原因

如是縁——因と果の媒介というか補助的因

如是果——因から生じた生命次元の結果

如是報——果が形としてあらわれるもの

六如是

如是本末究竟等——二如はその働きをあらわす六如とは、すべて生命のなかに収まり、統合、調和し、一貫した活動、姿となることをあらわしている

五陰世間

色・受・想・行・識が人によつて異なることをあらわす

衆生世間

人それぞれの生命には十界の差別があることを示す

国土世間

十界の衆生の住処に差別があることを明かす

「因」「縁」等の七如是であり、生命それ自体の活動の基調となる。

仏法中道の眼は、こうとらえていったわけですから。

屋嘉比　なかなか科学性を感じます。すばらしい、多重的な事象のとらえ方と思います。

池田　この「十如是」という側面とともに、十界の「生命」というものは、それが発現しゆくときに、かならず、具体的な個体の肉体や心、またその個体の住む社会や環境のうえにあらわれる。そこにさまざまな区別というものも生ずるはずです。

仏法ではこれを、「五陰世間」「衆生世間」

「国土世間」という「三世間」の法理として、

見事に、その区別というものをとらえています。

屋嘉比　その「三世間」とは……。

池田 「世間」とは、いつさいの個人差や個別性、帰属性をいつています。

ですから「五陰世間」とは、「色」(肉体)、「受」(感受作用)、「想」(思い浮かべる作用)、「行」(意志力)、「識」(認識・識別を起す心の本体)の「五陰」が、人それぞれによって異なることをいいます。

「衆生世間」とは一切衆生というように、いちおう、生きとし生けるものを指すのでしょう。五陰^{けわごう}仮和合された衆生、また、その社会はそれぞれの特質にそった差が生まれる。

屋嘉比 なるほど。なるほど……。元来、仏法は個人の問題と思われ、社会の問題とは切り離して考えられがちでしたね。

池田 そして「国土世間」とは、十界の衆生の住处、すなわち世界のことです。

「教機時国抄」^{きようきときくしやう}という御書には、

「国には寒国・熱国・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国」(四三九)

等々と述べられている。

また衆生によっては砂の中、海の中、山の中、さらに木や紙などに住むものもあるわけですね。

——この「国土世間」というものが説かれ、「一念三千」の法理が完結したとみてよいのですか。

池田 そのとおりです。少々専門的ですが、文相もんそうの理のうえでは法華經の「寿命品」で、はじめてこの「国土世間」が説かれる。

教義的には、釈尊の説法には「藏ぞう」「通つう」「別べつ」「円えん」という段階があり、円教である法華經以前の經教きやうぎやうにおいては、釈尊が現実のこの娑婆世界で説法教化せつぽうきやうけしたことが、明快に説かれていなかったのです。

屋嘉比 非常に現実的で、納得できる經文です。空理空論ではない。

池田 それを仏法上、重要な「三妙合論さんみやうごうろん」といいます。この三妙合論とは「本因妙ほんいんみやう」「本果妙ほんくわみやう」「本国土妙ほんこくどみやう」がともに説き明かされることをいいます。

ひとことではいえば、

「本因妙」とは、仏の境涯を得るための根本の原因、修行、

「本果妙」とは、仏の本体、本地、

「本国土妙」とは、仏の所在の国土、

という意義です。

——すると、仏法は、あくまでも明確なる原因と行動のうえから、また現実のうえから説かれているわけですね。

池田 おっしゃるとおりです。それを結論して、日蓮大聖人の事の一念三千の法門から拝

しますと、

「本因妙」とは、二祖日興^{*}上人、

「本果妙」とは、御本仏日蓮大聖人、

「本国土妙」とは、総じては、大聖人が御生誕なさった日本、さらに世界、

別しては、大御本尊まします多宝富士大日蓮華山大石寺たほうふじ だいにちれんげ ざんたいせきじとなります。

——仏法で説く国土世間には、草木や花なども含まれるんですか。

池田 当然のことです。この娑婆世界、すなわち国土世間には、無数の草木があり、花がある。

そこで有情、非情でいえば、非情となるこの草や花にも、感情が伝わるという研究をした心理学者もいるようです。屋嘉比さん、ご存じですか。

屋嘉比 私は植物のことは、あまり具体的に知らないんです。そこまで手がまわらないんです。(笑)

池田 それはそうですね。(笑)

ソ連のプーシキンという博士が、ゼラニウムの葉に、人間の感情の変化が伝わることを実験で証明された、と発表しています。もう十数年前でしたか『朝日新聞』に載っていましたね。

かつて、民俗学者の柳田国男も「木思石語^{もくしせきご}」といっていました。が、国土世間である森林などが人間に影響をあたえるのは、森林浴^{しんりんよく}にもみられるとおりです。

逆に、人間の感情も草に伝わる、ということになりますね。

屋嘉比 私は専門家でないのでよくわかりませんが、毛虫がついた木が、それを払いのける信号を、他の木にも伝えあい、毛虫を払いのける化学物質をだす、という話も聞いたことがあります。

池田 どうも、人間の心理、視覚、思考、記憶等々の働きは、基本的には、植物の細胞が行う情報活動が特殊化したものである、ということなんですがね。

——他にもなにかありますか。

池田 ソ連農学アカデミーのイシドール・グナールという教授が、植物も記憶力をもつと発表しているようです。また、アメリカで行われている研究では、親切に話しかけられた植物はよく育つ、といったこともわかっているようです。

屋嘉比 ともかく、これは植物の働きの全体像からは、まだ初步の研究でしょうが、人間の精神世界というものが、この地球上の草木などと密接不可分である、という事実が認められたのは、興味深いことです。

池田 ご存じのように、地球上の私どもの身体も、宇宙に遍満するいくつかの基本元素か

ら成立している。

たいへん飛躍的な展開ですが、ですからこれらの事実の検証が、「一念三千」という仏法の難解な奥義をわかりやすくしている、ということはいってもよいと思います。

ともかく、宇宙の森羅三千が、すべてこの「一念」に収まるというのが、「一念三千」「総在一念」という法理なんです。

屋嘉比 するとユングなどのいう、宇宙大に達する人間の深層心理という志向性も、仏法の法理からみれば、より明快になりますね。

脳の優劣は後天的努力できまる

——ご存じでしょうが、近ごろは、子供向けのテレビ番組や週刊誌にまで、「脳の話」がよく取り上げられています。

池田 そうですか。ちよつと私は時代遅れかな……（笑）。屋嘉比さん、知っていますか。屋嘉比 多少、知っています。最近の子供たちは、なかなか知識がありますね。

——それで、自分の成績が上がらない理由を、「私は生まれつき頭がわるいから」とか、「親が親なもんで」と、学校の先生に、はつきりいう子供が増えているそうです。（笑）

池田 はあ、どうなんですか。頭のよしあしは、脳で決定的にきまるもんですか。どうですか、屋嘉比さん。

それに脳の優劣は、先天的にきまるものではないと聞いていますが。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 じゃ、どういうふうにとらえたらいいんですか。

屋嘉比 脳の働きは、後天的努力や学習によってつくられるもののほうがずっと大きいことは、はっきりしています。

生まれながらの差が、多少あったとしても、人生にとっては、なんの影響もありません。ですから、「頭がわるい」というのは、たいがい勉強ぎらいの言いわけですね。（笑）

池田 いや、そうでしょう。ともに、幸福とか不幸ということも同じになってくるでしょう。

昔は、中学校や高校に行けなかった人でも、実社会のなかで、人生の機微きびや、独特の知恵を働かして成功している人が多くいた。

また「物知りおじさん、おばさん」と信頼されて、肩書きや社会的地位がなくとも、尊敬される人もいる。

——よくいますね。私の子供のころなんかにも、よくそういう人に出会ったもんです。

池田 私は、人間にとってそういう姿は、まことに尊いと思っています。

屋嘉比 私のふるさとである沖縄にもいましたね。

池田 いわゆる天才といわれる人も、たしかに人一倍の努力を重ねて、はじめてすぐれた業績を残していることを、見逃してはならない。

屋嘉比 脳の生まれつきの違いは、むしろ個性というか、その人の特性になりますね。

池田 そうでしょう。十人十色ですから、適材が適所を得ると、見事な創造力の発揮にながっていくことも、多くの例をみて、事実のように思いますが。

——先生は、性格をどうとらえますか。

池田 人の性格ということをもっとも広く深い意味でとらえれば、傾向性であり、そう簡単には変わらない。仏法からみてもそのような気がします。

ただ、川の幅というものは、変わらない。しかし流れが強まれば、濁った水も、それを清浄なものとすることはできる。同じように、自分自身の生命を浄化していくならば、その性格も価値ある方向へ発揮できると思います。

屋嘉比 そうです。私もそう思います。そこで「脳」は、現代の神経科学でも、最初にくられた機能を土台にしながら、つぎつぎに新しい機能がつくられていくことが発見されています。

池田　ですから、「性格論」だけで宿命的にとらえるのは、どうかと思いますが……。

鍛えるほど活発化する神経細胞

——すると先生、脳の大きさや重さは、頭のよしあしに関係ないんですか。(笑)

池田　統計的にはあるようですが、私は、個々にはあてはまらない、と思います。屋嘉比さん、どうでしょうか。

いつでもしたか、脳の重さを測ることのできた天才たちのデータが、どこかに紹介されていた。重い人、軽い人、千差万別でしたね。

屋嘉比　私も見たことがあります。ノーベル賞をうけた文豪でも、一千グラムぐらいの人がいまして、日本人の場合は、平均一千三百グラムぐらいですから、それよりだいぶ軽い。

(笑)

池田　すると脳の重さも、体格や体重に比例するものかもしれませんね。どうでしょう。

屋嘉比　頭の下に首があって、身体がそれを支えるんですから、普通はそうです。

ただ、人間以外の動物の例ですと、クジラは二千五百グラム、象は五千グラムです。

身体全体の体重からすると、クジラは〇・〇〇三パーセント、象は〇・二パーセントにな

ります。ですから、体重のなかで、脳のウェイトが増えたからといって、かならずしも知能が上昇するとは限らないようです。

——頭は、使えば使うほどよくなるというのは事実ですか。（笑）

池田 これは屋嘉比さんの分野ですが（笑）、人体の各器官は、すべて使うことによって発達し、使わなければ退化する。どうですか、屋嘉比さん。

屋嘉比 先生のおっしゃるとおりですね。前の章でも話題になりましたが、脳は灰白色で表面は深いシワを形成し、約百四十億ともいわれる神経細胞が、ぎっしり詰まっています。

池田 その神経細胞の数は、胎児期に、もはや全部そろっているんですね。

屋嘉比 そうです。生後、脳が発達するのは、その神経細胞が突起を延ばし、他の神経細胞とシナプスをつくっていくのが、主な原因です。

池田 では「記憶力」には、神経細胞間の「シナプス」が関係するとみてよいのですか。

屋嘉比 ええ、シナプスが発達し、その数が増えると、神経細胞間の連絡網が緻密となり、より多くの神経回路のパターンが生まれ、さらに高度な情報伝達が可能となるのです。

池田 すると頭をどんどん使い、このピストンのように立ち並んでいるシナプスを、繰り返しかえし、繰り返しかえし動かしていくと、そのシナプスは頭を使った分だけ増えると思っていいいんですね。

屋嘉比 そのようです。逆に学習をやめたとたん減るそうです。そのことを、アメリカのロックフェラー大学のノッテボーム博士が、カナリアを使って実験証明しています。

「歌を忘れたカナリア」と、歌にもありますが、カナリアの雄は、春、さえずりますが、秋になるとさえずりをやめます。そのさえずりの練習を始めたときと、やめたときのシナプスを比較したら、春のほうが多かったそうです。

池田 それはおもしろい実験ですね。まあ、人間の脳とカナリアの脳とは、ずいぶん違うと思うが（笑）、だがひとつの方程式は考えられる。

本を読むと、この神経細胞と神経細胞をつなぐ「シナプス」とは、発動機のピストンのように並んでいて、それが刺激によってお互いが震動し、つぎつぎに回路が発生し、また変化する、あらゆる伝達の役目をすばやく正確に行うもので、無限に広がりゆくものと、書いてありますが、どうなんですか。

屋嘉比 そうなんです。神経回路網を広げていくには、シナプスを発達させていくことが必要です。それが機能どおりスムーズに働けば、「頭がいい」ということになります。

池田 やはり、われわれもしょっちゅう本を読まなくてはダメだ。（笑）

頭を使うことはもちろん必要である。また、どんどん歩いたり、指先を使う運動も、やったほうがいいことになりますか。

屋嘉比 そうなんです。

池田 弱ったね、なかなか歩けないし、クルマを買わなくちゃいけないな。(笑)

手先を使うと、神経細胞が発達するという実験はあるんですか。またその根拠はあるんですか。

屋嘉比 とくに人間は、完全直立で手を器用に動かし、道具を使おうと努力したことから、大腦を活発化させ、その結果として言語能力をたかめたともいわれています。

池田 するとある機能が発達すると、他の機能もおのずから発達する。互いに相乗関係になって、全体的に発達していくと考えていいんですか。

屋嘉比 そのとおりです。

——すると、屋嘉比さん、老人が寝こむと、めっきり老けこんだり、また定年退職になったサラリーマンが、極端に白髪になったり、若さを失う人がいるのも、そうした理由もあるんですか。

屋嘉比 あると思います。また、子供のころ、大豆、昆布などの硬いものを食べさせるといいといわれるのは、歯のためもありますが、同時に脳の刺激にもなるようです。

——すると、常に動き、考え、しっかり食べることが、頭をよくするリズムでしょうか。

池田 まあ、一理は考えられるし納得できますね。

屋嘉比 そのとおりです。

頭がいいというのは、神経回路が活発かつスムーズに進むことですから。

池田 要するに、そうしますと「人間」というものは、自分自身を大切にしてい、いたわることも大事であろうが、それ以上に、多忙であつても目的観をもち、前へ前へと進んで鍛え^{きた}あげることが、もっと大切になるわけですね。

屋嘉比 まったく理にかなった指摘です。生涯、いくつになつても、人生に価値を見いだしていくことが、大事になるんじゃないでしょうか。

——ところで、ちょっと話を変えますが、いちじ知能指数(IQ)がどうのと、ずいぶん騒がれたこともありましたが。

屋嘉比 それも、まったく変わらないというのは、誤解です。

池田 まあ、私もそう思います。知能指数も、だんだん変化していくと考えたほうが正しいと思う。

その根本は、ま、その個人の努力いかに大切となる。さらに、教育によつても変わっていくでしょうし、時代の進歩と文化レベルが上昇していくにつれて、向上していく場合もあるでしょう。

屋嘉比 それは現在の医学ではっきりと示されていますね。

興味深い「脳と心」の研究

池田　ところで屋嘉比さん、人間の記憶力というものはたいへんなもので、脳生理学者の千葉康則博士が、「無意識のうちにも人間七十年間に記憶できる事柄は、十五兆にも達する」と述べているのを読んだことがある。この点は、どうでしょうか。

屋嘉比　そのようです。

池田　仏法には、

「一人一日の中に八億四千念あり念念の中に作す」(「女人成仏抄」四七二)
とあるんです。数学好きの人がいて、これを七十年に換算したら、約二十一兆になった、
というんです。

ま、「八億四千」というのは膨大な数量という意義と思います。

屋嘉比　いや、おもしろいですね。現代の精神医学の研究書にも、はつきり千葉博士などの見解が示されています。

池田　そうですか。

ところで、第五章でも少々論じたペンフィールド博士の「脳と心」の関係についての研究

は、なかなか興味深い。屋嘉比さん、他にも何かありますか。

屋嘉比 博士は、人間の過去の記憶が、脳のなかでどのようなになっているのかも調べたんです。

私たちの頭の、このわきのほうに「側頭葉」そくとうようというところがあるんです。

ここを電気で刺激すると、患者は、過去にみた光景が目の前に浮かんで、そのときの思いも再現し、それを体験しているような気持ちになる、というんです。

池田 すると、要するに過去の自分が体験した、すべての記憶が蓄えられていると思っていいんですか。

屋嘉比 そのとおりです。

池田 この「側頭葉」というのは、どこにあって、どのくらいの大きさなんですか。

屋嘉比 耳の上あたりに広がっています。大きさも、手の平より少し小さなていどです。

池田 すると、なにかの印とか、なにかの色がついているわけでもないんですね。(笑)
しかし、そこからいっさいの長い過去からの記憶が現出してくる、というわけですね。

屋嘉比 博士は、患者の脳のわきを、いま申しあげたように電気で刺激していくと、たとえば目の前に、「かつてケンカしたことのある人」「子供のころの彼女」「泥棒」など……、つぎつぎにあらわれてきたというんです。

池田 ウソ発見器ではなく、「記憶発見器」になるわけですね。(笑)

屋嘉比 そうなるかもしれません。(笑)

池田 この博士の研究は、世界の学者が認めているんですか。

屋嘉比 多くの研究者によって認められています。

池田 私にとっては、うれしい情報です。私は、人間の生命の核たる「我」には、人類発生、否、^い生命発生以来にわたる、まあ端的に言えば三十数億年の記憶が収まっているのではないか、とみたいひとりなんです。

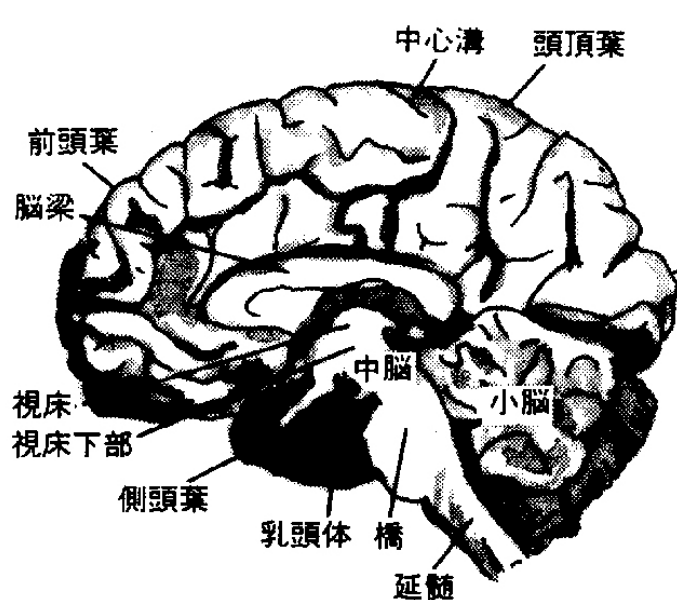
ともかく、過去の記憶といっても、ふだんはどこにあるのか、まったくわからない。

ところが、なんらかの刺激という「縁」によって、あらわれてくる。それを、仏法では「^{みようぶく}冥伏」といつている。

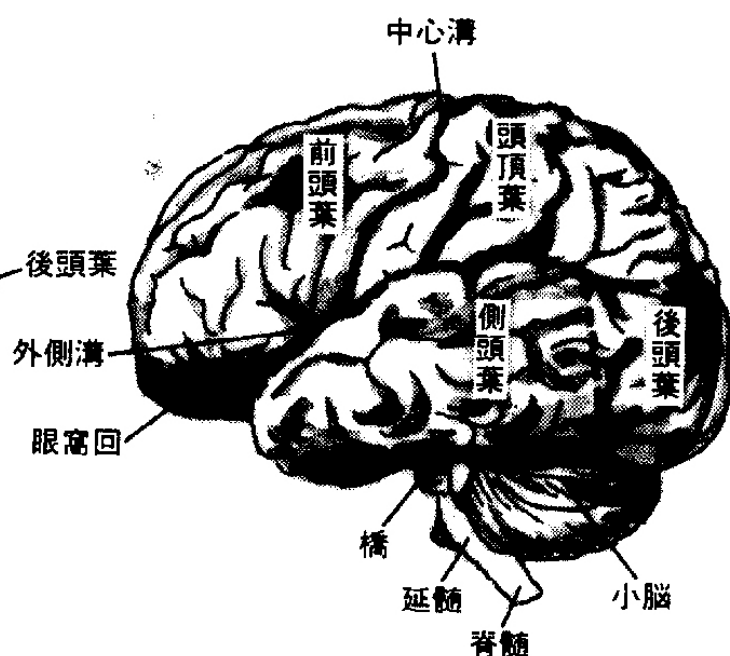
この仏法で説く「冥伏」の「冥」とは、簡単にいえば事物に溶け込んで見えないさま。そして「伏」は、隠す、隠れるの意義です。

屋嘉比 いいえて妙なる^{みよう}表現ですね。

池田 ですから、脳科学でいう感情、つまり喜びとか、怒りとか、哀しみとか、楽しみとかの働きが、脳のどこに関連するのかを解明していくことも、仏法者としても重大課題なんです。



脳の縦断内側面



左大脳半球の外側面

屋嘉比 人間の目のうしろあたりに「視床下部」^ぶというのがありません。

これも脳の一部ですが、ここにも情動^{じようどう}をつかさどる中枢^{ちゆうしゆ}があるようです。

池田 どうしてわかったのですか。

屋嘉比 それはネコの大脳を取りはずし、この視床下部に電気ショックをあたえてみたんです。そこに電気で刺激を加えると、ネコが怒りだし、そばにいたネズミに襲いかかった。

池田 すると、この実験で明らかになったのは、視床下部の働きをうながすようなキツカケがあると、怒りという感情が、実際に出てくる。そういうことですね。

屋嘉比 ええ、視床下部や大脳辺縁系は情動の中核であり、そこに怒りとか恐れ^{おそれ}の心が関係しているようです。それでいて、心とか精神は

いったい何か、となると実体がない。

池田 要するに「心」や「精神」の働きは、大腦細胞という物質場に即して発現する、とみればよいのではないでしょうか。

仏法の「色心不二」の法理は「心」と「脳」を相即そうそくの関係とみるんです。

——人間の脳も心も絶妙ですね。

屋嘉比 いつでしたか、池田先生が、

「生命ほど不可思議なものはない。人体を機械に見たてようとする人もいるが、かりに機械として見たとしても、これほど見事な機械は、あらゆる科学をもつてしてもつukれない。しかも、機械は他者の作品である。この生命という機械は、それ自体が作者であり、作品である」といわれたことを思い出します。

日本人は右脳型、西欧人は左脳型

——「右脳ブーム」ですね。大腦は左右に分かれていて、それぞれ役目が違うそうですが。

屋嘉比 右脳は右半球とよび、感性とか、直観とか、イメージに深く関係しているようです。また、左脳は左半球で、論理、計算、言語の機能と関係しています。

両半球は、「脳梁」^{のうりょう}という渡り廊下でつながっているんです。

池田 その働きの違いは、アメリカの脳医学者スペリー博士が解明したそうですね。

屋嘉比 ええ、博士はノーベル賞をもらっています。

——その後、「右脳ブーム」とか「右脳革命」といわれ、まだ話題がつづいていますが、この点はどうなんですか。

池田 まあ、簡単にいうと、左脳は、ものごとを^{しやくしじようど}杓子定規にみる。

それに対して、右脳は、事の成りゆきの底流にあるものをみる。突然のひらめき、ずばり、頭に浮かぶ直観のような働きになる。だから、右脳をもっと開発しろ、ということですね。

屋嘉比 つまり、創造性とか情緒とか、いわば、現代が等しく求めている人間的な価値は、右脳にある。だからもっと活発化すればいい、そんな議論とみていますが……。

——日本文化は絵画的でイメージにあふれている。つまり右脳文化。

一方、論理の文化である西洋は、左脳的という人もいますね。

池田 早くいえば、右脳型は日本人、左脳型は西欧人という特色は、ほぼ間違いないと思います。

そういうことから、なかなか東西の文化交流は、志向性の隔り^{へだた}が大きすぎるわけだ。

——だからといって、右脳型をすぐに左脳型に変えたりできないでしょう。

また左脳型を右脳型に変えることもできない。長い間の傾向性ですから。

東西の一体感というのは、たいへんむずかしいことがあるでしょう。

屋嘉比 大脳の左半球と右半球の真ん中を仕切り、両者をつなぐ役割をするのが「脳梁」なんです、この「脳梁」には、約二億本もの神経線維せんいがあるといわれています。

池田 左右の脳の働きを統合しかつたつじ闊達自在な頭脳の働きにしていくには、たいへん飛躍した論理かもしれませんが、仏法に「融通無礙ゆうずうむげ」とあるように、また「中道一実ちゅうどういちじつ」とあるように、「妙法」という「縁」をあたえることが、またその「力用りきゆう」「働き」をあたえることが、大事になってくるような気がします。

ですから私は、左脳、右脳両者の働きを止揚しやうしながら、地球人一体への英知を志向していくこともできると思います。

屋嘉比 いや、それは、すばらしい話です。

両者の発達こそ、調和ある人類進歩への道だと思います。

第七章

生命の法理「蓮華」

古代インドの蓮華観

——この章では、ぜひとも「蓮華」について論じていただきたいと思います。

そこで「蓮華の法」、すなわち「因果俱時の法」が仏法の根本課題となるようですが、その前に、蓮華の「花」について、まず、お話をつづけていただければと思いますが。

池田 わかりました。仏法では経釈に、

「易解の蓮華を以て難解の蓮華に喩う」

とあるごとく、「難解」の「法蓮華」に対し、その譬えとしての一般的な草花の蓮華を、「譬喩蓮華」ともとらえております。

屋嘉比 最初にうかがいたいのは、何年ぐらい前から蓮華があったか……。

池田 発見されているもっとも古い化石は、白亜紀で、ま、一億数千万年ぐらい前のものようです。

屋嘉比 古いもんですね。どのへんから出土したんですか。

池田 よくわかりませんが、欧州かカナダあたりのようです。

日本においては、北海道で白亜紀後期のものがあったと、読んだことがある。

さらに京都方面でも、一万年ないし二万年前のものが見つかったということも、記されているようです。しかもこれは、現在のハスと同種類ということなんですがね。

屋嘉比 はあ、仏教発祥の地・インドではどうですか。

池田 私は専門家ではないんで、多少違ってもご了承願いたいんですが。(笑)

インドス文明(紀元前三〇〇〇年から一五〇〇年)の有名なモヘンジョダロ遺跡のなかに大浴場があつて、これがプシュカラ、日本語では「蓮池」と呼ばれていたようです。そこで発掘された母神像が、頭にハスの花飾りをつけていたということは、よく知られております。

——それは、アメリカのボストン美術館に展示されているようですよ。

池田 そう聞いています。

当時は、大浴場といつても、人々の齋戒沐浴さいかいもくよくの神聖な場であつたんでしょう。

——さきごろ、名誉会長は、インドの著名な思想家であるカラン・シン博士と会談されたようですが……。

池田 三度目の会談をしました。ご夫妻とも、よく存じあげています。今回の来日の目的は、京都の国際会議に出席するためだったようで、お互いに忙しくて神戸で会いました。

——蓮華の花についても、いろいろ、語り合われたようですが。

池田 私は、インド全域にハスの花があると思っていたんですが、博士は、「そうではな

い」と答えていた。釈尊が活動したひとつの領域である、ネパールを含むヒマラヤ山脈のあたりにはしかない、という話で、たいへん驚いたんです。

屋嘉比 仏教国であった古代インドには、どここの地方にも、ハスの花が咲いていたと思っ
てましたが、そうではなかったんですかね。

池田 それで博士は、インドにおけるハスについての意義を、六種類に分けていわれていた。徹底して「法」を中心とする仏法からみると、若干、私にはわかりにくい点がありましたが……。

一つには、「生産」「繁栄」「長生き」という意義がある。

二つには、蓮華から「梵^{＊ぼん}」、宇宙の創造者が生まれる。

三つには、哲学、思想的な意味となるが、蓮華の花は泥のなかから生じる。美しくないものでも、美しいものを生むことができる。

四つには、蓮華は水のなかにあって、つねに乾いている。これは人生のさまざまな輪廻^{りんね}に、影響されないことをあらわす。

五つには、サンスクリット語の誉め言葉として、女性の美しい眼を、蓮華のような目という。
六つには、蓮華の花は夜にはしぼむ、朝、太陽を迎えて咲く。

これは神聖にして崇高な思想に、人の心は開くということをあらわす、と書いていました。

屋嘉比 日本人からみた蓮華観と、インドという国土に根ざした考え方とは、とらえ方に相違があつたとしても、なんら不思議はないと思います。

池田 私もそう思います。インド最古の宗教文献といわれる『リグ・ヴェーダ』には、すでに蓮華のことがでておりますし、博士のいう蓮華の広範にわたるとらえ方も、古代インドの蓮華観にもとづいたものといつてよいでしょう。

世界的にも尊ばれた蓮華の花

屋嘉比 中国はどうでしょうか。

池田 昔から、黄河こうがの流域には、数多く蓮華が繁茂しておつたようです。

ですから、『詩経』しきやうにも、約三千年ほど前の、蓮華を尊ぶ詩がみられる。

また、宋の周茂叔しゅうもうしゆくの名文「愛蓮の説」のなかにもみられるように、古来、その高貴にして崇高な花の姿から、「君子くんしの花」といわれてきたのはご存じのとおりです。

——それは有名です。

池田 ですから、ハスの実みを人にあたえるのは、「君子の交わり」を意味しています。

さらに中国では長く、ハスはめでたい花として慶事に用いられたり、婚儀の用具に絵が使

われている、ということですね。

——すばらしい女性を「芙蓉ふようの人」といいますが、中国では芙蓉とは、これまた蓮華の花のことをいっていたようですね。

屋嘉比 インド、中国以外ではどうですか。

池田 詳しく調べたわけではありませんが、歴史的にみても、世界の文明発祥の地では、昔から、人々が蓮華を尊重したという記録が残っているようです。

屋嘉比 やはり、なにか素朴な、宗教的なものがあっただけでしょうか。

池田 そのようです。そのひとつの例として、エジプトでは、ピラミッドのなかから、壁画やパピルスに記された、蓮華の象形文字しやうけいもんじが、数多く発見されている。

そのなかには、蓮華を、無量の寿命をあたえる神の象徴としていくぐりもあると、なかで読んだ記憶がありますが。

屋嘉比 ほかに、なにかありますか。

池田 いろいろあるようですが、エジプト文明では、「蓮花柱頭れんげちゆうとう」という蓮華をのせた柱が、神殿遺跡から発見されているのは有名ですね。

また、建築、美術などにも、ロータス（睡蓮）が描かれている。

朝日とともに、母なるナイルに群れなすロータスが、いっせいに花開く。

古代エジプト人には、その神秘的な姿を、生命の“再生の象徴”とみる思考性が、深く根づいていたのではないでしょうか。

屋嘉比 昔の人々は、電気やコンピュータはなかったが（笑）、草花などの自然に対する鋭く豊かな情感が、私には伝わってくるようです。

——この古代エジプト文明は、つまりギリシャ文明へと受け継がれてくる。

池田 そうですね。その影響でしょうか、古代ギリシャのオリュンポスの神殿などでも、唐草模様^{からくさ}に蓮華を配した文様が飾られていますね。

——アレキサンダー大王のインド遠征を端緒^{たんしよ}として、仏教文化とギリシャ文明が融合し、有名なガンダーラ美術が成立したことは、歴史的事実です。

池田 そのとおりです。このガンダーラ美術が、シルクロードを通り、中国大陆、朝鮮半島を経由して、日本の飛鳥^{あすか}、白鳳^{はくほう}、天平文化^{てんぴやう}の開花となったわけです。

ガンダーラの美術にも、中国にも、当時の日本の美術にも、「蓮華文^{れんげもん}」が数多く見られるのはよく知られている。

二、三年前でしたか、中国の敦煌研究所^{とんこう}から莫高窟^{ぼくこうくつ}の天井の模写絵をいただいた。そこにも「蓮華模様」が出ていて、私はたいへん興味深く見ました。

——アレキサンダーのインド遠征から少したった時代の、ギリシャの「王」と「仏教者」

の対話である有名な「ミリンダ王の問い」*にも、蓮華が登場していますが。

池田 この対話では、「蓮華」が「法」の偉大さを譬えるものとして論じられている。

この仏僧ナーガ・セーナとの対話をとおり、ギリシャのミリンダ王が仏教に帰依したのは、歴史上よく知られておりますね。

屋嘉比 日本では、なにか文献はありますか。

池田 よくわからないんですが、蓮華の花が開いた模様を上から見たのを、「蓮華文」といいます。これがひじょうに似ていることから、「菊花紋」に影響を与えたのではないかと論じる考古学者もいます。

文献的には『古事記』や『万葉集』などにも、蓮華を称えたものが数多くみられます。また清少納言の『枕草子』のなかで、「蓮はよろずの草よりもすぐれてめでたし」とあるのは、よく知られた言葉です。

——奈良時代の『風土記』などにも出てくるようですが。

池田 そうそう。江戸時代の、漢詩や庶民の俳句にも、多くみられますね。

屋嘉比 たとえば、どんなものがありますか。

池田 そうですね。俳句でいえば、

「ひとりきく 時や蓮の 開く音」

これは大江丸という人の作で、文化年間ではないでしょうか。

屋嘉比 まだありますか。

池田 「法の庭」音も開くや 蓮の花」

魚楽という人の、宝暦年間作というのがあります。

また有名な蕪村にも、天明年間作の、

「飛石も 三ツ四ツ蓮の うき葉哉」

というのがありますね。

——正岡子規にも、

「朝風や ぱくりく」と 蓮開く」

というのがありますよ。

屋嘉比 たしかにわれわれ日本人にも、桜や梅などとはひと味違って、蓮華は清浄なる花、法の花というイメージがあります。

同じように蓮華は、各国共通に、なにかしら尊び、慈しまれてきた花であつたわけですね。

池田 そう思います。

——すると、世界の国々のなかで、ハスの花が多いところは、どの辺ですか。

いや、そのまえに、どういう種類の花があるんですか。

池田 ハスには、東洋産種とアメリカ産種の二種類がある、といわれてきているようです。そこで、東洋産種は、白と赤（淡紅色）の花の色をもっています。また、まれに青の花色をもったものもあるようです。

その分布は、事典などによると、オーストラリア北部、インドネシア、インド、パキスタン、イラン（カスピ海南岸）、トルキスタン、中国、台湾、日本のようです。

屋嘉比 アメリカ産種は……。

池田 黄色い花をしていて、アメリカ大陸のミシシッピ川流域とか、赤道付近などに分布している、とでています。

屋嘉比 すると、世界全体というわけではないんですね。

池田 どうもそのようです。ただ、テレビで、ソ連の大きい沼にハスが**絢爛**と咲いているのを見たことがあります。定かではありませんが、私は、こんにちではまだ広がっている気がします。

また、化石はヨーロッパ、カナダ方面などから出土した記録もありますから、世界的な広がりが、いちじはあったような気がするんです。

私は専門家でないんで、これはなんともいえません。

少年時代のハスの思い出

——ハスの研究で有名なのは、やはり大賀一郎博士ですが、博士は、明治十六年の生まれで、八十一歳という長寿の方でした。

屋嘉比 大賀博士が、ハスの研究に夢中になったのは、なにが動機だったんでしょうか。

池田 よくわかりませんが、ただ一般的にいわれるのは、東京帝大の学生だったころ、担当教授からハスについて研究してみてはどうか、といわれたのがキツカケだったと、読んだことがあります。そのときは、アサガオについての卒業論文に取り組んでいたようです。

屋嘉比 どの出身の方ですか。以前から、ハスに興味があったんでしょうかね。

池田 そう思います。郷里は岡山で、なにか、小学校に通っているころ、城の大きな外堀一面に、白蓮華が咲いていた。そこにまじって、紅蓮華が咲いているのを見て、心を魅^ひかれた、というくだりを読んだことがあります。

——そういえば、フランス印象派のモネは、十九世紀を代表する画家として、あまりにも有名ですが、彼の晩年の傑作に、「睡蓮^{すいれん}」の絵がありますね。

池田 有名な絵です。

一点は、もう十数年前でしたか、倉敷の大原美術館で見て感動しました。

屋嘉比 たしか、先生がその絵について、フランス・アカデミーの会員のルネ・ユイグ氏と意見を交^{かわ}された本を読んだことがあります……。

——対談集『闇は暁を求めて』のなかに載っていたと思います。

池田 ユイグ氏とは、日本でもフランスでも何回となくお会いしています。現代フランス



倉敷・大原美術館にて。(昭和46年)

屈指の美術史家です。

氏の話では、モネの家には、セーヌ川の支流が流れていたそうです。その川を利用し、モネは小さな池をつくり、そこにいっぱい睡蓮を植えた。また、池には橋がかかっていて、それがひと目で、日本の庭園をモデルにしたとわかるものだったようです。

——美しい話ですね。

池田 ユイグ氏の表現をお借りすれば（笑）、晩年のモネは、その水辺にかがみこみ、睡蓮が一面に浮かぶ水の表面が空であるかのように見えるまで、すべてが一つになる瞬間まで、鏡のような水面をじっと凝視^{ぎょうし}しつづけた、ということです。

——優れた芸術家の、とぎすまされた感性が、睡蓮をとおし、見事な「美」の結晶を描きあげたともいえますね。

池田 そうなんでしょう。ユイグ氏は、このモネの一枚の絵が、東洋のもっとも伝統的な絵画にみられる世界観と、見事に一つに結びつく、ともいっておいしました。

つまり、「文化や文明によってつくられた相違点の背後に、一つの基体が見いだされ、その深層部のなかに同一性がみとめられるのは当然のことです」と、ユイグ氏は力説している。この話は、私は仏法者として、ことさら印象的であった……。

屋嘉比 先生とハスの花との出会いはありますか。（笑）

池田 いや、私のは平凡なもので、あまりすばらしい出会いなんかありませんが（笑）、ただ、少年時代に、強烈に印象に残っていることがあります。

屋嘉比 おいくつぐらいのときですか。

池田 小学校五年のときです。当時は日中戦争がぼつ発し、昔流でいえば、蒲田区^{かまた}糀谷^{こうじや}三丁目に長く住んでいた私の一家は、その家を軍需工場に売却し、糀谷二丁目に移りました。

その家も、やがて強制疎開させられました……、その家の隣に、ハスの池があったんです。その池に数百本は優にあっただしょう。ハスの花が見事に開いたときの光景は、一生涯、私の脳裏から消えないでしょう。それからというものの、毎年咲くのが待ち遠しかった。

その土地も、やがて、時代の流れでしょう。新しい家屋が建って、そのときは本当に寂しかった。

——蒲田という名称は、昔は多摩川の下流で、「蒲^{がま}の穂^ほ」が繁茂していた湿地帯であったことに、由来していたようですが。

池田 そのとおりです。いまの信濃町に越してくるまえ、十数年間住んでいた、大田区小林町の家の近くに、池上線の蓮沼^{はすぬま}という駅があります。

ここらへんも、太古に多摩川の水路が通り、ハスが浮かぶ沼地であったようです。

昭和十年ごろまで、その面影が残っていたと、近くに長く住んでいる義母がいていたこ

とがありますが、私が住んだころは、もう池も沼もありませんでしたね。

——ハスの花は咲くときに、「ポン」という音がすると、よくいいますが。

池田 私も子供心に、音がするかどうか、朝早く起きて聞こうとしたが、聞くことはできなかった。ですから「ポン」というかどうか、私はわからない。

ただ想像するに、あの見事な花ビラをもつ蓮華の花が、瞬間、開くときに「ポン」という音がする感じは、ないとはいえませんかね。

そこで大賀博士の、ある実験の記録に、ハスが開花するとき、「カッカッ」「トットツ」「コッコツ」という、花卉のかすかな摩擦音を断続的に捕捉ほそくしたと書いてあった。

俗にいう「ポン」という音ではなかったようですね。

——そこで、一本の茎で、いくつぐらいの花と実みがなるんですか。

池田 これは、いわゆる一茎に一花となるわけです。

屋嘉比 どんな、どれぐらいの大きさですか。

池田 直径十センチから二十五センチぐらいの花といわれていますが。また双頭蓮そうとうれん、多頭蓮たとうれんといった、一つの茎から二つの花をつけたり、多くの花をつけるものもあります。

これらは妙蓮みょうれんともいわれ、古来からとくに尊重されてきているようです。

屋嘉比 実の数はどうですか。

池田 文献には、花托かたくの穴は多数あつて、一花について二十個から三十五個ぐらいの果実がとれるといわれています。私も、ハスの実をとった思い出がありますが、そう記憶しています。

——いつごろ、花がいちばん開くんですか。

池田 多少の違いはあると思いますが、わが国では、六月中旬から九月中旬ごろではないでしょうか。また開花期間は、だいたい四日間ではないかといわれています。

屋嘉比 すると、朝方、何時ごろ咲くんですか。

池田 定説的にいわれるのは、朝日をうけて開き、午後三時ごろまでには閉じる。三日目まで花の生長があるが、四日目の午後には散ってしまふ、というふうに記憶しています。

「千葉」という地名の由来

——蓮華にちなんだ地名も多いですね。

池田 そのようです。ちよつと調べてもらったのですが、蓮沼以外にも蓮根はすね（板橋）、蓮田はすだ（埼玉、北九州）、蓮台野れんだいの（京都）、蓮太郎温泉はすたろうおんせん（宮崎）、蓮池はすいけ（佐賀）、蓮見はすみ（鳥取）、蓮原はすはら（鳥取）、蓮華山れんげさん（山口）、蓮はちす（三重）、大蓮おおはす（大阪）、蓮川はすかわ（三重）、蓮華温泉れんげおんせん（新潟）等々、

いろいろありますね。まだこれ以外にもあるかもしれません。

屋嘉比 よく調べられましたね。みな、ハスがあっただけでしょう。

——千葉県ちばの「千葉せんやう」という名称の由来も諸説あるようですが、「千葉せんやうの蓮華」からきているという説が、有力のようですが。

屋嘉比 「千葉せんやう」というのは、私は草木の葉が繁茂したさまを形容したものだと思ってました……。

——それもありますが、千葉という土地柄もご承知のとおり、検見川けみがわ遺跡から、大賀ハスの種が発掘されたり、古代から、ハスの多いところだったようです。

これは、前の対談の司会者であつた志村さんが調べたんですが、古書（「甲寅紀行こういんきこう」）には、「千葉」という名称の由来が、「此地は千葉せんやうの蓮花生出」という伝説による、とあるそうです。

また別の古文書（「妙見実録千集記みょうけんじつろくせんしゅうき」）には、

「池田の池とて清浄の池あり。此の池に蓮の花千葉せんやうに咲けり」

とも記されています。本当かどうか、私も見せてもらいました。（笑）

池田 それは知らなかった。（笑）

——これも志村さんの調べですが、池田先生の本家は、大森の前は、千葉県の、昔の池田

郷あたりに土着していたのではないかと、文献を調査したある新聞記者がいつていたのとです。

池田 いや、そんなことも聞いたことがあるが、私にはよくわからないんですよ。（笑）

——そこで『千葉市史』のなかでは、「千葉」の名称は、この「千葉の蓮華」からきているという説を、第一番目にあげています。

いまの千葉県庁舎は、取材によると、この池の跡に建てられた、ということです。

屋嘉比 なんでも調べてみるもんですね。（笑）

——ともかく「千葉の蓮華」という名称の由来は、日蓮大聖人御生誕の地「千葉県」ということとあいまって、なにか不思議な一致がありますね。

池田 私どもの信奉する日蓮正宗の総本山大石寺がある富士山も、正式の名称は「大日蓮華山」といいます。古文書には「形、蓮華に似たり。絶頂に八葉あり」とあり、古詩にも

「嶺は八葉に分れて雪華重なる」とあります。

屋嘉比 なるほど不思議ですね。「千葉の蓮華」について、仏法では何かありますか。

池田 いくつかありますが、法華経の「提婆達多品第十二」に、

「千葉の蓮華の、大いさ車輪の如くなる」

とあります。この大きな車輪のごとき「千葉の蓮華」とは、簡単にいえば、廣大無辺な仏

の悟りの境界、世界をあらわしていると、私はとっております。

屋嘉比　なるほど、やはり仏法では、深い次元からのとらえ方へと、はいつていくわけですね。

池田　ともあれ、いままで話し合ったように、どこの国でも、いずこのいずれの時代でも、蓮華を珍重していたことだけは事実のようです。

——他の花は、国や時代によって、意味あいが変わる場合もあるようですが。

池田　そう思います。二十年ほど前、はじめてポルトガルに行ったとき、こんなことがありました。菊の花をお客にさしあげようと思い、花屋に行ったら、日本人の大使館員の方だったか、駐在員の方だったか、いけないというんです。

菊は、日本では御紋章とかに使われ、めでたい花だが、ポルトガルでは葬式のとくに用いる花で、悲しさとか寂しさを託してるんです、といわれビックリしたことがあります。

屋嘉比　大なり小なり、そういうことはあるかもしれませんね。気をつけなければいけませんね。(笑)

——蓮華のような花は、珍しいかもしれませんね。

池田　ですから仏法が、この「譬喩蓮華」をとおし、「法蓮華」を説かんとする意義も、私にはよくうなずける気がします。

鳩摩羅什くまらじゆうの見事な翻訳ほんやく

——そこで、いわゆる仏法の真髄である「法蓮華」すなわち「因果俱時」の法についてですが……。

屋嘉比 法華経には、この「法蓮華」について、どういう経文がありますか。

池田 それは、有名なのは「從地涌出品第十五」じゆうじゆじゆつぽんに説かれている。

「蓮華の水に在るが如し」あいわゆる「如蓮華在水」にょれんげざいすいという経文です。

この意味を簡単に申しあげますと、混濁こんだくした現実社会にあっても、「蓮華の法」たもを持った人は、あたかも、泥水のなかに咲く清浄な蓮華のごとく、尊貴にして力強い生命をもちながら、清らかな人生を開花させ、高貴な香りをたたえながら生きぬいていける、ということです。

この「蓮華の法」とは、すなわち妙法ということですよ。

屋嘉比 現実社会に生きゆき、変革をめざすのは、絶対に正しき人生のあり方と、私も思っています。

池田 これは「淤泥不染」おでいふせんの徳ともいわれております。

屋嘉比 すると蓮華そのものについて、法華経になにか説かれているんですか。

池田 いや、蓮華そのものについては、詳しくは説いておりません。

ただ大事なのは、「妙法蓮華經」という題号にいつさいの諸法が含まれてくるわけです。

屋嘉比 どのような……。

池田 いわゆる法華經の原典であるサンスクリット語では、「妙法蓮華經」は、「サダルマ・ブンダリーカ・スートラン」となっております。

屋嘉比 その意味は……。

池田 これを直訳しますと、「白蓮のごとく正しい教え」ということです。

ところが、法華經を漢訳した有名な中国の鳩摩羅什が、この直訳を、^{＊くまろじゆう}ご存じのように、

「妙法蓮華經」

と、見事に訳し遂げたのです。いまから一千五百年以上も前のことと思いますが。

屋嘉比 「白蓮のごとく正しい教え」という直訳の意味は、どういうことでしょうか。

池田 まあ、わかりやすくいえば、「白蓮」とは、清らかさ、尊さを象徴しています。

ですから「正しい教え」とは、仏法真実の教えは、^{たぐひ}類なく清らかで尊貴さを含んでいるということです。

——二祖日興上人は、「白蓮阿闍梨」といいますが。

池田 そのとおりです。一般的に「阿闍梨」とは、「アーチャールヤ」という梵語で、聖



泥水のなかで大輪を開いた蓮華の花。

者、尊者、教授、正行しょうぎょうという意味になります。弟子を教え導く、高德の僧ということです。

屋嘉比 梵語の音訳なわけですね。

池田 ですから、日蓮大聖人の大白法を、そのまま受け継がれた二祖日興上人のお名前は、たいへん深い意義をもっていると思います。

私は、この信仰を始めたとき、このことにたいへん感銘したことを、よく覚えています。

屋嘉比 鳩摩羅什の訳はなぜ、名訳といえるんですか。

池田 この法華経の訳は、古来「^{*}六訳」といって、六人の訳者がいたようです。これは一般的にも研究されています。そのなかでもこの羅什の訳は、もっとも優れているとされている。

その理由のひとつは、その訳自体が、法華経は「八万法蔵」のなかで、完全に王座を占めて

いるという位置を、明確にしたからです。

屋嘉比　すると、他の訳とどこが違っていたんですか。

池田　この鳩摩羅什については、東洋哲学研究所の本のなかで、研究員の松本和夫君と縷々語り合いましたので、略させていただきますが、もしかのときは、それを読んでください。(笑)

そこで羅什は、いわゆる法華経の正統派ともいうべき竜樹菩薩りゆうじゆぼさつらが、大乘仏教の極理ごくりを体系化した思想、法理を、深く深く信じ、研究しきったからでしょう。

そこには、まったく安易な我見がけんとか、感情論などは、微塵みじんもなかったといつてよい。

屋嘉比　すると、鳩摩羅什がもしいなかったら、真実の法華経が完璧かんぺきに伝えられなかった、とみることができるわけですね。

池田　そう思います。不思議な因縁というか仏縁というか、やはりその時代、時代に、不思議な人物がかならずでるものです。

——それこそ、不可思議なる法ですね。(笑)

池田　ひとつの例として、竜樹菩薩は、よく仏像に蓮台がある姿について、彼の有名な『大智度論』だいちどろんのなかで、

「蓮華は……妙法の座を莊嚴するをもつての故なり」

という考え方に立っている。羅什三蔵は、こうした大乘經の正統派のうえに立脚し、「白蓮のごとく正しい教え」を思索し、体得していったんでしよう。

そこで彼は法華經がいわんとした“生命の眞実相・究極の實在”というものを、ひと言にして「妙法蓮華經」ととらえきつたと、私は考えているのですが。

屋嘉比　すると、法華經の原典の題号である「白蓮のごとく正しい教え」の内容は、法華經の經文をいくら読んでも、わからないんですか。

池田　文もんの上からも、それなりのものはわかるかもしれない。しかし、法華經の文の底に秘沈ひちんされた根本の「大法」はわからないでしょう。そこに深い意義が、じつはあるんです。ただ当時、羅什の翻譯で、法華經をはじめて知った中国の人々は、こんなにすごい理論体系の仏典があつたのかと、たいへんに驚いたようです。

そして法華經を、「万善同歸教」まんぜんどうききょうと名づけたと伝えられております。

屋嘉比　たいへんに理路整然としている。しかし、それだけではわからない極理が、さらに含まれている、というわけですか。

池田　じつはそうなんです。私も信仰し研究してわかったことなんです。

一般の人々が、長年のあいだ教えこまれ、とらわれてきた、いわゆる表面的な仏教観、法華經觀というものがあることは、否定しえない事実です。ですから、さまざまな疑問をいだ

いたり、反発したりする理由も、私はよくわかるんです。(笑)

——すると、真実の仏教観、法華経観とは……。

池田 日蓮大聖人が、仏法哲理の奥義、真髓を、第二祖日興上人に相伝した「御義口伝」において、初めて、その深義が明らかにされています。

——その「御義口伝」は、もう二十数年前になりますが、池田先生が初めて、まだ若い学生たちに講義されたもので、私も受講したメンバーのひとりでした。

池田 ああ、そうだったかね。(笑)

——私が心から感動したのは、この講義録が上梓されたとき、総本山第六十六世日達上人よりいただいた序文のなかに、

「この講義、一書あれば、他の一切の仏教書はいらぬ」

とのお言葉があったことです。

池田 まことに恐懼のかぎりです。ご承知のとおり、「御義口伝」は、日蓮大聖人の仏法の極説中の極説である。

——この講義録が発刊されて、ちょうど、今年の四月二日で二十年になりました。

池田 早いもんですね。

屋嘉比 二十年前だと、私はまだ中学生でした。(笑)

いまでは、この講義を受けた人は、ほとんどが四十代となり、それぞれの分野で、リーダーとなって活躍しているんでしょね。

池田 そうです。たいへんうれしいことです。

——ま、なかには一人か二人、増上慢ぞうじょうまんで教学を身につけたと錯覚し、墮落していった人もいますが、信心なき教学は恐ろしいことを、みんながよくわかりました。

池田 「信」なき教学は、「論語よみの論語知らず」と同じだね。

屋嘉比 学者の世界もまた同じです。

そこでもう少し、「蓮華」についてうかがいたいのですが。

池田 結論して申しあげれば、法華經二十八品は「南無妙法蓮華經」の「一法」の説明書となるんです。この「南無妙法蓮華經」こそ、末法万年尽未来際まつぽうまんねんじんさいにわたる、「第三の法門」の法則なのです。

この「一法」こそ、真実の「蓮華の法」であり、「因果俱時・不思議の一法」であり、「総在一念」の「法」となるわけです。

屋嘉比 この根本の「一法」から、「万法」は生ずる、というのですね。

池田 くどいようですが、そのとおりです。

ただ、その「南無妙法蓮華經」の「法」の実態は、私ども凡夫にはつかめないし、わから

ないし、どうしようもない（笑）。そこで、大聖人が、この「大法則」をば、一幅の御本尊として御図顕してくださったわけであります。その正統が、日蓮正宗なのです。

「無明法性一体」は生命の実態

池田　そこでまず、「御義口伝」には、

「南無とは梵語なり此には帰命きみょうと云う」（七〇八）

とある。「南無」とは、梵語、つまりサンスクリット語の「ナム」の音訳である。これを漢語に意識すると、「帰命」ということになります。

屋嘉比　なにに、帰命するのでしょうか。

池田　「人法之れ有り」と説かれています。

つまり、その帰命する対境、対象には「人」と「法」とがあるということです。

屋嘉比　まず、その「人」とは……。

池田　またちよつとむずかしくなつてすみませんが（笑）、「久遠元初」の「自受用報身如来」即日蓮大聖人になるのです。

——仏法上、久遠元初とは「久遠即末法」で、末法ということになりますね。

池田 そのとおりです。

屋嘉比 すると「法」とは……。

池田 法本尊である「南無妙法蓮華經」です。

この「人」と「法」とが、一箇になった御本尊に帰命するということです。

ここで、さらに詳しくいえば、

「迹門不變真如の理」とか「本門隨緣真如の智」とか「色心不二」という展開もなされているが、あまりにも専門的になりますので、今回は略させていただきます。

屋嘉比 本当にむずかしいですね。医学もむずかしいけれども、さらに深淵さを感じます。すると「妙」とは、どういう意味になりますか。

池田 簡潔にいえば、「妙」とは、万法の根源の当体である。

「世界」という二字には、全人類百六十数か国のすべての国々の人々が含まれている。次元は違うが、ありとあらゆる方法、万象が、この「妙」という一字に収まる、というのです。

そこで仏法用語では、これを「法性」といい、さらに「仏界」をあらわします。

屋嘉比 すると「法」とは。

池田 万法、万象のことである。この万法、そして万象をなさしめていく根源が「妙」であるがゆえに、その「悟り」と対称して「無明」という。また「迷い」ともいいます。

ですから「仏界」に対し、「九界」をさすわけである。

そこでこの「妙」も「法」も、この両者があってはじめて、すべての生命の実相となっているわけです。ですから、「御義口伝」には、

「無明法性一体なるを妙法と云うなり」（七〇八）

と説かれております。

屋嘉比 医学の次元でもたしかに、まったく反対の働きが一体性として存在する多くの例が考えられると思います。

たとえば、血液中の白血球も、悪性化すると異常に増えだし、恐ろしい白血病、血液ガンとなります。しかし、正常な白血球は細菌を殺したり、ケガをすぐ治してくれる。

これも、「無明」と「法性」が一体のひとつ、といつてよろしいのでしょうか。

池田 現象面からみれば、そういうえるでしょう。

たしかに、万象はプラスとマイナスの両者を、あわせもっておりますからね。

ただ、仏法の「無明法性一体」というのは、そうした現象の段階の論議ではなく、生命という究極の、あるがままの実態というものをいつている、ということはご理解願いたいんです。

時代を開く「因果俱時」の大法

池田 つぎに「蓮華」について、「御義口伝」では、

「蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり」（七〇八）

とも説かれている。もうおわかりのように、この「蓮華」とは因果の理法である。

屋嘉比 すると、いわゆる花と実が同時になる蓮華の花は、その理法の譬えであるわけですね。

池田 そのとおりです。しかも「是又因果一体なり」つまりいっさいの生命、ありとあらゆる有情・非情の当体というものは、「因果一体」「因果俱時」が究極中の究極の実相であるというのです。

屋嘉比 これは科学においても、本質中の本質の課題ですね。

池田 そう思います。たとえばの話ですが、いわゆるこの壮大なる宇宙が誕生した淵源は、ビッグバンという、いまから約百億年とも二百億年ともいう、はるかな過去の大爆発といわれ、いまなお、この宇宙が膨張しているのは、ご存じのとおりです。

しかし、一千億個ともいわれる銀河系星雲や、それに比較しようもない数の太陽のような

恒星、また地球のような無数の惑星や星々の誕生、さらには、人間のような高等生物の発生をなさしめた「因」は、いったいなんであったのか。

屋嘉比 この宇宙の始まりの極限に近づく次元の論議となると、いわゆる凡下ぼんげの頭ではその原因はわからない。(笑)

池田 そういうことですね。ただ、ビッグバンの起こった究極の瞬間それ自体が、この宇宙をつくる「因」であり、しかも宇宙そのものであったわけである。

つまり、「因」と「果」が同時の存在であったとしか、とらえようがないわけです。

おおざっぱにいえば、それがさまざまな要素や条件との関連から、現在の宇宙にいたったとも考えられるわけです。

私も専門家ではないんで、多少の表現の間違ひはあるかもしれませんが、いわんとすることはわかってください。(笑)

——いや、おもしろいですね。私は、そういう話が大好きなんです。(爆笑)

そこで、ほかにもなにかございますか。(笑)

池田 いや、困ったね(笑)。これは屋嘉比さんの分野ですが、精子、卵子の受精卵それ自体も、因果の一体性が考えられますね。

屋嘉比 そう思います。○・一ミリほどの受精卵のなかに、われわれの心身を形成する遺

伝情報が、すでに内在しています。

——植物の種なんかどうですか。

池田 ひとつの譬えとして、考えられないこともない。春、種をまき、秋になると実がなる……。ですが、種それ自体に、実を結びゆく「因」と「果」の俱時性の内在はある。

そこで、生命それ自体の法理も、深く哲学的思索をすすめていけば、同じ方程式となる。

この「因」と「果」も一体となり、「因」が先で「果」が後というのでもない。

時間、空間もないというか、超越したというか、その妙なる世界が「因果俱時」といってよいかもしれない。

屋嘉比 われわれの頭脳では、因果の外面性はわかるが、仏法の因果俱時論は、さらにその奥の内面の因果の追究で、たいへんに鋭いとらえ方と思います。

池田 ですから、医学や科学は現象世界における因果関係の追究である。

それに対し、仏法は、生命という絶対性の因果の法則といえると思います。

いわゆる科学などの因果の理法も、たしかに正しいし、実際的なものである。

だが、もう一步深くみるならば、「因」には即「果」が含まれる。またその「果」は即つぎの「因」をはらんでいる。これもまた、事実である。

屋嘉比 いわゆる、一般の因果論を打ち破る、画期的な法理と思います。まことに人生の

幸、不幸をもたらしてゆく原因、結果への徹底した仏法の眼を感じます。

池田　そこで、この点はいつか勉強していただきたいのですが、大切なことは、この第三の法門の「因果俱時」の仏法は、いわゆる業因、業果にとらわれ、ともすればその束縛を重視しすぎる釈尊の仏法に対し、「一心」「一念」という、真髄中の真髄である生命の「核」を解明することにより、その「核」のなかに過去の業因果果を止揚し、最高、最善の因果の方向へと変えうる「法」を開示した、ということなのです。これは仏法の大革命といわねばならないと思います。

——そうですね。

池田　ですからその違いをいえば、こういうたとえば「因果俱時」の大仏法は、現在から未来へ、あたかもジェット機が目的地にむかって、全速力で上昇しゆく姿にも似ているような気がする。

それに対し、過去の原因、結果にとらわれゆく、釈尊の仏法は、縁する限られた衆生を乗せて、すでに着陸した、役目が終わった仏法といえる。

したがって、その飛行機のエンジンの噴射力の相違は、天地雲泥の差があるといわねばならないんです。

大聖人の「一法」のみが悟りの法門

池田　そこで、「蓮華」が少々長くなってしまいましたが、「南無妙法蓮華經」の「經」ということについて、同じく「御義口伝」には、

「一切衆生の言語音声を経と云うなり」(七〇八)
と説かれております。

さらに經釈には、

「声仏事を為す之を名けて經と為す」(「法華玄義」)

とある。つまり「南無妙法蓮華經」こそ、いっさいの人々の最高の言語音声であり、「經」になるわけです。

また、大聖人は、

「三世常恒なるを経と云うなり」(七〇八)

と。この「經」とは、生死生死と、過去、現在、未来の三世にわたってめぐりゆく、生命の永遠性をあらわすという甚深の義がある、ともおっしゃっておられるわけです。

屋嘉比　たいへんな法理です。いわゆる日本人一般の印象として、日蓮宗派といえば路上

で太鼓をたたいたり（笑）、タスキをかけたりという姿を想像するが（笑）、正統の流れは、こんなに深い哲学があるとは思われもしなかった。

池田　そうですね。（笑）

屋嘉比　インテリなんか見向きもしない、低級な非科学的宗派と思われてきましたが（笑）。なんでも無認識に批判するのは、どうかと思いますね。

——仏法では、「因果俱時」の大法というのは、日蓮大聖人以外まったく説かなかったんですか。

池田　そのとおりです。この「大法」すなわち「因果俱時・不思議の一法」は、日蓮大聖人しか説かれておられないのです。

——日蓮大聖人の御書を拝しますと、仏法には釈尊^{しやくそん}、天台^{てんだい}、伝教^{でんぎょう}とか、他にもいろいろな仏がでてきますが。

池田　そこで大事なことは、大聖人はまず、釈尊の膨大な教典から、たくさんの法門が乱立していることに対し、釈尊の教義全般がどういうものか、また仏の本意は何にあったのか、さらに、それぞれの教典の本意はどこにあるかを明かされた。

重複しますが、この「五時八教」という釈尊の法門が、究極的に何を示さんとしたかを、鋭く追究し、分析していかれた。そこで、最終的に釈尊の元意を明確に示され、多くの誤れ

る宗派と、その教義を打ち破っていったのです。そのうえに立脚し、御自身の法門を展開されたわけです。

その厳密^{げんみつ}なる論理的立てわけ、分別のうえから、この末法^{*}という時代においては、「南無妙法蓮華經」を釈尊が本意としたことを、明快に示されたわけです。

——すると、「南無妙法蓮華經」の一法が、まだ説かれていないのに、釈尊の時代にも仏になったというのは、不自然と思いますが。

池田 そういうことですね。「等覺^{とうがく}一転名字妙覺^{みょうがく}」^{とうがくいつてんみょうじみょうがく}といつて、その内証^{ないしやう}の悟りは、やはり

「南無妙法蓮華經」に通じていたんです。

たとえば天台大師は「内鑑^{ないかん}冷然^{れいねん}」^{ないかんれいねん}といつて、みずからの時代の仏法を論じながらも、「南無妙法蓮華經」について知っておられたんです。これは文献上にもはっきりしています。

屋嘉比 天台は、なぜ知っていながら、説かなかったんでしょうか。

池田 詳しくは四つの理由がありますが、ま、自分の法ではないので、説く資格がなかったんです。これは、釈尊の場合も同じなんです。

いずれにせよ、インドの釈尊にしても、中国の天台大師、日本の伝教大師にしろ、根本はこの「因果俱時・不思議の一法」によって仏の悟りを得ている。また、この「法」を、最大に大切にしておられる。このことは少々、勉強すればすぐわかることです。

要するに、世界的に名著といわれる万卷の書は、「悟り」の書ではない。

日蓮大聖人の「一法」のみが、三世にわたる仏の悟りの法門であるところに、なにものにもかえがたき万鈞ばんきんの重みがあると、私は思っております。

無限の価値を生み出す「信」の人生

——するとこの「因果俱時・不思議の一法」とは、仏の悟りの法門であり、凡夫には思議しがたい次元の論議ともなるわけですね。

池田　そういうことですね。そこで凡夫はわからないから、信ずる以外ないわけです。どうしても「信」という領域に、はいらなければならなくなってくる。

——「信」というと、現代人はすぐに盲信と、短絡的に考えてしまいがちですが。

池田　仏法では、「大法」に対して「疑わざるを信という」といいます。

電車に乗るにも、いつも安全かどうか疑っていても、怖くて乗れない。（笑）

やはり、ひとつの「信」の姿でしょう。

また「以信代慧いしんだいえ」といって、正しき「法」への「信」は、最大に「知慧ちえ」を発揮できるという、すばらしい意義があるんです。なにかにごまかされて、なにか生命の自由な発露が閉

ざされたり、固定的なものの見方になるわけでは決してない。

狭小な境涯きょうがいから、より広き境涯へと無限に広げゆく、生命のひとつの所作しよさといってよい。

屋嘉比 たしかに、「信」という意義について、もつと私どもは、素直な気持で光をあてていく必要がある……。

「邪」を信じるのは愚かである。しかし「正」や「善」を信ずることは、もつとも本来的な人間のあり方であり、人間の精神活動のなかでも崇高な働きであると思います。

池田 現代ほど、宗教というものの存在意義が、見失われた時代はない。

しかし、人類英知の最高の財産である宗教を、その高低浅深も探究せずして、軽々しく断定することは、あまりにも早計といわざるをえないと、私は思っています。

——「人は何かを信じることによって生きている」といった哲学者がいたが、病気になる
と、病院に行くのも、同じ心理でしょう。やはり、「信」が根本にある……。 (笑)

われわれの生活は、大部分が経験上得た「信」で成り立っています。ご飯を食べるにも、毒がはいっているかもしれないと疑えば、生きていけない。(笑)

屋嘉比 よくなると思わなければ、医者にも来ない……。まあ、そういうことになると、根本的に「信」という考え方が、日常性の大事な要素になりますね。

池田 そういうことになりますね。

屋嘉比 物理や化学の法則も、すべて経験上の「信」のうえに成り立っています。

池田 「信仰は人生の力である」という、トルストイの有名な言葉がある。

仏法への信仰とは、いっさいの森羅三千しんらさんぜんの法則の、究極中の究極の法則への「信」から、人生に無限の価値を生み出しゆくことと、いえるかもしれない。

光彩を放ちつつ昇る太陽の「法」

池田 ですから、ここで整理させていただくと、私の浅薄な見方になってしまいかもしれませんが、釈尊の八万法蔵の法門は、そのプロセスのうえに、原因・結果の因果論を説いてきたといえる。

そして最高峰といわれる法華経にいたっては、仏法の真髄である、「空仮中の三諦」「法報応の三身」ならびに「十界互具」「一念三千」等々という多重な次元から、生命というものの実相を明かしきっている。

——なるほど、そうですね。

池田 そこで今度は、釈尊の仏法は、「大集経だいしつぎょう」という経文でいわれているのですが、正法年間ぽうねん、像法年間ぞうぽうの約二千年でまったく効力を失い、末法の衆生しゆじようとはまったく縁なき「法」

となった。末法の時代にはいつてからは、その末法の仏が説く「法」によって結縁けちえんされ、成仏していく以外ないということになるのです。

そこでご存じのとおり、末法にはいつて日蓮大聖人の御出現があり、末法万年を志向されて、多くの宗派との法論のうえからも証明された「大法」を樹立したわけです。

その法こそが、久遠元初より無始無終であり、永遠にわたる真理である「南無妙法蓮華經」という、仏法の極説中の極説の「法」となり、即一幅いっぽくの御本尊となるわけです。

屋嘉比 その御本尊に、仏法のすべてが凝結されていていくわけですね。

池田 そのとおりです。ですから、過去も、現在も、未来も、またいつさいの因果も超克し、かついつさいを強力に発現しゆく本源の大法則こそ、「南無妙法蓮華經」といえるのではないでしようか。

この御本尊に帰命しゆくときのみ、私どもの生命も、久遠元初の若々しい生命として輝き、広がりゆく。ゆえに、私どもの過去遠遠劫かこおんのんどからの罪業ざいごうを、一生のうちに転換せしめゆく方程式がここにあるわけです。

屋嘉比 なるほど。

池田 そこで釈尊の仏法は、すでに使命が終わった。そのようないくつもの理由から、「本果妙ほんがみょう」の仏法となるわけです。

それに対し、第六章でも少々論じさせていただきましたが、日蓮大聖人の仏法を「本因妙」とたてます。その本因妙の仏法である、大御本尊に帰命しゆくときに、はじめて天上界、菩薩界をも突き抜け、ついには仏界へと、自分自身の内なる根源力を、無限に発現しゆくことができるわけです。

これは、現世だけではなく、三世永遠に連なる生命を躍動させ、強靱にして崩れざる仏の「我」を、強めていくことができます。

屋嘉比　すばらしいことです。

池田　ですから、大聖人の仏法における「本因本果」とは、この根本的善の原因であり、根本的善の結果ということができます。

いうならば、「本因妙」の仏法は、太陽が無限の光彩を放ちながら昇りゆく姿といえるかもしれない。

それに対し、インド応誕の釈尊の仏法は、夕日の沈みゆくがときものである。

——つまり……。

池田　「本因妙」の仏法は、生きとし生けるものすべてをして、ありとあらゆる煩惱、そしてまた生死の闇を赫々と照らしながら転換させ、さらに超克せしめゆく、「現当二世」の「大法」であるわけです。

これに対し釈尊の仏法は、過去遠遠劫より調機調養じようきじようじようされてきた有縁うえんの衆生を救済する役割が、すでに終わった仏法となるのです。

——この「現当二世」という意義について、池田先生は本年（一九八五年）三月、東京の町田の会合で詳しく語っておられましたね。

池田 いたしました。その話も、この「対談」に通ずるんです。もしかの場合は、新聞にも出てますので、参考のためにいっぺん読んでみてください。（笑）

よき根本原因を作るための信仰

池田 要するに、人は幸福になりたいものだ。つまり、幸福は人生の目的である。しかし、相対的な範はんちゅうでの幸福は感じてても、絶対性の幸福というものはわからないものです。

屋嘉比 ええ。たとえば、病気が治る。これはひとつの幸福である。しかし、またいつ病気になるかもしれない……。

池田 また、自分は幸福になりたくても、どうしても幸福になれないものがある。それを仏法では、「悪業」とも「罪業」ともいっております。

人間には、どうしようもない、流転の傾向性があるといえるでしょう。

その宿命というか、宿業というものを乗り越えて、自分自身の本来的な無限の自由性への発現をなしゆく。そしてまた、無量の福運を積みゆく方向へと、志向していくのが、仏法の信仰なんです。

屋嘉比 因果とか宿業というとなにか暗いイメージがありましたが、本来の仏法は、今日を、そして明日へ、さらには未来へという、まことにダイナミックなものであることがよくわかりました。

池田 私も、信仰してそれがわかりました。つまり、いつさいの不幸の宿命や罪業を、根本的次元から転換しゆくのが、「本因妙」のこの仏法なのです。

屋嘉比 “本因の法”という意味はすばらしいと思います。

池田 ただし、信心の厚薄によるということが、大前提となる。

「叶ひ叶はぬは御信心により候べし」(「日巖尼御前御返事」一二六二)
とあるとおりです。

——当然ですね。

池田 頭が疲れてきたもので、いい例ではありませんが(爆笑)、その宿命転換しゆく法の力は、億万ボルトの電流が、生命の「一心」に伝わるようなものといえるでしょう。

——すると、われわれの努力とか向上への力は、せいぜい千ボルトか二千ボルトぐらいの働きしかない。(笑)

池田 いや、仏法はその進歩と向上への努力を、最大限に価値あらしめる根源の法則なんです。生活を離れての仏法の信仰はありえないし、また絶対にあってもならない。

屋嘉比 同じ医学の講義でも、超一流の力をもつ教授の講義を受けた場合と、仲間うちの場合とでは、やはり、ボルテージが全然違うんです。(笑)

池田 同じような意味になりますが、「本因妙」の仏法の力は、清らかな大河の流れのようなものである。幸福という「一念」の大海に、間違いなくはいつてゆくことができる。

たしかに、われわれにはそれぞれ、大小さまざまな宿命があるかもしれない。また、罪障ざいしょうもあるかもしれない。しかし、どれだけあるか計算することはできない。(笑)

だが、この「本因妙」の仏法という大河の流れに、ひとたび「一念」がはいった場合は、ありとあらゆるものを浄化させながら、滔々とうとうたる奔流ほんりゅうとなる。

屋嘉比 人間の身体も、絶えずものすごいスピードで変化していきます。私の専門の「胃」でも、毎日毎日、細胞はすさまじい分裂をし、傷を修理し、悪いものを流していきます。驚くことに、胃の粘膜ねんまくの表面は三日間で全部変わるんです。

——はあ。人間は、身体も生命もまったくすばらしい。(笑)

池田　ですから、私どもは、仏の境涯に到達したい。また、その過程において、現実の生活に勝利したい。

つまり、この根本法則である「本因妙」の仏法にのっとって、壮大なる境涯の人生と、確かなる過ちなき幸福への生活とを歩みたいがゆえに、日々、精進しやうじんしておるわけです。

屋嘉比　その確かなる法則にのっとりながら、すべての人が、自分らしく人生を歩んでいけるということは、すばらしいことですね。

池田　つまり、よき根本的原因をつくりゆくための信仰であり、仏法なのです。

朝な夕な、「本因妙」の仏法によって宿命転換への、つまり原因をつくることができる。

その繰りかえしの人生のなかに、「一生いっしょう成仏」の意義がある。

——なるほど。

池田　ともあれ、誰人たりとも今日が大切である。

また日々、宿命を打開し、栄光への原因をつくりゆくことはすばらしい。

釈迦仏法は「歴劫修行りやくやつこうしゆぎやう」と説きますが、大聖人の仏法は、どこまでも現実の生活を大事にしながらの「即身成仏そくしんじやうぶつ」であり、「一生成仏」である。

まあ、平たくいえば、瞬間瞬間を生きていく人生が、楽しみで横溢おういつしている境涯ということになるでしょうか。その「仏力」「法力」があるのです。

その前提となるのが、私どもの「信力」「行力」であることは、いうまでもない。
ですから、この「自受法楽」^{じじゆほうらく}というか「常樂我淨」^{じようらくがじよう}というか、人生の最高最善の価値を、
自身の内なる生命に証明しゆく毎日でありたいと願うがゆえに、私どもは信仰しているわけ
です。

注 解

〈あ行〉

以信代慧 いしんだいえ 「信を以つて慧に代う」と読む。一往、
仏法では知慧ちえによって仏道を成じょうずるとするが、知
慧の因は信であり、信を貫いてこそ仏智を湧現ゆげんし
成仏することができるとの意。

以信得入 いしんとくにゆう 「信を以つて入ることを得」と読む。

法華経譬喩品第三にある文。一切衆生は信をもつ
てはじめて成仏することができると説いたもの。

一念三千 いちねんさんぜん 一念とは、瞬間の生命をいい、三千と
は現象世界のすべてをいう。一念三千とは、一瞬
の生命に十界じゅうかいを具し、十界が互いに具そなわり合つて

百界となり、百界は実相じつそうの十種の面（十如是）を
具して千となり、これが三種の世間を具して三千
世間となる。一瞬の生命に現象世界のすべてが欠
けることなくおさまっているということ。

遺伝子 いでんし 遺伝情報（遺伝形質の特異性を指定する
ために生物がそなえている情報）をになう構造単
位のこと。染色体中に一定の順序で配列され、生
殖細胞を通じて親から子に遺伝情報をつたえる。
その実体は遺伝子を構成するDNAの分子で、こ
のDNAの塩基配列の順序が遺伝情報となり、細
胞内で合成されるたん白質やリボ核酸の一次構造
を指令する。

遺伝子工学 いでんしこうがく 遺伝子組み換えや細胞融合などの方
法を用いて、有用生体物質の生産、種の人工的改
変などを目的とする技術。病気の治療など幅広い
応用範囲を含む。

依正不二 えしょうふに 依報と正報が二にして不二であること。

正報とは生命活動をいとなむ主体をいい、その身がよりどころとする環境・国土を依報という。この二つは、ともに自己の過去の業（行為）によって招いたものであるから同じく報という。両者の関係は而不二（二にして二にならず）であり相関性を成していることを依正不二という。つまり、主体である自己と生活環境である自然とは觀念のうえでは区別できるが、実際には区別できないものがあり、互いに関係性をもっているということ。
演繹 えんえき あらかじめ知られている普遍的真理から特殊の真理を発見する方法。論理学的な学問である数学や論理学、哲学などでこの方法が用いられる。帰納に対する語。

〈か行〉

帰納 きゆう いくつかの具体的事例から、一般的な命題、法則を推理し、または導き出すこと。演繹に対する語。

経釈 きやうしやく 経と釈。経とは仏の所説の書、釈とはその経文を人師が解釈したもの。

鳩摩羅什 くまらじゆう 「羅什三蔵」の項参照。

外用 げゆう 外にあらわれる働きのこと。内証に対する語。仏、菩薩が迷える人々を救うために、いろいろと姿をかえて出現する姿のことをいう。

業 ごう 現在や未来にもたらされる結果を決める原因となる過去における自分のすべての所作。業因ともいう。仏法では、善悪の業は因果の道理によって後にかならずその結果を生むと説く。善悪に分けて善業と悪業がある。

五濁悪世 ごじよくあくせ 生命の濁りの諸相が盛んな悪い世のこと。五濁とは、劫濁・衆生濁・煩惱濁・見濁・命濁

のこと。五濁とは、劫濁・衆生濁・煩惱濁・見濁・命濁

のこと。正像末の三時のなかで末法の時代をいう。

〈さ行〉

サリドマイド　ヘミー・グリユネンタール社（西ドイツ）で開発され、一九五六年にコンテルガンの名で市販された催眠薬。この薬は日本でもイソミンの商品名で発売された。しかし、妊娠初期に使用するとアザラシ肢症などの奇形児を生ずることが明らかになり、現在は市販を停止。

三毒（貪瞋癡）さんどく とんじんち　善根を毒する三つの煩惱で、三

根ともいう。①貪とは貪欲・貪愛・むさぼり愛すること。②瞋とは瞋恚・いかりのこと。③癡とは

愚癡・無知・おろかなこと。

示同凡夫じどうぼんぶ　「じどうぼんぶ」とも読む。仏が凡夫（凡人、普通の人）と同じ姿を示すこと。

迹門しやくもん　法華經二十八品のうち、前半の序品第一

から安樂行品第十四までのこと。本門に対する語から安樂行品第十四までのこと。本門に対する語で、迹門は池水に映る月影に、本門は天の月そのものに譬えられる。（本門の項参照）

舍利弗しやりほつ　釈尊十大弟子の一人。仏説の真意をよく理解したので、智慧第一といわれた。梵語シャーリプトラの音写で、舍利弗多、舍利子とも書き、訳して身子ともいう。

寿量品じゅうりょうぼん　法華經卷六如来寿量品第十六の略。釈尊の本地久遠実成をあかした重要な品。その奥底には、日蓮大聖人こそ末法の御本仏であり、南無妙法蓮華經のみが一切衆生を救済できる唯一の法であることが説かれている。

小頭症しょうとうしやう　脳の發育が悪く、頭が異常に小さい状態。一般に精神發達の遅れと脳性麻痺を伴う。またけいれん發作を伴うことが多い。

正法しょうぼう　三時（正法・像法・末法）の一つ。釈尊の

教えが正しく行われる時期のこと。一応、正法の年限は釈尊滅後千年間といわれているが、種々の異説がある。

常楽我淨 じょうらくがじょう 仏の境地にそなわる四つの徳のこと。

常德は仏の境地が永遠に不変不改であることをあらわし、楽徳とは無上の安樂のことを意味し、我徳とは生命が自由自在で他からの束縛を受けないことであり、淨徳は煩惱のけがれなき清淨な完成をいう。また衆生も本来仏性をそなえているので、一切衆生の生命にそなわっている徳ともいえる。

生老病死 しょうろうびじょうし 人の一生における避けることのでき

ない根本的な四種の苦しみのこと。①生苦（生まれる苦しき）②老苦（年老いていく苦しき）③病苦（病氣による苦しき）④死苦（死ぬときにお

こる種々の苦しき）。

白子 しろこ 「しらこ」とも読み、アルビノともいう。

先天的に皮膚、毛髪、目などのメラニン色素を欠き、全身白色となった突然変異体。

人生地理学 じんせいちりがく 地理学書（一卷）。創価学会初代会

長牧口常三郎著。明治三十六（一九〇三）年十月

十二日発行。日本の地理学研究の方向に画期的な変化を与えたといわれる労作。本書の特徴は、人間生活と地理との関係を觀察して、そこに因果の法則を見いだそうとした点にある。

深層心理学 しんそうしんがく 十九世紀の終わりとより、フロイ

ト、アーダー、ユングらによって創始された心理学。人間はみずから意識しうる心的過程のみではなく、無意識的な心的過程をもつことを前提とし、この無意識の部分について研究する心理学のことをいう。

水頭症 すいとうしやう 生後数か月後ころから、先天的な原因

で頭の中に水（脳脊髄液）のうせきずいえき が余分にたまって頭が

大きくなる状態。症状として、精神発達遅滞、運動障害、けいれん発作などがおこる。

生命操作 現代医学の発達をもたらした生命の誕生の分野における人工的操作のこと。たとえば、人工授精、精子銀行など。これらは、一方では子供をもうけることのできない夫婦にとっては朗報といえるが、もう一方では、生命倫理の立場から問題をなげかけられている。

染色体 せんしよくたい 動物や植物の細胞の核内に存在し、生物の遺伝を支配している棒状の構造物。細胞が分裂するときにあられ、それ以外の静止期には見ることができない。塩基性色素に染まりやすいことから、この名がつけられた。染色体上に遺伝子の本体であるDNAが存在することがわかり、遺伝情報のにない手であるとされる。

創価教育学体系 教育者でもある牧口常三郎創価

学会初代会長が提唱した実践的教育学説の集大成。昭和五（一九三〇）年富山房から出版。

像法 ぞうぽう 三時（正法・像法・末法）の第二にあたる。年限は釈尊滅後一千年から二千年間の千年間をさす（大集経の説）。教（教え）、行（修行）の二法はあるが、証（果）の得られなくなった時期をいう。

〈た行〉

大乘仏教 だいじようぶつぎよう 小乗教に対する語。大乘とは大きな乗りもの（こと）で、小乗（小さな乗りもの）よりも多くの人々を迷いの此岸から悟りの彼岸ひがんに至らせることをいう。小乗教が声聞・縁覚えんかくを理想として阿羅漢果あらかんを得させることを目的としたのに対して大乘教では利他りたの菩薩道を説き、一切衆生を成仏させることを目的とする。

大脳生理学だいのうせいりがく

人間の精神活動をつかさどるといわれる大脳を生理学的なアプローチから研究する学問。これまでに、大脳皮質、大脳辺縁系の働き、言語活動の領域等明らかにされてきたが、まだ未知の分野が少なくない。

ダウン症 もうこ 蒙古症ともいう。頭蓋は小さく、眼尻が上がり、独特の顔つきである。一般に精神遅滞と発育障害が伴い、感染症にかかりやすく、短命であることが多い。

DNA デオキシリボ核酸のこと。おもに細胞核のなかにあり、生物が生きていくうえでの重要な遺伝情報を保持、発現する役割をになっている物質。遺伝子の本体をなすもので、二重のらせん構造をもつ。

伝教 でんぎょう (七六七―八二二年) 平安初期、日本天台宗の開祖、最澄さいちょうのこと。著書に『法華秀句』『守

護国界章』など。

天台 てんだい (五三八―五九七年)

中国南北朝・隋代の天台宗の開祖。智者大師ともいう。中国の南三七の十師を破り、五時八教の教判を立てて迹門の法華経を中国にひろめた。主著に法華三大部である『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』など。

天地創造説 てんちそうぞう

天地、宇宙また万物は絶対神あるいは神的英雄によって創造されたとする説。『旧約聖書』創世記によると、神は混沌から、光と闇、水と天、陸と植物、太陽と月と星、魚と鳥、獣と人間を六日間でつくり、七日目は安息の日としたという。この天地創造の神話は、キリスト教、ユダヤ教的世界観の基本をなした。

戸田城聖 とだじょうせい

(一九〇〇―一九五八年) 創価学会第二代会長。石川県に生まれ、北海道で少年時代をすごす。その後上京し、創価学会初代会長牧口常

三郎に師事しともに創価教育学会（創価学会の前身）を設立。戦時中治安維持法違反で牧口会長とともに投獄される。牧口会長は獄死し、戸田は二年間の獄中生活をおくる。戦後、創価学会の発展につくす。主著に『推理式指導算術』『戸田城聖全集』など。

〈な行〉

にちじゆん
日淳上人（一八九八—一九五九年） 日蓮正宗

総本山大石寺第六十五世の法主。明治三十一（一八九八）年長野県に生まれる。「御開山日興上人の昔にかえれ」との精神で信心の厳正、宗制の改正、教学の振興等をはかった。『大日蓮』『大白蓮華』等の雑誌や『聖教新聞』等に掲載されている論文、説法、破折等は多く、一周忌を期して『日淳上人全集』として出版されている。

にっとう
日興上人（一二四六—一三三三年） 日蓮正宗総本山大石寺開山。第二祖。白蓮阿闍梨びやくれんあじやりと号す。日蓮大聖人が武蔵国（東京都）池上で御入滅になるまで二十四年間常に随したがつてご給仕申しあげ、大聖人より「血脈の次第日蓮日興」と唯授一人の付嘱を受けられている。

にとべいなぞう
新渡戸稲造（一八六二—一九三三年） 農業経済学者、教育者。札幌農学校（北大）卒、東大中退後渡米、帰国後札幌農学校教授、一高校長、東京女子大学長などを歴任。また、国際連盟事務局次長、貴族院議員等幅広い活躍をする。主著に『農業本論』『武士道』など。岩手県生まれ。

ニューサイエンス フリッツヨフ・カプラの『タオ自然学』やグレゴリー・ベイトソンの『精神と自然』、ジェレミー・リフキンの『エントロピーの法則』など一連の著作に代表される科学批判の

動向。近代科学の方法に反省を加え、物質の世界と心の世界を再び結びつける道をさぐり、そこから人間と自然の調和を見いだそうとするもの。東洋思想への注目がその底流にある。

〈は行〉

八万法蔵 はちまんほうぞう 釈尊が説いたすべての教をいう。八万は実数ではなく、多数の意味。八万四千の法門ともいい、八万蔵と略すこともある。また法蔵は、宝蔵とも書く。

分子生物学 ぶんしせいぶつがく 生物現象を、その分子の構造と機能にもとづいて解明しようとする生物学の一分野をいう。分子遺伝学と分子生理学を含み、分化・発生など広く細胞機能の基礎的な様相を探究する学問。

ベルグソン (Henri Bergson 一八五九—一九四一年) フランスの哲学者。フランス唯心論の伝統

に立ちつつ、スペンサーの進化論から影響を受け、生の創造的進化を説いて、生の哲学者として哲学のみならず文学、芸術の分野にまで影響を与えた。主著に『時間と自由』『創造的進化』『道徳と宗教との二源泉』など。ノーベル文学賞受賞。

方便品 ほうべんぼん 法華経方便品第二のこと。迹門十四品のなかの要品であり、法華経のなかでも重要な位置をしめる。

法華経 ほけきょう 釈尊が説いた八万法蔵 はちまんほうぞう (すべての教え、八万は実数ではなく多数の意) のうち第一の經典。一般には、中国の鳩摩羅什 くまらじゆう が訳した『妙法蓮華経』八卷二十八品のことをさす。

法身・般若・解脱の三徳 ほつしん はんぎや げだつ 法身とは、仏の清浄な生命それ自体であり、般若とは仏の智慧である。解脱とは仏のふるまい幸福な姿のことで、法身・

般若の二徳が一緒になり、生死の苦しみから脱却

した状態をいう。

法報応の三身 ほつぽうおうさんじん 仏の三種の身で、法身・報身・応

身のこと。法身とは仏の証得した真理そのものをいい、報身はその真理を証得する智慧、また智慧を体得した仏身をさし、応身は衆生を慈悲をもつて救済する働き、またそのために応現する仏身をいう。

梵 ぼん 梵語ブラフマンの音写。バラモン教で説く宇宙の根本原理であり、世界創造の根源とされる。

本有の生死 ほんのうしやうじ 生も死も、本来生命に本然的にそなわった現象であるということ。永遠の生命を覚知したうへの生死をいう。本有とはもとより常住していること。生死とは生きることと死ぬことで生死流転の姿をいう。

本門 ほんもん 釈尊が説いた法華經二十八品のうち後半の從地涌出品第十五から普賢菩薩勸発品第二十八ま

でをさす。仏の本地をあらわした法門のことで、迹門しやくもんに対する語。本門は相対して迹門より勝れる。(迹門の項参照)

〈ま行〉

牧口常三郎 まきぐちつねさぶろう (一八七一一一九四四年) 明治四(一

八七二)年、新潟県刈羽郡荒浜村に生まれる。創価学会の初代会長。創価教育学説の提唱者。半生を教育界に捧げ、その間、地理教育の改革、新教育学の樹立に尽力。昭和三年ごろ日蓮正宗に帰依し、以来、宗教革命の先駆者として不惜身命の活動を続け、昭和十九年十一月十八日、獄中で七十四歳の生涯を閉じた。

末法 まつぽう 三時(正法・像法・末法)の一つ。闘諍堅固とうじょうけんこの時といわれ、僧が戒律を守らず、争いばかり起こして邪見がはびこり釈尊の仏法がその功力を

なくす時代をさす。年限は、釈尊滅後二千年以降といわれる。

ミリダ王 生没年不明。メナンドロス王ともい、**弥蘭王**とも書く。紀元前二世紀後半、アフガニスタン・インドを支配したギリシャ人の王。王は仏教の教理について仏教僧・那先比丘（ナーガセーナ）と問答を行い、仏教徒となったともいわれている。その問答が仏教とギリシャ文明の出会いとして有名。

文上・文底 経文の上、表面の文々句々を字義どおり読むことを文上といい、経文の奥底、根底をさらに深く読みとることを文底という。

〈ら行〉

羅什三蔵 らじゆさんぞう 中国姚秦（後秦）代の訳経僧。鳩摩羅什のこと。七歳で出家、諸国を遊歴し仏法を学び、

国に帰って大乘仏教をひろめた。その後、国師（僧官）の待遇を得て多くの訳経に従事。代表的なものに『妙法蓮華経』八巻、『中論』四巻など。

歴劫修行 りやつこうしゆぎよう 爾前（法華経以前の教え）の菩薩、二乗（声聞・縁覚）が無量劫（計りがたい長遠な時間）にわたって修行すること。直達正観（じきだつしやうかん）に対する語。

竜樹菩薩 りゆうじゆ 生没年不明。一五〇～二五〇年ごろの南インドの大乘の論師。大乘教の諸経典を注釈し、理論的基礎をあたえて大乘思想の振興に大きく貢献した。著書には『中観論』『十住毘婆沙論』『大智度論』などがある。

六訳 ろくやく 法華経の漢訳本のこと。六種類の訳のうち三訳だけが現存するので六訳三存ともいう。漢訳では羅什三蔵訳の妙法蓮華経がもつとも正確な名訳として著名である。



著者近影

著者略歴

創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル(SGI)会長、日蓮正宗法華講総講頭。富士短期大学経済学科卒業。創価大学・(財)民主音楽協会・公明党他の創立者。1983年、国連平和賞受賞。モスクワ大学・ソフィア大学名誉博士。北京大学・復旦大学・サンマルコス大学名誉教授。主な著書に『池田会長全集』(全10巻)、『人間革命』(現10巻)、『21世紀への対話』(A・トインビーとの対話集)、『人間革命と人間の条件』(A・マルローとの対話集)、『「仏法と宇宙」を語る』(全3巻)、『闇は暁を求めて』(R・ユイグとの対話集)、『二十一世紀への警鐘』(A・ペッチェイとの対話集)、『社会と宗教』(B・ウィルソンとの対話集)など多数。

生命と仏法を語る 検印廃止

上巻 定価 一三〇〇円

昭和六十一年十月三十日印刷
昭和六十一年十一月十八日発行

著者 池田 大作

発行者 富岡 勇吉

発行所 株式会社 潮出版社

東京都千代田区飯田橋三一一三

電話 東京 (03) 230230
230230 〇七四一(販売部)
230230 一四六八(編集部)

振替 東京五―六一〇九〇

郵便番号一〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替
えいたします。)

印刷 大日本印刷株式会社

©D. Ikeda 1986, Printed in Japan.

ISBN4-267-01095-1 C0015 ¥1300E

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めて下さい。